

とを口にしなかつた。マルファ・イグナーチエヴナも、彼の前では子供のことを思ひ出さないやうにした。そして誰かと自分の『赤ちゃん』の話をするやうなことがあると、その場にグリゴリー・ワシーリエキツチが居合さなくても、囁き聲で話したものである。マルファの氣づいたところでは、その墓場の一件以來、彼は専ら『神信心』に凝り出し、大概ひとり黙々として、『殉教者傳』に読み耽つたが、その都度、大きな圓い銀縁の眼鏡をかけるのであつた。聲をあげて読むのはごく稀で、大齋期オウロクの際くらのものであつた、約百記を好んで讀んだが、また何處からか『聖き父イサリク・シーリン』の箴言や教訓の寫しを手に入れて、辛抱よく長年のあひだ讀みつづけたが、それは殆んどまるつきり分からなかつた。しかし、分からないがために、こよなくその書物を尊び、かつ愛著したのかも知れない。最近になつて彼は、近所に信者があつたため、鞭打教の宗旨に傾倒し始めてかなり心を動かされたらしいが、その新しい信仰に改宗するほどの氣持にはなれなかつた。『神信心』の書物を耽讀したことから、彼の入相にはなほ更に大きな勿體らしさが加はつた。

恐らく、彼は神祕的な傾向を持つてゐたのかも知れぬ。ところで、六本指の嬰兒の出生とその死亡に引きつづいてまるでわざとのやうに、もう一つ奇怪な、思ひもよらぬ、突飛な事件が重なつて、彼自身が後日言つたやうに、彼の魂に『烙印』を捺したのである。それはかうである、ちやうど六本指の赤ん坊を葬つたその日のこと、マルファ・イグナーチエヴナがふと夜半に眼を醒ますと、生まれ落ちたばかりの嬰兒の泣き聲らしいものを耳に留めたのだ。彼女は愕然として良人を呼び起こした。こちらは耳を澄してゐたが、どうもこれは誰か唸つてゐるやうだ、しかも、『女らしいぞ』と言つた。彼は起き上が

つて着物を着た。それはかなり暖かい五月の夜であつた。上り段へ出て見ると、呻き聲は明らかに庭の方から聞こえて来る。しかし庭は夜になると屋敷の方から鏡をおろしてしまふ上に、ぐるりを高い堅固な塀で取り圍んであるから、中へはいれる口はない筈であつた。グリゴリーは家へとつて返すと、提燈を點して庭口の鍵を持つた。そして妻が、自分にはどうしても子供の泣き聲らしく聞こえる、きつと死んだ赤ん坊が自分を呼んで泣いてゐるのだと思ひこんで、ヒステリーのやうに怯えてゐるのには眼もくれず、黙つたまま庭へ出て行つた。茲で彼は明らかに、その聲は耳門ミミから程近く、庭の中に立つてゐる湯殿の中から漏れて來るのであつて、疑ひもなく女の呻き聲だといふことを確めた。湯殿の戸を開けて中を覗いた時、彼はその光景の前に立ち竦んだ。いつも街をうろつき廻つて、リザエータ・スメルヂャシチャヤといふ渾名で町ぢゆう誰知らぬ者もない宗教狂女が、邸内の湯殿へはいり込んで、たつたい赤ん坊を生み落としたばかりのところであつた。赤ん坊は女の傍に轉がつてをり、産婦は氣息奄々たる有様であつた。彼女は何ひとこと物を言はなかつたが、それは言ひたくても、もう口がきけないからであつた。しかしこの事件については特別に説明しなければならぬ……。

## II



ここに、グリゴリイが以前から抱いてゐた或る不愉快な穢らしい疑惑を、徹底的に裏書きして、彼の心を震撼させた特別の事情があつたのである。このリザエータ・スメルダシチャヤは恐ろしく背の低い娘で、死んだ後まで多くの信心ぶかい町の老婆たちに、『「二アルシと少しつきやなかつた」などと感慨深さうに述べられたほどである。二十歳になる彼女の健康さうに赤味を帯びただだつ廣い顔は、全く白痴の相をしてゐた。その目つきは柔和ではあつたが、じつと据つて氣味が悪かつた。彼女は生涯、夏冬とも跣に麻の襦袢一枚で歩き廻つてゐた。非常に濃い髪の毛は殆んど漆黒で、細羊の毛のやうにちぢれて、大きな帽子か何ぞのやうに彼女の頭に載つてゐた。その上、いつも地面や芥の中に寝るものだから土や泥によこれて、木の葉や木つばや、鮑屑などが喰つついてゐた。零落した宿無しで病身の父親イリヤはひどい飲んだくれで、もう永年のあひだ、やはりこの町の町人で物持の家に雇人のやうにして住み込んでゐる。リザエータの母親はもうとうに亡くなつてゐた。いつも病氣勝ちでじりじりしてゐたイリヤは、リザエータが歸つて来るたんびに、むごたらしく責め折檻した。しかし彼女は神聖な白痴、宗教狂人として町ぢゆうの世話を受けて暮らしてゐたので、あまり家へは寄りつかなかつた。イリヤの主人夫妻や、イリヤ自身や、その他、主に商人や商家の内儀などといった、憐み深い多くの町の人たちが、リザエータに襦袢ひとつきりといふやうな見苦しい服装をさせておくまいと何度骨折つてみたか知れず、冬になればきまつて外套を羽織らせたり、長靴をはかせたりしたものだ。しかし彼女は、大抵おとなしく着せられるがままになつてゐるが、いざその場を立ち去ると、きつと何處か、おもに寺院の入口などで、折角自分に恵まれた物を何から何まで、――頭巾であれ、腰巻であれ、外套であれ、長靴であれ、一つ残らずその場に脱ぎ棄てて、また以前の襦袢ひとつになつて、跣のまま立ち去るのであつた。

一度こんなことがあつた。當縣の新任の知事が何かの序でにこの町を視察した折、リザエータの姿を認めて、その美しい感情をひどく傷けられた。なるほどそれは、報告のとほり宗教狂女だと納得はしたけれど、それにしても若い娘を襦袢一枚でうろろさせておくのは、風儀を紊すことであるから、以後さやうなことのないやうにと注意した。しかし知事が立ち去つてしまふと、リザエータはまたもや以前のまま棄て置かれた。そのうちに、たうとう父親も死んでしまつた。さうすると彼女は孤兒になつたから可愛がられてゐるやうであつた。子供ですら彼女をからかつたり、辱めたりはしなかつた。とかく子供、殊に小學生といふものは腕白がちなものであるのに。彼女が見知らぬ家へつかつか入つて行つても、誰も彼女を追ひ出さうとはしないばかりか、却つていろいろ勧はつて、小錢をやつたりする。人が金をやると彼女はそれを受け取るが、すぐお寺か監獄の慈善箱へ持つて行つて、投げこんでしまふ。市場で輪廻や巻廻を貰つても、きつとそれを出あひがしらの子供にやつてしまふ。でなければ、町でも指折りの金持の奥さんを引き止めて、それをやるのだが、さういふ奥さんも、寧ろ喜んでそれを受け取るのであつた。そして自分は黒廻と水とよりほかは決して食べようとしなかつた。彼女はよく、大きな店へ入りこんで坐りこむことがある、そこには高價な品物や金などが出してあつても、店の主人は決して彼女を警戒するやうなことがなかつた。たとへ彼女の前へ何千留抛り出したまま忘れてゐても、その金を一哥だつて取られる心配のないことをよく知つてゐるからであつた。寺へは滅多に立ち寄らなかつ



た。夜は寺院の入口か、さもなければ他所の家の籬を越して（この町には塀がはりの籬が、今日でも隨所にあるから）、菜園の中で寝るのであつた。自宅へは、つまり亡父が雇はれてゐた主人の家へは、凡そ一週一度ぐらゐ姿を見せたが、冬分は毎日やつて来た。しかし、それもほんの夜だけで、入口なり牛部屋なりで泊つてゆくのであつた。人々は彼女がこんな生活によく堪へてゆくと思つて不思議がつたが、彼女にはそれがもう馴れつこになつてゐたのである。彼女は脊丈こそ短かかつたが、體格は人並はづれて頭丈にできてゐた。町の紳士連の中には、彼女がこんなことをするのはただ見得に過ぎないと断定する人もあつたけれど、どうもそれでは辻褃が合はない。彼女は一言も口をきくことができないで、ただ時々妙に舌を纏らせて、ムムと唸るだけであつた——こんな風では、見得も外聞もあつたものではない。さて或る時こんなことがあつた。（大ぶん以前の話だが）明るくて暖かい九月の或る満月の夜、この町でいへば大ぶん遅い刻限に、遊び疲れて強か酔つ拂つたこの町の五六人の紳士の群れが俱樂部から『裏町』づたひに家路を辿つてゐた。路地の兩側には籬が連つて、その後ろに隣接した家々の菜園が続いてゐた。その路地は、この町で時によつては川と呼んでゐる、臭い細長い水溜りに架け渡した板橋の方へ抜けてゐた。さてこの一行が、籬の葦麻いんまや山午夢の中に眠つてゐるリザゼータの姿を見つけたといふ譯である。銘酩した連中はげらげら笑ひながら、その傍に立ちどまると、口から出まかせに猥褻な冗談をいひ始めた。と、突然一人の若い紳士が、まるでお話にもならぬ奇矯な問題を考へついた。『誰か、この獸を女として遇することができるだらうか。さあ、今すぐにでもできる者があるかしら』云々、といふのであつた。人々はさも穢ららしいといふやうな傲然たる態度で、そんなことは到底不可能だと答へ

た。しかしこの一行の中に偶然居あはせたフォードル・パーヴロキッチが直ぐ前へ飛び出して、女として遇することができる、大いにできる、しかも獨特な或る妙味さへある云々、と斷言した。實際その頃の彼は、わざと道化の役を引き受けて、何處へでも出しやばつて、みんなを面白がらすのが楽しみであつた。で、見かけは對等の附きあひでも、その實一同にとつては全然下種下郎に過ぎなかつた。それは丁度、彼が先妻のアデライダ・イワーノヴナの計報を、ペテルブルグから受け取つたばかりの頃であつたが、然も彼は帽子に喪章をつけたまま、飲み歩いたり、醜態の限りを盡してゐたので、この町で最もひどい放蕩者でさへ、彼を見ると、眉を擧めるくらゐであつた。一行は無論この突飛な意見を聞くと、げらげら笑つた。そしてその中の一人などは、フォードル・パーヴロキッチの尻押しをしにかかつた程であつたが、他の連中は、やはり尙、並はづれの陽氣さは失はなかつたけれど、一層頻繁にべつべつと唾を吐いた。そしてやがて一同はその場を離れて先きへ歩を進めた。その後フォードル・パーヴロキッチは、自分もその時みんなといつしよに立ち去つたことを斷乎として強調したが、果してその通りであつたか否か、現に誰ひとり確かなことを知つてゐる者もなければ、曾て知つてゐた者もないのである。しかしそれから五六ヶ月もすると、リザゼータが大腹を抱へて歩いてゐるといふことを、町ぢゆうの者が甚く憤慨して取沙汰し始めた。そしていつたい誰が犯した罪なのか、辱しめを加はへたのは何者かと、様々に問ひ訊したり、穿鑿したりした。ところが丁度そのとき、その凌辱者は他ならぬフォードル・パーヴロキッチだといふ奇怪な噂が、ばつと町ぢゆうに擴がつた。この噂はいつたい何處から出たものであらう？ 例の酔つばらひの一行のうち、丁度その時この町に残つてゐたのは、たつた一人の仲間で、



それも家庭を営み、年頃の娘を幾人も持つてゐるやうな、相當の年配で分別さかりの五等官であるから、たとへ何かそこに根據があつたとしても、決してそんなことを言ひ觸らす筈がなかつた。爾餘の五人ばかりの仲間は當時それぞれ町を引きあげてしまつてゐた。しかしその風説は紛ふ方なくフォードル・パーヴロキッチを自當に流布されたもので、今だにさう信じられてゐるのである。無論、當人はそのことを大して辯解もしなかつた。彼はそんなよそらの商人や町人どもを相手に取することを潔しとしなかつた。當時の彼は鼻息が荒くて、自分が一生懸命お太鼓を持つてゐる官吏や貴族の仲間とでなければ、口もきかない有様であつたからである。グリゴリイが全力を擧げて主人のために敢然として立つたのは、この時である。彼はさうした誹謗に對して主人を辯護したばかりか、主人のために喧嘩口論までして、多くの人の意見を覆した。『あの下種女の自業自得だ』と、彼は斷乎としていつた。そして當の相手は『あのねぢ釘のカルプ』(それは當時、町ぢゆう誰知らぬ者もない恐ろしいお尋ね者で、縣の監獄を脱走して、この町に身を潜めてゐた男である)以外の誰でもないと突張つたものである。この推測はいかにも誠しやかに思はれた。人々はこのカルプのことを憶えてゐた。丁度その秋のはじめ頃まさしくあの夜の前後に、彼が町を徘徊して三人ばかり追剣を働いた事實はまだ人の記憶に新しかつたからである。しかしかうした事件や風説は、哀れな信心きちがひに對する町の人たち一般の同情を殺がなかつたばかりか、人々はますます彼女を大事にかけて保護するやうになつた。或る裕福な商家の婦でコンドラーチエワといふ女は、まだ四月の末ごろからリザエータを自分の家へ引き取つて、お産の済むまでは外へ出さないやうに取り計らつたほどである。家人は夜の目も寝ずに彼女を見張つてゐたが、結局その苦心の甲

斐もなく、リザエータは最後の日の夕方、突然、コンドラーチエワの家をこつそり抜け出して、フォードル・パーヴロキッチの家の庭に姿を現はしたのである。ただならぬ體の彼女がどうして高い堅固な庭の塀を乗り越えたかといふことは、一つの謎として残つてゐる。或る者は誰か人に扶けられたのだともいふし、また或る者は何か精靈もののけが運び入れたのだといつた。が、何より確らしいのは、それが極めて難かしいことではあるけれど、自然な方法で行はれたといふ説である。つまりリザエータは他所の菜園へ入つて寝るために、籬を越すことが上手であつたから、フォードル・パーヴロキッチの家の塀へもどうにかして這ひあがつて、身體からだに障るとは知りながら、妊娠の身をも顧みず、そこから飛びおりたものであらう。グリゴリイはマルファ・イグナーチエワの許へ駆けつけると、彼女をリザエータの介抱にやり、自分はちやうど折よくつい近所に住んでゐる、年寄りの産婆を迎へに飛び出して行つた。赤ん坊は助かつたが、リザエータは夜の引き明けに死んでしまつた。グリゴリイは赤ん坊を抱き上げて家へ連れ戻ると、妻を坐らせて、その乳房へ押しつけるやうにして、赤ん坊を彼女の膝へ載せた。『神様の子だよ——孤兒ちうもんは、みんなの親類だが、おいらにとつちやあ、況してのことぢや、これあ家の赤ん坊がおいらに授けてくれたのに違えねえだが、それにしてもこの子は、惡魔の息子と天使の間にできたもんだぞ。育ててやるがええだ、もうこれから先きや泣くでねえだぞ。』そこでマルファ・イグナーチエワはその子供を育てることになつた。洗禮を授けてパーゼルと命名されたが、父稱は誰いふとなく、フォードロキッチと呼ばれるやうになつた。フォードル・パーヴロキッチは何ら抗議を唱へるでもなく、寧ろそれを面白がつてゐたが、それでも一生懸命にすべての事實を否定しつづけた。彼がこの捨子を引



き取つたといふことは、町の人の氣に入つた。後になつてフォードル・パーヴロキッチはこの孤兒のため、苗字まで作つてやつた。それは母親の渾名の『惡臭ある女』から取つて、スメルチャコフとしたのである。このスメルチャコフが成人して、フォードル・パーヴロキッチの第二の下男として、この物語の初めのころ、老僕グリゴリー夫婦と共に、傍屋はなに住んでゐたのである。彼は料理番として使はれてゐた。この男についても、何かといろいろ述べて置く必要があるのだが、こんな有觸れた下男どものことに、餘り長く讀者の注意を引きとめるのも如何と思はれるから、スメルチャコフに關しては、この先き物語の進展につれて、自づから明瞭になることを期待して、一先づ前の續きに移ることにしよう。

### 熱烈なる心の懺悔——詩

アリョーシヤは、父が修道院からの歸り際に馬車の中から大聲をあげて命令した言葉を聞いて、暫らくの間ひどく當惑して、その場に立ちつくした。しかし別段、棒立ちに立ち竦んだ譯ではない。そんなことは彼にはありえなかつた。それどころか、恐ろしく心配はしながらも、彼は早速、修道院長の勝手

口へ行つて、父が上で仕出かした一部始終を聞き取つたのであつた。それから彼は、今自分を惱ましてゐる問題も途々何とか解決がくだらうといふ望みを抱きながら、兎も角、町をさして急いだのであつた。前もつて斷つておくが、『枕も蒲團も引つかついで』家へ歸つて來いと父の命令も喚き聲も、彼には一向おそろしくはなかつた。あゝして仰山に聞こえよがしに喚き立てて歸宅せよとの命令は、ただ單に謂はば『羽目をはづした』出まかせの、寧ろその場の潤色に用ひられたものにすぎないことを彼は百も承知してゐたのである。例へばつい最近、この町のさる商人が、自分の命名日にあまり飲み過ぎたため、もうウオトカはよしなさいといはれたのに腹を立てた擧句、客の前をも憚らず、突然、自分自身の食器を打ち砕いたり、自分や妻君の着物を引き裂いたり、家具や、果ては屋内の硝子まで敲き毀したものだ、これも同じく潤色のためで、けふ父が演じたのも、これと同巧異曲的一幕であつた。勿論その喰ひ酔つた商人も翌る日はすつかり酔が醒めて、自分の毀した茶碗や皿を惜しがつたものだ。だからアリョーシヤは、老父も明日になつたらまた自分を修道院へ返してくれる、いや今日にも返してくれるかも知れぬことを見抜いてゐた。それに彼は父が、他の者ならともかく、自分を侮辱しようなどと考へる筈がないと、固く信じてゐた。彼は世の中に誰ひとり、自分を侮辱しようとする者はない、否、侮辱しようとする者がないばかりか、侮辱しうる者がないと信じてゐた。これは理窟なしに斷然、彼の心に決定してゐる公理であつた。この意味で彼は、何らの動搖もなしに前進することができたのである。しかしこの時、彼の心中には、全く種類を異にした或る別の疑懼の念が蠢動してゐた。しかも自分ではつきりとそれを把握することができないために、それは一層惱ましく感ぜられるのであつた。それは



まさしく女性に對する恐怖であつた。つまり先きほどホフラコワ夫人から渡された手紙で、何か用事があつた。この要求と、そこには是非行かねばならぬことが、忽ち彼の胸に何か妙に惱ましい感じを起こさせたのである。そして修道院内で相次いで起つたいろいろの事件や、今また院長の許で演ぜられた醜態などにも拘らず、この感じは午前中を通して、次第々々に惱ましさを増して彼の心を疼かせて行つたのである。

彼が恐れたのは、カテリーナ・イワーノヴナが何を言ひ出すか、またそれに對してこつちから何と答へたものか、そんなことが分からないためではなかつた。また一般的に女としての彼女を恐れた譯でもなかつた。いふまでもなく、彼は女といふものをあまり知らなかつたが、しかしさうは言つても、ほんの幼少の頃から、修道院へはいるすぐ前まで、ずつと女の間ばかりで暮らして來てゐるのだ。彼が恐れたのは正しくこの、カテリーナ・イワーノヴナといふ女なのである。そもそも初めて逢つたその時からして、彼にはこの女が恐ろしかつたのである。尤も、この女に會つたのはほんの一度か二度、或ひは三度くらゐなものである。しかしいつか何かの拍子で、二言三言ことばを交したことがあつた。彼女の姿は、美しく誇らかで威嚴のそなはつた娘として彼の記憶に残つてゐた。しかし彼の心を惱ましたものはその美貌ではなく、何か他のことであつた。抑この恐怖の本體を掴むことができないために、一層彼の心中に恐怖が募つてゆくのであつた。この娘の目的が高潔なものに違ひないことは、彼もよく知つてゐた。彼女は自分に對して既に罪を犯した兄ドミトリイを救はうと、一心になつてゐる、しかもそれはひ

たすら寛大な心からさうしてゐるのである。ところが、今それを呑みこんでゐる上に、さうした美しい寛大な氣持に對して敬意を抱きながらも、彼はその女の家になづくにつれて、脊筋をぞつと寒けが走るやうに感じた。

彼の想像では、その女と非常に親密な間柄の兄イワン・フォードロキツチも、今は彼女の家へ來てゐなさうであつた。兄イワン・フォードロキツチは今ごろは父と一緒にゐるに違ひなかつた。ドミトリイが來てゐないことは一層確實であつた。なぜか彼にはさういふ豫感がしたのである。して見ると、二人の談合は差し向かひで行はれることになる。で、彼はこの宿命的な會見をする前に、ドミトリイのところへ駈けつけて、ひとめ會つて來たいやうな氣がしてならなかつた。さうすれば、この手紙は見せないうで、何かちよつと打ち合はせて置くこともできる。しかし、兄ドミトリイは、かなり遠方に住んでゐるし、やはり今は恐らく留守らしい氣がした。一分間ばかりその場に佇んでゐたが、つひに彼はきつぱりと心を決めた。慌しく習慣的な十字を切ると、すぐに何かにつこり一つほほ笑んでから、彼は自分にとつて恐ろしいその婦人の許へ敢然として歩き出した。

彼は女の家をよく知つてゐた。しかし、大通りへ出て廣場を通つたりなどしてゐたら、かなり道程が遠くなるのであつた。小さい町の癖に、家がまばらに建つてゐるので町内の距離はいい加減大きいのである。それに父親も、彼を待つてゐて、ことによると、まだ例の言ひつけを忘れないで、またしても氣紛れなことを言ひ出さぬとも限らないから、彼方へも此方へも間に合ふやうにするには随分急がなくてはならない。かれこれ思ひ廻らした擧句、彼は裏道をとほつて道程を短縮しようとして心に決めた。彼は町内



のさうした抜け道を五本の指のやうによく知つてゐた。裏道といへば荒れ果てた垣根に沿つて、殆んど道でない處へ通じてゐるので、どうかすると、他所の籬を踏み越えたり、他所の庭を突き抜けたりしなければならぬ。尤も、他所といつたところで、みんな彼を知つてゐたので、誰でも彼に向かつて挨拶をした。かういふ道を通つて行きさへすれば大通りへ出るのに道程が半分くらゐ近くなる。一個所、父の家のすぐ傍を通り過ぎなければならなかつた。それは父の家の庭と境を接してゐる隣家の庭の脇であつた。その庭は、窓が四つある歪んで古ぼけた小家に附屬してゐた。その小家の持主といふのは、娘と二人ぐらしの足の萎えた老婆で、この町の町人だといふことは、アリョーシャもよく知つてゐた。その娘はかつて都で小間使ひをしてゐて、ついこの間まで將軍の邸などで暮らしてゐたのが、一年ばかり前から老母の病氣のために家へ歸つて派手な着物を見せびらかしてゐた。しかし、この老婆と娘は貧窮の極に達して、隣り同志のよしみによつて毎日のやうにカラマゾフ家の臺所へ、スープや麵麩を貰ひに来るほどになつた。マルファ・イグナーチエヴナも、二人に氣前よく分けてやつてゐた。ところが、この娘はスープの無心にまで来るくせに、自分の着物は一枚も賣らうとしなかつた。そればかりか、その中の一枚などは、やたらに長い裳裾のついたものであつた。アリョーシャはもとより、この最後の事實について、ゆくりなくも、町のことならば何から何まで知つてゐる例のラキーチンから聞かされたのであつたが、いふまでもなく、聞くと同時に、すぐにまた忘れてしまつた。けれど今、隣家の庭の前まで來たとき、ふつとこの裳裾のことを想ひ出すと、それまで物思ひに沈んで、うなだれてゐた頭をひよいと振り上げた……と、實に思ひもかけぬ人に出くはした。

隣家の庭の籬のむかふから、兄のドミトリイ・フォードロキッチが何か踏臺に乗つて胸から上を現はしてゐた。そして、しきりに合圖をしながら彼を手招きしてゐるが、明らかに彼は、大聲に呼ぶどころが、人に聞かれはしないかとの心配から、口に出しては一ことも物をいはなかつた。アリョーシャはすぐに籬の傍へ駆け寄つた。

「ああ、お前の方からこちらを振り向いてくれてよかつた。でなかつたら、もう少しでお前を大聲で呼ぶところだつたよ。」と、さも嬉しうに、ドミトリイ・フォードロキッチは慌しく囁いた。「さあ、ここへ上がつて来いよ！ 早く！ ああ、ほんとにお前が来てくれてよかつた。おれは今もお前のことを考へてゐたところだ……」

アリョーシャの方でも嬉しかつたが、ただどうして籬を越えたものかと途方に暮れた。しかし、『ミーチャ』が逞ましい手で弟の肘を掴んで、飛び越えられるやうに助けてくれた。アリョーシャは法衣の裾をからげると、町の跳小僧のやうな身軽さで、ひよいと籬を跳び越した。

「さあ行かう！」有頂天なささやきがミーチャの咽喉を洩れた。「どこへよ？」とアリョーシャも、ぐるりを見廻して自分の立つてゐるところがまるつきりがらんとした庭で、二人のほかには誰もゐないのを見て、ささやいた。それは、小さな庭ではあつたが、それでも持主の家の建つてゐるところまでは、そこから五十歩以上もあつた。「ここには誰もゐやしないのに、何だつてそんな小さな聲をするの？」

「何で小さな聲をするつて？ えい、糞！」と、ドミトリイ・フォードロキッチは不意に思ひ切り聲



を張りあげて叫んだ、「なるほど、何だつて小さな聲なんか出したのだらう。なあ、人間の本性なんて、かういふ辻褃のあはんことを仕出かすものだ。おれは内證でここへ忍びこんで、或る秘密を見はつてゐるんだ。譯は後で話すが、それを秘密だと思ひこんでゐるものだから、急に口をきくことまで秘密にして、何の必要もないのに、馬鹿みたいに小さな聲を出したのさ。さあ行かう！ そら、あすこだよ！ それまで黙つてくれ。おれはお前を接吻してやりたいんだ！

この世の神に御榮光あれ

わが身の神に御榮光あれ……

こいつをおれは、たつた今お前が来るまで、此處に坐つて繰りかへしてたのさ……」

庭は一町歩か、それとも、もう少し多いくらゐの廣さであつたが、樹木はぐるりにだけ四方の垣根沿ひに、幾本かの林檎の樹と、楓に菩提樹、白樺が各一本づつ植ゑてあるだけであつた。庭の中央はがら空きで、ささやかな草地になつてゐて、夏になると十四五貫の乾草が刈り取れるのであつた。持主は春から先きを幾留かでの庭を賃貸してゐた。まだほかに蝦夷莓やすぐりやグースベリーの畑があつたが、これらもやはり垣根の近くであつた。野菜畠も家のすぐ近くにあつたが、これは最近つくられたばかりである。ドミトリー・フォードロキツチは母屋から最も離れた庭の隅へ客をつれて行つた。すると、こゝんもり繁つた菩提樹の木の間の、すぐりや接骨木や莢叢やライラックの叢みの中から、忽然として、古ぼけて、まるで殘骸のやうになつた緑いろの四阿が現はれた。黒ずんでゐて、今にも倒れさうになつて居り、壁は格子になつてはゐるが、屋根が葺いてあつて、まだ雨露を凌ぐことができさうである。この

四阿がいつ建つたかは知る由もないが、言ひ傳へによると、何でも今から五十年ほど前に、當時この家の持主であつたアレクサンドル・カルロキツチ・フォン・シュミットといふ退職中佐によつて建てられたものらしい。しかし、すつかりもう朽ち果てて、床は腐り、床板はぐらついて、用材からは濕つぽい臭ひがしてゐた。四阿の真中には木製の緑いろの卓が地面へ掘立てになつてゐて、そのぐるりを、同じく緑いろの床几が取りかこんでゐるが、それにはまだ腰かけることができた。アリオーシャは最初から兄の浮き立つた様子に氣づいてゐるが、四阿へはいると、卓の上にコニャクの小壘と、杯が置いてあるのを見て取つた。

「これあ、コニャクだよ！」とミーチャは笑ひ出した、「もうお前は『また酔つ拂つてる』とでもいふやうな眼つきをしてるな。幻影を信じちやいかんよ。」

偽り多く空ろなる人を信ぜず、

おのが疑惑を忘れたまへ……

おれは酔つ拂つちやゐないんだ、ただ『玩味してる』だけだ。これはお前のラキーチンの豚野郎の言ひ草だよ。彼奴はそのうちに五等官ぐらゐにはなるだらうが、やつぱり『玩味する』式の言ひ方は止めないだらうよ。まあ坐れ。おれはね、アリオーシカ、お前を抱いて、潰れるほどの胸へ緊めつけてやりたいんだよ。だつて、世界中に……ほんたうに……(いいかい！ いいかい！) ほ・ん・たうにだよ……おれが愛してゐる人間といへば、お前一人つきりなんだものなあ！」

この最後の一句を發言する時、彼は殆んど前後を忘却するほど昂奮してゐた。



「お前一人つきりなんだよ、いや、もう一人おれは或る『卑しい女』に惚れこんでゐる。そのためにおれは破滅してしまつたんだ。しかし、惚れこむつていふのは愛することぢやない。惚れるのは憎みながらでも出来る。よく憶えとけよ！ 今のところおれは話すのが愉快だ！ まあ坐れよ、この卓の前にさ。おれはかう傍に坐つて、横からお前の顔を見ながら、何もかも話してしまふからさ、お前は黙つてるんだぜ、おれが何もかも話しちゃふからな。だつて、もういよいよ日限が来てしまつたんだからなあ。だが、いいかい、おれは實際そうつと話さなきゃならん、と考へたんだよ。だつて此處には……此處には……どんな意外な聴耳が立てられないにも限らないからなあ。さあ、すつかり譯を話すよ、以下次號つて奴をさ。一體おれはどうして、かうお前のことばかり考へて、この四五日、いや現に今だつて、お前を待ち焦れてゐたんだらう？（おれがここへ御輿を据ゑてからもう五日目だよ）。この四五日といふもの！ それはかうだ、お前一人つきりに何もかも話したかつたんだ。なぜつて、さうしなくつちやならないからだよ。是非お前が必要だからさ。なぜつて、おれは明日にも雲の上から飛びおりのからさ、明日はいよいよおれの生涯がおしまひになつて、そしてまた始まるのだからさ。お前は山のてつぺんから穴の底へ落つこちるやうな氣持を経験したことがあるかい、夢にでも見たことがあるかい？ ところが、おれは今、夢ではなく、實際に落つこちてるんだよ。それでゐて怖くもないのさ、だからお前も怖がることはないよ。いや、怖いには怖いけれど、いい氣持なんだ。いや、いい氣持といふより、有頂天なんだ……ええ畜生つ、どつちにしたつて同じこつた。強いところ、弱いところ、女々しいところ……ええ何だつて構ふもんか！ ああ自然は讚美すべき哉だ。御覽よ。太陽の光りはどうだ、空は晴れわた

り、木の葉はどれも青々として、すつかりまだ夏景色だ、いま午後の四時まへ、何て静かだらう！ お前どこへ行くところだい？」

「お父さんのところへ。しかしその前にカテリーナ・イワーノヴナのところへ行かうと思つて。」

「なに、あの女のこと親父のところへだつて！ うふ！ 何といふ符合だらう！ 第一おれがお前を呼んだのは何のためだらう、お前を待ち焦れてゐたのは何のためだらう、おれが心の鬩の一つ一つ、いや、肋骨の一枚々々で、お前の来るのを待ちあぐねてゐたのは何のためだらう？ それはほかでもない、おれの代りにお前をその親爺のところへやつて、それからあの女の、つまりカテリーナ・イワーノヴナのところへも行つて貰つて、それでもつて親爺の方も、あの女の方もすつかり鼻をつけようと思つてだよ、天使をつかひに遣らうつて譯さ。おれは誰だつて使ひにやれたのだけれど、どうしても天使に行つて貰はなきゃならなかつたんだ。だのに、お前は自分からあの女と親爺のところへ行くところだなんて。」

「兄さんはほんとに僕を使ひにやりたかつたの？」かう痛ましげな表情を面に浮かべながら、アリョーシャが口走つた。

「待て待て、お前はそれを知つてたんだな。それに、お前が直ぐに何もかも呑みこんでしまつたことは、ちやんと分かるよ。しかし、黙つてて呉れ、暫く黙つてて呉れ、悲しんで呉れるな。泣くんぢやな

5-1

ドミトリイ・フョードロキツチは立ちあがると、考へこみながら指を額にあてがつた。

「あの女の方からお前を呼んだんだらう、あの女がお前に手紙をよこすか、どうかしたんで、それで出



かけるところだつたんだろ？ でなきやお前が出かける譯がないからなあ。」

「これが手紙ですよ。」アリオーシャはポケットから手紙を取り出した。ミーチャは手早くそれに目をとほした。

「それにお前が裏道を通つて行かうなんて！ おお神々さま！ 弟に裏道を通らせて下さつて、まるでお伽噺にある馬鹿な漁師に黄金の魚が手に入つたやうに、わたくしと出會はして下さつたことをほんとうに感謝いたします。さあ、聞いてくれ、アリオーシャ、聞いてくれ、弟。今こそおれは何もかも言つてしまふつもりなんだよ。どうせ誰かには話さなきやならないんだからなあ。天上界の天使にはもう話したが、地上の天使にも話さなきやならない。お前は地上の天使なんだよ。よく聞いて、判断して、そして赦してくれ……。おれは誰か一段うへの人に赦して貰はなきやならないんだ。いいかい、もし或る二人の人間があらゆる地上の絆を断ち切つて、どこかまるで稀有な世界へ飛んで行くとする、否少くともその中の一人が、飛んで行つて滅びてしまふに先だつて、もう一人のところへやつて来て、これこれのことをしてくれと、臨終の床の中でもない限り、他人に持ちかけることのできないやうなことを頼んだとしたら、その男はそれを諾いてやるだらうかどうだらう？……もしそれが親友か兄弟であつたとしたら？」

「僕は諾いてやります。けれどそれが何か話して下さい、一刻も早く話して下さい。」とアリオーシャが言つた。

「一刻も早く……。ふむ。まあせくなよ、アリオーシャ。お前はいやにせいて氣を揉んでるんだよ。」

今は何も急ぐことなんかありやしない。いま世界は新しい道へ出たんだものなあ。ほんに、アリオーシャ、お前が有頂天になれるほど考へ抜かなかつたのは残念だよ！ それにしても、おれは一體何を言つてるんだ？ お前が考へ抜かなかつたなんて！ この文盲のおれがこんなことを言つたらどうだい？

『人よ、氣高き者となれ！』

これは誰の詩だつたつけなあ？」

アリオーシャは暫く待つてゐようと心を決めた。彼は自分の仕事は何もかも、今は此處にあるのかも知れないと考へたのである。ミーチャは一瞬のあひだ卓に肘をついて、掌へ頭を凭せなら物思ひに沈んだ。二人ともちよつと沈黙に落ちた。

「アリオーシャ、」とミーチャが言つた、「お前だけは笑つたりなんかしないね！ おれは……自分の懺悔を……シルレルの悦びの頌歌でもつて切り出したいのだ。An die Freude で以つて！ だが、おれは獨逸語は知らないんだ。ただこの An die Freude だけ知つてるのさ。しかし、おれが酔つ拂つてこんなことを言ふと思はないでくれ。おれはちつとも酔つ拂つてなんかゝるないんだよ。コニャクはあるにはあるけれど、酔ふには二本なくつちやなあ。」

\*サイリーナスは紅ら顔して

つまづきやすき驢馬に乗り……

だが、おれはこの壇の四半分も飲んぢやあゝるないのだからサイリーナスぢやない。サイリーナスぢや

\*希臘神話中の人物、酒神バツカスの従者のこと。



ないが強者だよ。だつて、もう永久に覺悟の臍がきまつてるんだからなあ。いや、こんな地口は赦してくんなよ。今日は地口どころぢやない、まだいるんなことを赦してくれなくちやならないんだよ。だが心配することはないよ、おれは下手に潤色を施してるんぢやない。眞面目なことを話してゐるのだ。さつそく問題に移るよ。おれは自分の魂を猶太人みたいなものにしやしない。が、待てよ、あれはどうだつたけな……」

彼は頭を擡げて考へこんでゐたが、不意に熱狂した調子でうたひ始めた。

「まどふものなく、人馴れず、

心ちひさき野の人は

岩屋の奥に身をひそめ、遠近の野をさすらひて

遊牧の民は野を荒らし……

獵人は槍と矢をもちて

森より森と嚴めしく走りゆきしか……

悲しさよ、波のまにまによるべなき

岸にすてられ、果つる人！

オリムピア 山を下りて、母のセレース、

さらはれし愛し娘のプロセルピンの  
あとを追ひしが、

心なき世はさみしくて。

身をよするところもあらず、

よろこびて、むかふる人の一人とてなく、

このあたり、いづくの寺も

神を崇むるけしきとてなく。

野の實り、甘き葡萄の房さへも

うたげの席を賑はさず

血にそみし祭りの壇に

いけにへの残のけぶり くゆるのみ

悲しき睥もてセレースが

ふりさけ見れば、かなたには

穢れの底になづみたる

人の姿の見ゆるのみ」

獻穢の聲が突然ミーチャの胸から迸り出た。彼はアリオシーシャの手を執つた。



「なあ、きやうだい、けがれの底なんだ。現におれはけがれの底に沈んでゐるんだ。人間といふものはこの地上で、怖ろしくいろんな目にあふものだよ、怖ろしくいろんな不幸な目にさ！どうか、このおれを、コニャクを飲んだり放蕩な真似をするだけの、將校の肩書を持った下種だとは思はないでくれ。おれはまるで、このことばかり考へてゐるんだよ。この深い穢れに沈んだ人のことをさ。嘘を言つてゐるのでさへたければなあ。いや、おれは今どうか嘘をついたり、空威張りをしたりはしたくないものだ。おれがこの人のことを考へるといふのも、つまりは自分が同じやうな人間だからさ。

穢れのうちよりわが魂

救ひいだして立たむとし、

昔ながら、母なる土と

とこしへに結び合ひにき

しかし、ただどうしておれが大地と結び合つたものか、それが問題なんだ。おれは大地を接吻もしなければ、大地の胸を切り裂かうともしない。おれに百姓か牛飼ひにでもなれつていふのかい？かうしておれは進んで行きながら、自分が悪臭と汚辱に足を突つこんだのか、それとも光明と歡喜の中へ踏み入つたのか、とんと見當がつかないのだ。こいつがどうも厄介なんだよ、この世の中のことといへば一切合切が謎なんだ！おれが深い深い放蕩三昧の底へはまりこんで行くやうな時には（おれにはそんなことより他に何もできやしないのだ）、いつもおれは、このセレーズの歌と『人』の詩を読んだものだ。しかし、それがおれを矯正しただらうか？決して決して！だつて、おれはカラマゾフなんだから。

どうせ無限の底へ飛び込むのなら、いつそ思ひ切りまつさかさまに落ちるがいいんだ、しかも、そんな恥かしい状態に落ちるのを喜んで、それを自分にとつて美的だと考へてゐるのだからなあ。そして、かうした屈辱の眞只中で、おれは不意に、讚美歌をうたひ出すのだよ。たとへおれは呪はれた穢ない下劣な人間にもせよ、神様の着てござる衣の端に接吻したつていい筈だ。それと同時に、たとへ悪魔の後ろについて行つても、おお神様、わたしはあなたの子供です。わたしはあなたを愛します、そして悦びを感じます。この悦びなくしては世界も存立することができません。

とこしへのよろこび、

ありとある人のところをうるほす、

奇しくもわきたつ力、

いのちの杯をもやす。

一寸じの草をも光にむかはせ、

混沌の闇に明るき時をつくり、

占星師にもえ知られぬ

あまたの星を空にみたす

うるはしき自然の胸に

生きとし生けるものは悦びに酔ひしれ、



あらゆるもの、ありとある民草を  
その後につき従へぬ。

不幸なる人には友と

葡萄のつゆと、美の神の花の冠を

蟲には——情慾を興へ、……

天使は——神にむかふ

しかし、もう詩は澤山だ！ ついおれは涙をこぼしたよ、まあ存分に泣かせてくれ。こんなことは馬鹿げてゐて、みんなは笑ふだらうけれど、お前だけは笑はないね。そうら、お前の目も光つてゐるぢやないか。もう詩は澤山だ。おれは今お前に『蟲けら』の話をしてやるよ、あの、神様から情慾といふものを授かつた蟲けらの話をさ。

『蟲には——情慾を！』

おれはつまりその蟲けらなのさ。これは特別におれのことを言つたものなんだよ。われわれカラマゾフの一族はみんなさういふ人間なんだ。お前のやうな天使の中にもその蟲けらが巣くつてゐて、お前の血の中に嵐を捲き起こすんだ。うん、それは嵐だ。だつて、情慾は嵐なんだから、いや、あらし以上だよ！ 美——こいつは恐ろしい、おつかないものだぞ！ はつきりと決まつてゐないから怖ろしいんだ、しかもはつきり決めることができないのだ。だつて、神様は謎より他に見せてくれないんだからなあ。美の中では両方の岸が一つに出合つて、すべての矛盾がいつしよに住んでゐるのだ。おれはね、ひどい

無教育者だけれど、このことは随分と考へたものだよ。なんて神秘的なことだらけだらう！ この地上では人間を苦しめる謎が多すぎるよ。この謎が解けたら、それこそ、濡れずに水の中から出て来るやうなものだ。ああ美が！ それに、おれの我慢できないことは、心の氣高い、然も勝れた智能を持つた人間が、ともすれば、聖母の理想をいだいて踏み出しながら、結局ソドムの理想に終ることなんだ。もつと恐ろしいのは、すでに姦淫者ソドムの理想を心に懐ける者が、しかも聖母の理想をも否定し得ないで、さながら純情無垢な青春時代のやうに、ほんたうに、心から、その理想に胸を燃え立たせることだ。いや、人間の心は廣大だ、あまり廣大すぎる。おれはそいつを縮めて見たいくらゐだ。ええ畜生、何が何だかさつぱり分かりやしない、ほんとに！ 理性では汚辱としか見えないものが、感情ではしばしば美に見えるんだ。ソドムの中に美があるのかしら？ とところが、お前、ほんたうのところ、大多数の人間にとつては、このソドムの中に美があるんだよ、——お前はこの秘密を知つてゐるかい？ 美はおそろしいばかりぢやない、神秘的なんだ——それが怖いのだ。つまり悪魔と神が戦つてゐて、そしてその戦場が人間の心なんだよ。ところが人間といふものは自分の痛みより他には話したがらないものさ。さあ、これかちが、本當の用談だよ。」



## 熱烈なる心の懺悔——逸話

「あつちでおれはするぶん放蕩をしたものだ。さつき親爺は、おれが若い娘を誘惑するために、その都度何千といふ金を費つたなどと言つたつけない。あれは豚の空想で、決してそんなことはありやしないのさ。もしあつたとしても、『あの事』のために金がいつたのぢやないよ。金はおれにとつてはただ附屬物だ、魂の熱源だ、道具だ。今日れつきとした女がおれの戀人であつても、あすは淫賣がそれに代つてゐるのだ。おれはどちらも楽しませてやるのだ。金は両手で掬つて抛げてやる、音楽だ、騒ぎだ、ジブシイだ。必要があればそんな連中にも金をやる。すると取るわ、取るわ、氣ちがひのやうになつて取る、これはおれも認めなくちやならない。しかもみな満足してお禮を言ふよ。奥さん連もおれを可愛がつてくれたよ。皆が皆といふ譯ではないが、そんなこともあつたつけ、よくあつたつけ。だが、おれはいつも路次が好きだつた。廣場の裏の、暗い寂しい、曲がりくねつた小路が好きだつたよ、——そこには冒險がある、思ひもかけぬことがある、泥の中に隠れた鑽石がある。いや、おれがいつてるのは譬喩なんだよ。あの町には、實際に形をそなへた、そんな路次なんかありやしなかつたが、精神的な路次があつた

のさ。だが、お前がおれのやうな人間だつたらこの路次の意味が分かるんだけれど。おれは放蕩を愛した、放蕩の恥辱をも愛した。そして残忍を愛したのだ。これでもおれは南京蟲ぢやなからうか、あの有害な蟲けらでは？ 何しろ、カラマゾフだからなあ！ ある時、町ぢゆう總出でピクニックをやつたことがあるよ。七臺の三頭立橋で出かけたんだ。冬のことだつたがな、橋の中の暗闇にまぎれて、おれは隣りに坐つてゐた娘の手を握り緊めにかかつたんだ、その娘に一つ接吻を許させようと思つたのさ。それは官吏の娘で、可哀さうな、優しい、しをらしい素直なやつだつたがね。到頭おれに許したのだ。闇の中で、何もかも許してしまつたんだ。可哀さうに、その娘は、直ぐ翌る日にもおれが行つて、結婚の申し込みをするものと思つてゐたのさ（何しろ、おれは花婿としての値打ちを認められてゐたんだからなあ。ところが、その後おれは、その娘に一ことも物をいはなかつたんだ。五ヶ月といふもの、ただの半日も口をきかなかつたんだ。舞踏會などの折に（あの町では、やたらに舞踏會をやつたものさ）、よくその娘の眼が廣間の隅からじつとおれの後を追つてゐるのに氣がついたよ、温順な憤りの火に燃え立つてゐるのをよく見うけたものだよ。こんな遊戯は、おれが内心に養つてゐる蟲けらの慾情を慰めたにすぎないのだ。五ヶ月たつて、その娘はある官吏に嫁いで町を去つてしまつた……腹を立てながらも、それでも多分このおれを愛したままで……。今その夫婦は仕合せに暮してゐるよ。ところでおれは、そんなことは誰にも話したり、笑ひ草にしたりなんぞしなかつたのだぜ。おれは卑しい慾望をいだいて、卑劣なことを愛するけれども、不名譽なことは嫌ひだ。お前は顔を赧くしたね。眼がきらつと光つたぜ。お前には、もうこんな汚ない話は澤山だ。でも、これはそれだけの話さ、ポール・ド・コック式のお愛、



嬌だよ、尤も、この時分から、残忍な蟲けらはもう頭を擽げて、魂の中へのさばり始めてはゐたけれど、いや、あの頃の想ひ出で、一冊のアルバムができるくらゐだよ。おお神様、あの可愛い娘たちに健康を授けてやつて下さい。おれは別かれに際して喧嘩をするのは嫌ひだつたよ。そして一度だつて裏切つたり、相手の顔に泥を塗つたりはしなかつたよ。だが、もう澤山だ、お前はよもやおれが、こんなくだらぬ話をするために、わざわざお前をここへ呼びこんだとは思ふまいね？ どうしてどうして、もつと面白い話を聞かせてやるよ。しかしおれが、お前に對して恥づかし氣もなく、却つて得意になつてゐるなどと、呆れないでくれよ。」

「兄さんは僕が赧い顔をしたので、そんなことをいふんでせう。」と、急にアリオーシャが聞き答へた。「僕が顔を赧らめたのは、兄さんの話のためでもなければ、兄さんのしたことのためでもありません。僕も兄さんと同じやうな人間だからです。」

「お前が？ そいつは少し大袈裟だよ。」

「いいえ、大袈裟ぢやありません。」とアリオーシャはやつきになつて言つた。(明らかに、この考へはもう大分前から、彼の心の中に萌してゐたらしい)——「誰だつて皆おなじ階段に立つてゐるのです。ただ僕が一番下の段にゐるとすれば、兄さんは何處か上の方の、十三段目あたりに立つてゐるのです。これは僕の見方です。しかし結局は五十歩百歩で、つまるところ同じことなんです。一番下の段へ足を掛けた限り、いづれは必らず一番上まで登つてゆきます。」

「ぢやあ、全然足を掛けないことだね？」

「できるものなら、——全然足を掛けないことです。」

「お前にはできるかい？」

「駄目なやうです。」

「もう言ふな、アリオーシャ、もう言ふな。おれはお前の手が接吻したくなつた、さう、感激のあまりにさ。あのグルーシエンカのあばずれば人間學の大家だよ。あの女は、いつかは屹度お前を取つて喰つて見せると、おれにいつたつけ……いやもう言ふまい、言ふまい！ さあ、この忌はしい、蠅のたかつた原●ばから、いよいよおれの悲劇へ移ることにしよう。とはいつても、これもやつぱり蠅のたかつた、つまり卑劣なことだらけの原つばだよ。それは、親爺がさつき、無垢の少女を誘惑したとか、なんとか、出鱈目を言ひをつた、あのことなんだが、事實、おれの悲劇の中にはそいつがあつたんだ。尤もたつた一度つきりで、それも成立はしなかつただけだ。さつき出鱈目をいつておれを決めつけた老筆は、その實この話は知つてやしないんだよ。今までおれは誰にも話したことがないんだから。今お前に明かすのが抑の初めだよ、尤もイワンは別だよ、イワンは何もかも知つてゐる。お前よりずつと前から知つてゐるのだ。しかしイワンは——墓場だよ。」

「イワンが墓場ですつて？」

「うん。」

アリオーシャは異常な注意をもつて聴耳を立てた。



「おれはその戦列大隊で見習士官として勤務してゐただけれど、まるで流刑囚か何ぞのやうに、監視をうけてゐたといつてもいい有様だつた。しかし、町では恐ろしく優遇されたよ。おれが湯水のやうに金を使つたものだから、財産家だと思ひ込まれてしまつたのだ。そして自身でもそんな氣になつてゐた譯だ。しかし外にも何か町の人の氣に入るやうなところがあつたに違ひない。妙に首を傾けたりしてゐたけれど、可愛がつてくれたのも事實だ。ところが、大隊長の老中佐が急におれを毛嫌ひし始めたんだ。そして何かと突つかかりさうにしたけれど、おれにも取るべき手段があつたし、それに町の人がみんなおれの味方だつたので、あんまり強く突つかかつて来る譯には行かなかつたのさ。尤も、おれの方にも良くないところはあつたさ、上官に對する尊敬をわざと拂はなかつたんだからなあ。鼻つ柱が強かつた譯さ。だが、この頑固親爺はなかなか悪くない人間だつたばかりか、この上もなく親切な、愛想のいい爺さんだつたよ。いつか二度も妻帯して、二度とも死別してしまつたのだ。先妻の方は何でも平民出の女だつたさうだが、その忘れがたみも、やはり飾りけのない娘だつた。おれがその町にゐた頃は、もう二十四五にもなつてゐて、父親や、母方の伯母といつしよに暮らしてゐた。この伯母さんは無口な素朴さをそなへてゐたが、姪、つまり中佐の姉娘の方は、はきはきした素朴さだつた。大體おれは想ひ出を語る時、人のことを悪く言はない方だが、この娘くらゐ美しい性質の女性はつひぞ他に見たことがないよ。アカーフィヤつていふんだがね、アカーフィヤ・イワーノヴナと。それに器量も露西亞趣味でなかなか悪くなかつた——背が高く、丸々ふとつて、顔は少々粗野だつたかも知れんが、眼の美しい女だつたよ。二度ほど縁談があつたけれど、斷つてしまつて嫁入りはしなかつたが、それでゐて、いつ

も朗らかさを失はなかつた。おれはこの娘と仲よしになつたんだよ——といつても、別にわけがあつたのぢやない。いや、潔白なもので、いはば友達としてだよ。實際、おれはよくいろんな女と全く純潔な友達づきあひをしてゐたものさ。で、その娘にもずゝ分露骨な、はつとするやうなことまで喋り散らしたものだ、娘はただ笑つてゐるばかりなんだ。大概の女は露骨なことを好くものなんだぜ、ね。それにこの女は處女だつたから、それがひどくおれを浮き立たせたんだよ。まだその上、この娘はどうしたつてお嬢さんと呼ぶ譯には行かなかつた。といふのは、彼女は父の許にあつて伯母さんといつしよに常に自分から自分を殺すやうにして暮らしてゐて、一般社交界へ肩を並べようなどはしなかつた。彼女は人から可愛がられ、重寶がられてゐた。何しろ仕立物にかけては立派な腕を持つてゐたからな。ほんとは器用だつたよ、それでゐて賃銀を請求したりはしなかつたよ、ただ親切どころからしてやることなで、しかし、呉れる時には遠慮せず貫つてゐたがね。だが中佐の方は、どうして、なかなかそんなどころぢやない！ 中佐はその町で第一流の名士の一人だつたからなあ。豪勢な暮らしをしてゐて、よく町ぢゆうの人を招待して、晩餐會や舞踏會をやつたものだ。丁度おれがその町へ着いて大隊へはいつた時には、近々に中佐の二番娘がやつて來るといふので、町ぢゆうその噂で持ちきりだつた。何でも、美人の中でも圖抜けた美人で、こんど首都のさる貴族的な女學院を卒業したばかりだといふことだつた。この二番娘といふのが、あのカテリーナ・イワーノヴナなんで、つまり中佐の後妻にできた娘なのさ。もう亡くなつてゐたが、その後妻は、名門の出で、何でも將軍の家に生れた人だつたけれど、確かな筋から聞いたところによると、少しも持參金を持つて來なかつたさうだ。とにかく親類があつたといふだ



けで、先きにどんな希望があるにしても、現金としては少しもなかつたのだ。だが、その女學院出の令嬢が歸つて来た（ほんの暫らく滞在するだけで、ずつといふ譯ではなかつたが）時には町ぢゆうがまるで面目を一新した觀があつたよ。一流の貴婦人たち——將官夫人が二人と大佐夫人が一人、それに婦人といふ婦人が、猫も杓子も加勢して、四方から令嬢を引つ張り侃にして御機嫌を取りにかかつた。令嬢は忽ち舞踏會やピクニツクの女王になつてしまひ、どうかした保母たちの救濟だと言つて、活人畫の催しまであつた。おれは黙つて飲み廻つてゐたが、丁度その時分おれは町ぢゆうが騒ぎ立てるやうなひどいことをやつつけたんだ。一度その令嬢がおれをじつと眺めたことがあるんだ。それはある砲兵隊長のところでの話だ。だがその時おれは傍へも寄らなかつたよ。お近づきになるなんて眞つ平だといつた態でさ。おれがこの令嬢の傍へ近寄つたのは、それからかなり後の或る夜會の席だつたが、話しかけてみたんだけど、ろくにこちらを見むきもしないで、輕蔑したやうに口をきつと結んでゐるぢやないか。よをし、と、おれは肚の中で思つたんだ、今に仇を討つてやるから！ おれはその頃、大抵の場合、おそろしく無作法者だつた。それは自分でも氣がついてゐた。だがそれより、もつと感じたことは、この『カーチェンカ』が無邪氣な女學生といふよりは、氣性のしつかりした、自尊心の強い、眞から徳の高い、それに第一、智恵と教育のある淑女なのに、おれにはそいつが兩方ともないつてことなんだ。お前はおれが結婚の申込みでもしようとしたと思ふかい？ どうしてどうして、ただ仇が討ちたかつたばかりだ、おれはこんな好漢なのに、あの女はそれに氣づきをらん、といつた肚なのさ。が、當分は遊興と亂暴で日を送つた。たうとうしまひに中佐はおれを三日間の拘禁に處したくらゐだ。丁度その時分、親

爺がおれに六千留送つてよこした。それはおれが正式の絶縁狀を叩きつけて、この後二度と再び無心をしない、『總勘定』を済ましたことにするからと言つてやつた結果なんだ。當時おれには何にも分からなかつたんだ。こちらへ来るまで、いや、ついこの四五日前まで、といふより恐らく今日まで、親爺との金錢關係がどうなつてゐるか、さつぱり分からなかつたんだ。だがそんなことはどうだつて構やしない、後まはした。ところがその六千留を受け取つた頃、おれは突然、ある友達がよこした手紙から、自分にとつてとても興味のある事實を知つたのだ。それは他でもない、おれ達の中佐が秩序紊亂の嫌疑で當局の不興を買つてゐるといふことなんだ。つまり、反對派の陥穽にひつかかつたんだよ。で、直接師團長がやつて来て、小つびどく油を絞つたのだ。それから暫くして、退職願ひを出せといふ命令があつたのだ。まあ、その詳しいいきさつをお前に話すのはやめにするが、實際この人には敵があつたのだ。そして急にこの中佐とその家族に對する町の人の態度が、手の裏を返したやうに冷たくなつてしまつたのだよ。この時、おれの最初の悪戯が始まつたつて譯だ。おれはアガファイヤ・イワーノヴナとはいづも親しくしてゐたので、會ふとかう言つてやつたのさ。『あなたのお父さんはお上の金を四千五百留なくなされたんですよ。』『何ですつて？ どうしてそんなことを仰しやるの？ 先だつて將軍がお見えになつた時にはちやんとそつくりありましたわ。』『その時にあつても今はないんですよ。』すると、ひどくびつくりして、『どうか脅かさなさいで下さい。誰からいつたいお聞きになつて？』『心配することはありませんよ、僕は誰にも話しゃしませんからね。御存じのやうに、僕はこんなことにかけては、墓石同然ですよ。しかしそれについて、いはば「萬」の場合に」といつた形で、つけ足しておきたいことがあるんで



す。それは、もし當局がお父さんに四千五百留の金を請求した場合、その金がお父さんになればさつそく軍法會議にかけられて、それからあのお年で一兵卒の勤めをなさらなければならぬのです。そんなだつたら、いつそお宅の女學生さんを内證で僕んとこへお寄せ下さい。ちやうど僕に金を送つて來ましたから、あの人に四千留あげますよ。そして金輪際その祕密を守りますよ。』まあ、何て卑劣な方でせう！（ほんとにさう言つたんだよ）——まあ、ひどい、何て卑劣な方なんでしょう！ よくもそんなことを仰しやいますわね！』そして恐ろしくぶりぶりして出て行つたが、おれはその後ろからもう一度、どこまでも祕密は神かけて守りとほすからと、叫んだものだ。この二人の女、つまりアガーフィヤとその伯母とは、これは後の話だが、この事件に關してまるで潔白な天使のやうに振舞つたとのことだ。高慢な妹のカーチャを眞から崇め、鞠躬如として小間使のやうに仕へてたんだ……。それでもアガーフィヤはこの一件を、つまりおれとの話をその折當人に話したのだ。おれは後でそれを、一から十まで聞いてしまつたが、この娘は隠しだてをしなかつたよ、そこが又、おれの思ふ壺なのさ。

突然、新任の少佐が大隊を受け取りにやつて來たんだ。事務の引繼が始まつた。と、老中佐が急に病氣で、動くことが出來ないといつて、二晝夜といふもの家の中に閉ぢ籠つたきりで、官金の引き渡しをしないのだ。醫者のクラフチェンコも、まったく病氣に違ひないと斷言した。おれが祕密にとりから嗅ぎ出してゐた確かなところでは、この金は今も四年も前から、長官の檢閲が終り次第、暫時の間その姿を消すことになつてゐたのだ。中佐はその金を、最も手堅い男に貸しつけてゐたのだ。それはトリイフォノフといふ町の商人で、金縁眼鏡をかけた、髭むじやの、年をとつた鯨なのだ。この男は定期市へ

出かけて行つて、何か必要な取引を済ますと直ぐに歸つて來てその金を耳を捕へて中佐に返した上、定期市の土産物まで持つて來るのだ。土産に利子が添へてあるのはいふまでもない。それが今度に限つて（おれはそれを全く偶然にトリイフォノフの後取り息子の涎たれ小僧から聞いたのだ。こいつは世界中にも類のない放埒息子なんだ）、今度に限つて、トリイフォノフは定期市から歸つて來ても、何にも返さないどころか、中佐が飛んで行くと『わたしは、つひぞあなたから一文だつてお借りした覚えはありません、それにお借りできる筈がありませんよ。』といふ挨拶だ。そんな次第で中佐は家に閉ぢ籠つてしまつた譯だ。タオルで頭に鉢巻をさせて、三人の女が總がかりで腦天を氷で冷やすといふ騒ぎだ。そこへ突然、傳令が帳簿と『即刻、二時間以内に官金を提出すべし』といふ命令を持つて來たのだ。で、中佐は署名をしたが、——後でおれはその帳簿の中の署名を見たよ——それから起き上がると、軍服に着換へに行くのだと言つて、自分の寢室へ駈け込み、二連發の獵銃を取つて火藥を裝填して兵隊用の彈丸をこめると右足の長靴を脱いで、銃口を胸へ當て足で引金を探りにかかつたのだ。ところが、アガーフィヤはおれのあの時の言葉を覚えてゐて、もしやと思つて忍び足について來たので、やつと危いところで見つけたんだ。轉げるやうに駈けこみさま、父に飛びかかつて、後ろから抱きとめたため、銃は天井へ向けて發砲されて、幸ひ誰も怪我をしなかつた。他の連中も駈けつけると、中佐を捉へて銃を取り上げて、兩手を捕まへてゐた……これは後ですつかり寸分たがへずに聞いたことだ。おれはその時家にゐたのだ。ちやうど黄昏どきで出かけるつもりで着がへもし、髪も撫でつけ、手巾には香水までつけて、帽子を手にしたところへ、不意に扉があいて——おれの眼の前へ、しかも、おれの部屋へ、カ



テリーナ・イワーノヴナが姿を現はしたのだ。

妙なことがあるもので、その時あの女がおれのところへ入つたのを、往來から見えてゐた者が一人もなかつたのだ。それで町では、これは何の噂にもほらなかつた。それにおれは、ある二人の官吏の後家さんの部屋を借りてゐたが、もう大分の年の婆さんで、よくおれの世話をしてくれたし、なかなか丁寧な老婆で、何事によらずおれの言ひなりになつてゐたから、おれの言ひつけで、その後もまるで鐵の棒か何ぞのやうに黙つてゐてくれた。勿論、おれはすぐすべてのことを了解した。令嬢は、入つて来るなり、まともにおれの顔を見つめるのだ。暗色の眼はきつとして、寧ろ大膽不遜に光つてゐたが、しかし唇とその周りには、何か躊躇ふやうな色がみえた。

『姉から聞いたのですが、もしわたくしが……こちらへ自分で戴きに参りますれば、四千五百留のお金を下さいますさうですね、……わたくし参りました……さあ、どうぞお金を下さいますし……』それだけ言つたが、あとがつづかず、息をつまらせて、びつくりしたやうに、聲をとぎらせてしまつた。口尻とその周りの筋肉がびくびく慄へ出した。おいアリオシカ、聴いてるのか、それとも眠つてるのか  
591

「ミーチャ、僕は兄さんが本當のことを残らずお話しなさることを知つてゐます。」アリオシカは心を波立たせながら答へた。

「その本當のことを話すよ、すつかり本當にありのまま話すとすれば、自分のことを棚へ上げたりはしないよ。先づ初手に浮かんだ考へはカラマゾフ式なものだつたよ。おれは或る時、百足に咬まれて二

週間ほど熱を出して寝こんだことがあつた。ところが、その百足が、意地のわるい毒蟲め、ちくりとおれの心臓を刺したんだよ。わかるかい？ おれはぢろりと相手を一瞥した。お前はあの女を見たかい？ 美人だらう。だがあの時の美しさはそんな風の美しさではなかつたのだ。あの時あの女が美しかつたのは、あの女がこの上もなく高潔であるに引き替へ、おれは一箇の陋劣漢にすぎなかつたからだ。あの女が父の犠牲として、寛容の絶頂にあるに引き替へ、おれは一匹の南京蟲に等しいからなんだ。ところが、その陋劣漢で南京蟲にすぎないおれのために、あの女は身もころも一切を擧げて、生殺與奪の權を握られてゐるのだ。追ひつめられてしまつてゐるのだ。おれは明らかに言ふが、この考へは——この毒蟲の考へは、おれの心臓をしつかりと掴んでしまつて惱ましさのために心臓が溶けて流れ出さないばかりだつた。もはや何の争ひもなささうだつた。南京蟲か毒蜘蛛のやうに、情け容赦もなく行動に移るばかりだ……。おれは息が止まる思ひだつた。ところがまた、これを何處までも高潔な方法で片づけて、誰にもそれを知らさない、いや誰も知ることができないやうに、すぐ翌る日にでも結婚の申し込みに乗りこんでもよかつた譯だ。なぜつて、おれは卑しい慾望を持つた人間ではあるけれど、心は潔白なんだからさ。ところが突然その瞬間に、誰やらおれの耳元で囁く奴があつたんだよ。『だが、あす結婚の申し込みに行つたとしても、あの女はお前の前へ顔出しもしないで、馭者に言ひつけてお前を邸から突き出してしまふだらうぜ、町ぢゆうに觸れ廻すがいい、お前さんなぞちつとも怖くないから、と言つたらどうだらう！』おれはちらと令嬢を眺めた。おれの心の聲は嘘をつかなかつた。たしかにさうだ、きつとさうするにきまつてゐる。おれの襟髪を掴んで抛り出すといふことは、もう今からその顔色でちやんと



讀めるのだ。そこで、おれの心の中には又もや毒念が湧き返つて、陋劣きはまる、豚か商人のやうな一幕が演じてみたくなつたのだ。つまり、嘲けるやうな眼つきでその女を見やりながら、相手が自分の前に突つ立つてゐる間に、商人でもなければ使はないやうな口上で、いきなり女を罵つてやりたくなくなつたんだ。

『あの四千留ですつて！ ありあ冗談に言つたのですよ、一體どうなすつたんです！ そりやお嬢さん、あんまり蟲がよすぎますぜ。百や二百の金なら、こちらから悦んで差し上げませうが、四千留といへば、さう樂々おいそれと抛げ出せる金ぢやありませんからね。ほんとに無駄な御足勞でしたよ。』とさ、しかし、こんなことを言つたら、勿論、おれは何もかも失くしてしまつたらうし、令嬢は逃げ出してしまつたに違ひない。が、その代り、思ひ切り悪がきいて腹いせにもなつて、一切を償つて餘りがあるだらう。一生涯後悔の念に苦しむかもしれないが、兎に角、今はこの手品がやつてみたくて堪らないのだ！ お前は本當にしないだらうが、こんな瞬間におれが相手の女を憎惡の念をもつて眺めるなんてことは、どんな女に對しても決してありはしなかつた。ところが誓つていふが、その時ばかりは、三秒か五秒の間、恐ろしい憎惡をもつてあの女を見つめたのだよ。しかしその憎惡が戀、氣違ひじみた戀と、間一髪をいれないものだつた！ おれは窓に近寄つて、凍てた硝子に額を押し當てた。氷がまるで火か何ぞのやうに額を焼いたのを憶えてゐる。心配するなよ、長く待たせはしなかつたよ。おれはくるりと向きをかへると卓に近よつて、抽斗をあけて、五千留の五分利つき無記名手形を取り出した（それは佛蘭西語の辭書に挟んであつた。）それから黙つたまま女に見せた上、疊んで渡した。そして自

分で玄關へ出る扉を開けると、一足さがつて恭しく腰を屈めて、相手の胸に浸みとほるやうな會釋をしたものだ。本當のことだよ！ あの女は全身でぎくりと慄いて、一秒間おれをじつと見つめながら、ひどく蒼ざめて、ほんとに卓布のやうな顔をしてゐたが、いきなり、なんにも言はずに、突發的ではあつたが、ほんとに物柔かに、靜かに深くおれの足もとへ身を屈めて、額が地につくほどの、女學生式ではなく純露西亞式のお辭儀をしたんだ！ そして急に跳び上ると、駈け出してしまつたんだ。あの女が飛び出した時、おれはちやうど軍刀を吊つてゐたので、それを引き抜いてその場で自殺をしようと思つたんだよ。何のためか自分でもとんと分らない、いふまでもなく馬鹿げきつたことではあつたが、恐らく嬉しさの餘りに違ひない。お前には分かるかどうか知らんが、ある種の歡喜のためには、自殺もし兼ねないものだよ。だが、おれは自殺しなかつたのだ。ただ軍刀に接吻しただけで、また元の鞘に納めた。が、こんなことはお前に話す必要はなかつたんだ。それに今ああいふ争鬭の話しながら、自分をい子に見せようと思つて、少しは胡麻化しもあるやうだ。しかしそれはどうだつて構はない。ほんとに人間の心の間諜なんてものが、みんなどこかへ消えて無くなれあいんだ！ さあ、これがおれとカテリーナ・イワーノヴナとの間にあつた『事件』の全部なんだよ。今ではこれを知つてゐるのはイワンと、それにお前だけなんだ。」

ドミトリイ・フョードロキツチは立ち上がると、興奮しながら一二歩足を踏み出した。そして、手巾を取り出して額の汗を拭つた。それから再び腰をおろしたが、それは前に坐つてゐたところではなく、反對側の壁ぎはの床几であつた。だからアリオシヤは、すつかり坐り直して兄の方を向かなければな



らなかつた。

V  
熱烈なる心の懺悔——『眞つ逆様』

「ではこれで」とアリョーシャが言った。「僕もこの話の前半を知つた譯なんです。」

「ね、前半だけはお前にも分かつた譯だ。それはただの戯曲で、あちらで上演すみだ。後半は悲劇で、これから當地で演じられようとしてゐるのだ。」

「その後半については、これまで少しも僕に分かつてゐないんです。」とアリョーシャが言った。

「ぢやあ、おれはどうだい？ おれには分かつてるとでも言ふのかい？」

「ちよつと待つて、兄さん、茲に一つ大切な言葉があるんです。聽かせて下さい、いつたい兄さんは許婚なんですか、今でも許婚なんですか？」

「おれが許婚になつたのは直ぐぢやない、あの事件の後、三月たつてからだ。あの事があつた直ぐ翌る日おれは自分で自分に言つて聽かせた——この事件はすつかりこれでお仕舞ひだ、決して續きなんか無いとね、許婚の申込みに出かけるなんて、卑劣だとおれは思つたのだ。あの女はまたあの女で、その

後六週間もその町に滞在してゐたのに、一言半句の便りもよこさなかつたのだ。尤も、後にも先きにもただ一度きり、あの女がおれを訪問した、その翌る日のことだが、あの家の女中が、こつそりおれのところへ来て、何も言はずに紙包み一つ置いて行つたのだ。その包みには何々様と宛名が書いてある。あけて見ると、五千留の手形の釣銭なんだ。入用だつたのはみんなで四千五百留だけれど、五千留の手形を賣るのには二百留あまり損をしなければならなかつたのだ。よくは憶えてゐないが、おれの手許へ返してよこしたのは、みんなで二百六十留くらゐのものだつた。しかも金だけで一片の手紙もなければ一言の説明もしてないのだ。おれは包みの中に、何かちよつと鉛筆で印してもつけてないかと思つて、さがして見たが——何にもない！ そこで仕様ことなしに、おれはその残金でまた遊蕩を始めたものだからたうとう新任の少佐も餘儀なくおれに譴責を喰はしたほどだ。兎に角、中佐は無事に官金を引き渡したので、みんなはびつくりしてしまつたのさ。だつて、そんな金がそつくり中佐の手許にあらうとは、誰ひとり豫想もしなかつたからなあ。引き渡しはしたが、どつと病みついて、三週間ばかり床に就いてゐたが、突然、脳の軟化症を起こして、五日目に亡くなつてしまつた。まだ退役の辭令を受けてゐなかつたため、軍葬の禮を以つて葬られた。カテリーナ・イワノヴナは姉や伯母といつしよに、父の葬ひが済み次第、十日ばかりして、モスクワへ發つてしまつた。ところが、その出發の前、と言つても、その當日なんだが、（おれは會ひもしなければ、見送りにも行かなかつた）おれはささやかな封書を受け取つたんだ。青い透し入りの紙に鉛筆でたつた一行、『何れお便りをします、お待ち下さいませ。K』とそれだけ書いてあつたよ。



これからはもつと簡単に説明しよう。モスクワへ行くと、あの人たちの事情は電光のやうな速度と、アラビヤナイトのやうな思ひがけなさを以つて、がらりと一變してしまつたのだ。あの女の主な近親だつた將軍夫人が不意に、最も近い相續者に當る二人の姪を、兩方とも一時に亡くしてしまつたのだ。——どちらも天然痘で同じ週に死んだのだ。すつかり取り亂してしまつた夫人は、親身の娘のやうに、カーチャを喜び迎へ、まるで救ひの星でも見つけたやうに彼女に取りすがつて、早速あの女の名義に遺言狀を書き換へてしまつたのだ。けれどそれは先きのため、當座の手當として直かに八萬留わたし、さあこれはお前の持參金だから、どうなりとも好きなやうにお使ひと言つたとさ。實際ヒステリイ性の婦人だつたよ、おれはその後モスクワへ行つて自分の眼で觀察したがね。ところでおれは出し抜けに四千五百留の金を郵便で受け取つたんだが、勿論どうしたことかと思つて、晒のやうに吃驚仰天したものだ。三月すると豫て約束の手紙も届いた。それは今でもここに持つてゐる。おれはいつもこれを肌身につけてゐて死んでも離さないよ、——何なら見せてやらうか？ いや、ぜひ讀んでくれ。結婚の申し込みなんだ。自分から申し込んで來たんだよ。

『わたしは氣違ひのやうに戀してをります。あなたがわたしを愛して下さらなくても構ひません。どちらにしても、どうぞわたしの良人になつて下さい。でも、お恐れになることは要りません。どんなことをなさいましてもわたしはあなたの邪魔だてをするやうなことは致しません。わたしはあなたの道具になります、あなたの足に踏まれる毛氈になります……。わたしは永久にあなたを愛したうございます、あなたをあなた御自身からお救ひしたうございます。……』アリョーシャ、おれはこの數行の文句を、

自分の陋劣な言葉と陋劣な調子で語り傳へる資格がないよ、おれのいつもの陋劣な調子は自分でどうしても直すことができないのだ！ この手紙は今日になつても尙おれの胸を突き刺すのだ！ お前は今おれが氣樂だとも思ふかい、今日おれが氣樂にしてゐるとも思ふかい？ その時おれはすぐに返事を書いた（おれはどうしても自分でモスクワへ出かける譯には行かなかつたのだ）。おれは涙を流しながらそれを書いたよ。ただ一つ永久に恥かしいと思ふのは、その手紙に、今のあなたは金持で持參金まであるのに、僕は兵隊上がりの貧乏士官だ、と書いたことだ——金のことなどを言つたのだ！ そんなことはじつと堪へてゐなければならなかつたのに、つい、筆が止つてしまつたのだ。これといつしよに、モスクワにゐたイワンへ手紙でできるだけ詳しく、書簡箋を六枚もつかつてすべての事情を説明してやつて、イワンをあの女のところへやつたのだ。お前、何だつてそんな目をして僕を眺めるんだい？ そりやあ、イワンはあの女に惚れこんでしまつたのさ、そして今でも惚れてゐるよ。おれは、なるほど世間の眼から見て、馬鹿なことをしたものだ、自分でも思つてるのさ。しかし、今となつてはその馬鹿なこと一つだけが、われわれ一同を救ふことになるのかもしれないだ！ あああ！ お前はあの女がどんなにイワンを崇拜し、尊敬してゐるか知らないのかい？ それにあの女がおれたちふたりを見較べて、こんな、おれのやうな人間を愛することがどうしてできるものか、おまけに、こちらであんなことを仕出かした後でさ？！

「でも僕は、あの女の愛してるのは兄さんの様な人で、決してイワンのやうな人ぢやないと思ひます。」  
「あの女の愛してるのは自分の善行で、決しておれぢやない。」突然ドミトリー・フォードロキッチは



われにもなく、殆んど毒々しい調子で口走つた。彼は笑ひ出したが、一瞬の後、その眼がきらりと光つた。彼は眞赤になつて力いつぱい拳で車を敲きつけた。

「おれは誓つて言ふが、アリオシャ」と、彼は自分自身に對する烈しい眞剣な憤りを現はしながら喚いた。「お前が信じるか、信じないかどちらだつて構はん。おれは神聖なる神にかけて、主キリストにかけて誓ふが、今おれはあの女の高潔な感情を嘲つたけれど、このおれの魂なんか、あの女の魂に比べたら、百萬倍も下劣だつてことも、あの女のさうした勝れた感情が天使の心のやうに眞實なことも、自分でちやんと知りきつてゐる！ おれがそれをちやんと知り抜いてゐるといふことに悲劇が含まれてゐるのだ。だが、人間がちよつぱり朗讀めいた口をきいたからつて、どうしたといふのだ？ おれは朗讀をしてゐないだらうか？ だが、おれは眞剣なんだ、ほんとに眞剣なんだよ。しかし、イワンのこととなると、あれが自然に對して、今ああいふ呪ひを抱いてゐるのも尤もなことだと思ふ。それにあれだけの頭腦があるんだもの、尙さらだよ！ だが、選ばれたのは誰なんだ？ 何ものなんだ？ 選ばれたのはこの人非人だ、もう許婚の身でありながら、この町で、みんなに見られてゐる中で、生來の放蕩を抑へることのできない碌でなしだ——しかもそれを許嫁のゐるところでやるんだ、許嫁のゐるところで！ かういふ、やくざなおれが選ばれて、イワンが斥けられたんだ。ところで、これはいつたい何のためなんだ？ それは一人の處女が感謝の餘りに、自分で自分の運命と生涯とを手籠めにしようとしてゐるからだ！ 不合理な話だ！ おれはこんな意味のことは一度だつてイワンに話したことがないし、イワンの方からも勿論、そんなことは一言半句だつて、おれに匂はしたことはないのさ。しかし、その

うちには運命の計らひで、價值ある者が相當の席に就いて、價值のない者は永久に路次の奥へ隠れてしまふのだ——自分の氣に入つた、自分に相當した汚い路次の奥へ——そして汚物と惡臭の中に、満足と悦びを覚えながら滅びて行くのだ。おれは何だか矢鱈に喋つたが、おれの言葉はどれもこれも使ひ古されたもので、それを出放題に吐き散らしたやうだけれど、しかし、おれが今言つたとほりになるよ。おれは路次の中へ埋もれてしまつて、あの女はイワンと結婚するのだ。」

「兄さん、ちよつと待つて下さい。」とアリオシャは非常な不安をもつて遮つた。「でも、これまで兄さんがはつきり説明してくれないことが一つありますよ。それはね、つまり兄さんは婚約者なんですか、兎に角、婚約者に違ひないのでせう？ それだつたら相手の婦人が望んでもゐないのに、縁を切る譯にはゆかないぢやありませんか？」

「うん、おれは立派に祝福を受けた正式の許婚だ。それがおれがモスクワへ行つたとき、聖像の前で盛大な儀式に依つて堂々に行はれたのだ。將軍夫人が祝福してくれてさ。いいかい、カーチャにお祝ひまで言つたのだよ。お前はいい花婿を選んだ、わたしにはこの方の肚の底まで見透せるつてね。そして變な話だが、イワンは夫人のお氣に召さないのでさ、お祝ひひとつ言つて貰へなかつたのだよ。おれはモスクワでいろいろカーチャと話し合つて自分のことを深く、精確に誠意をこめて打ち明けたのだ。あの女はじつと聴いたが、

顔には愛しき感ひ

口に優しき言葉……



いや、尊大な言葉もあつたよ。あの女はおれにその折、身持ちを改めるやうにといふ嚴かな約束をさせたものだ。おれは約束をした。ところがだ……」

「どうしたのです？」

「ところが、おれは、けふお前を呼んで、ここへ引っぱり込んだのだ、今日といふ日にな、——それを覚えておいてくれ——そして、やはり同じ今日、お前をカーチャのところへやつて、それから……」

「どうするんです？」

「あの女にさう言つて呉れるんだよ——もう決しておれは行かないから、どうぞ宜しくつて」

「だつて、そんなことがあつていいものでせうか？」

「よくないからこそ、お前を代りにやらうつていふのだ。でなくつて、おれ自身どうしてあの女にそんなことが言へるもんか？」

「それで、兄さんは何處へ行くんのです？」

「路次へさ。」

「ぢやあグルーシエンカのところへですわね！」アリョーシャは手を拍つて、悲しさうに叫んだ。「では、ラキーチンの言つたのは本當だつたのかしら？ 僕はまた、兄さんはちよつと行つて見ただけのこと、もう済んでしまつてるのだとばかり思つてゐたのに。」

「許婚の男が、あんなところへ行くんだつて？ そんなことができるもんかい？ しかも許嫁がゐて、みんな見てゐるところでさ？ おれにだつて少しは廉恥心がある筈だよ。ところが、グルーシエンカの

ところへ行き始めると同時に、おれはもう許婚でもなければ、誠實な人間でもなくなつてしまつたんだよ。それはおれにも分かつてゐるのさ。どうしてそんな眼でおれを見るんだい？ おれは最初、ただあの女をひつばたきに行つてやつたのだよ。それは、親爺の代理人をしてやがるあの二等大尉の奴が、おれの名義になつてゐる手形をグルーシエンカに渡して、おれが閉口して手を引くやうに告訴してくれつて頼んだといふことを、聞き込んだからだ。それが確かなことは、今でも分かつてゐるよ。おれを脅かさうとしやがつたのさ。だから、おれはグルーシエンカをぶん殴りに出かけたのだ。前にもおれはあの女をちらつと見たことがある。だが別に氣にも留めなかつたのさ。今病氣でひどく弱りこんで寝てゐるが、とにかく大分の金をあの女に残すらしい例の老舗商人のことも知つてゐた。それからあの女は金儲けが好きで、ひどい高利で貸しつけてはどしどし殖やしてゐることも、情け容赦もない悪黨の詐欺師だつて話も聞いてゐた。で、おれはぶん殴りに出かけたのだが、そのまま女の家に神輿を据ゑてしまつたのさ。つまり、雷に撃たれたんだ。黒死者に罹つたんだ、一旦感染したつきり、今だに落ちないんだ。もうこれでおしまひなんだ、どうにも變りやうがないつてことは、おれにも分かつてゐる。時の循環が完了したのだ。まあ、こんな事情さ。ところが、丁度その時、おれみたいな乞食のポケットに故意とのやうに三千留といふ金があつたのだ。で、おれは女を連れて此處から二十五露里あるモークロエ村へ出かけて、ジプシイの男女を集めるやら、三鞭酒を取り寄せるやらして、村の百姓や、女房や娘つ子たちに三鞭酒を振舞つて、何千といふ金を撒き散らしたものだ。三日たつと丸裸だつたが、しかし鷹のやうな氣分だつたよ。ところで、その鷹が何ぞ思ひを遂げたとも思ふかい？ 何の、遠くの方から拜ませもしをら



んのだ。曲線美、とでも言ふのかなあ。グルーシエンカの悪黨には、一つ得も言へない肉體の曲線美があるんだ。そいつが足にも、左足の小指の先きにまで現はれてゐるのだ。それを見つけて接吻したつきりだ——まったく本當のことだよ！ あいつは、かう言やがるんだ、『あんたは乞食同様だけど、お望みならお嫁に行つてあげるわ。もしあんたが、決してあたしを打つたりなんかしないで、あたしのしたいことを何でもさせてくれるつて言ふのなら、お嫁に行つてあげてもいいわ。』さういつて笑つてやがるのさ。そして今でもやつぱり笑つてやがるんだ！

ドミトリイ・フォードロキツチは、まるで激昂したやうに座を立つたが、不意に彼は酔つ拂つたやうになつた。彼の兩眼は急に血走つて來た。

「で、本當に兄さんはその女と結婚しようといふんですか？」

「向かふがその氣なら、直ぐにもするし、厭だと言へば、このままでゐてやる。あいつの家の門番にだつてなるさ。ね、お前……アリオーシャ……」と彼は不意に弟の前へ立ちはだかつて、その肩に兩手をかけると、力いづばい揺ぶつた。「お前のやうな無邪氣な少年には分からないだらうけれど、これは謔言だよ、無意味な謔言なんだよ。然もその中に悲劇があるのだ。いいかい、アレクセイ、おれは卑しい墮落した煩惱を抱いた卑劣な人間かも知れないが、しかしドミトリイ・カラマゾフは泥棒や、掏摸や、搔つ拂ひには、斷じてなり下がる筈がないだらう。ところが、今こそ聞いて呉れ、おれは泥棒なんだ、掏摸なんだ、搔つ拂ひなんだ！ 丁度おれがグルーシエンカをひつばたきに出かける直ぐ前、その同じ日の朝、カテリーナ・イワーノヴナがおれを呼んで、さしあたり誰にも知らさないやうに、秘密にして、

(何のためだかおれには分からないが、さうする必要があつたものと見える)、これから縣廳所在地の市へ出かけて、モスクワにゐるアガフィーヤ・イワーノヴナ宛てに、郵便爲替で三千留送つて來て欲しいと頼んだのだ。わざわざ縣廳所在地からといふのは、この町の人に知られたくないためだつたのだ。この三千留をポケットへ入れたまま、おれはその時グルーシエンカのところへ出かけたのだ。そしてその金でモークロエ村へ出かけた譯だ。あとで、おれは、さも市へ飛んで行つたやうな振りをして、爲替の受取りも出さないで、金は送つたから受取りも直ぐ持つて來るとは言ひながら、未だに持つてなぞ行かないでゐるのさ。忘れましてつて譯でね。そこでどうだらう、これからお前が行つてあの女に、『兄が宜しく申しました』と言つたら、あの女は『で、お金は？』つて訊くだらう。さうしたら、お前はこんな風に言つたつて構はないよ、『兄は卑劣な好色漢です、慾情を抑へることのできない下等動物です。兄はあの時あなたの金を送らないで、下等動物の常として衝動に打ち克つことができないで、すつかり使つてしまつたのです。』が、しかし、かう言ひ足したつていい譯だよ。『それでも兄は泥棒ではありません、そら、ここにあなたの三千留があります。どうぞ御自身でアガフィーヤ・イワーノヴナへお送り下さい。で、當の兄は、宜しくと申しました。』するとあの女は『何處にお金がありますの』つて訊くだらうな。

「ミーチャ、あなたは不仕合せな人ですね、ほんとに！ でも、まだ兄さんが自分で考へてゐるほどでありませぬよ——餘り絶望して、自分を苦しめない方がよろしいよ！」

「お前はその三千留が手に入らなかつたら、おれが拳銃自殺でもすると思ふのかい？ そこなんだよ、



おれは自殺なんかしやしない。今はそんな元気がないんだ。そのうちに或はやるかも知れないが、今はグルーシェンカのところへ行くんだ……おれの一生なんかどうなつたつて構ふものか！」

「あの女のところへ行つてどうするんです？」

「あの女の亭主になるんだよ、配偶にして戴くのだ。もし情夫がやつて来たら次の間へはづしてやるよ。そして彼女の友達の上靴も磨いてやらうし、湯沸の火もおこさう、使ひ走りだつて厭やしないよ……」

「カテリーナ・イワーノヴナは何もかもわかつてくれますよ。」と、不意にアリョーシヤは眞顔になつて、口を入れた。「この悲しい出来事の深い點をすつかり了解して、赦してくれますよ。あの人には立派な理性がありますから、兄さん以上に不幸な人のあり得ないことは、あの女にだつて分かりますもの。」

「あの女は決して赦してなんか呉れないよ。」と、ミーチャは苦笑ひをした。「この中には、どんな女だつて赦して呉れることのできないやうなものがあるのだ。お前は、どうするのが一番いいか知つてるかい？」

「どうするのです？」

「あの女に三千留かへしてやるのだ。」

「でも、何處でその金を手に入れるんです？ ああさうだ、僕の金が二千留あるでせう、それにイワン兄さんだつてやはり千留くらゐ出してくださいませう、それで都合三千留になりますよ。それを持つて行つてお返しなさい。」

「しかし、それがいつ手に入るんだい、お前のいふその三千留がさ。それに第一、お前はまだ丁年に達してゐないんだからなあ。いや、どうあつても是非けふ、あの女のところへ出かけて、宜しくを言つてくれなくちやならんよ。金を持つてか、それとも持たずにか、兎に角、もうこれ以上のばす譯には行かぬ、さういふぎりぎりまで差し迫つてしまつたのだ。明日ではもう遅いんだ。おれはお前に親爺のところへ行つて来て貰ひたいんだ。」

「お父さんのところへ？」

「うん、あの女のところより先きに親爺のところへ。そして三千留貰つて来てくれるんだ。」

「だつて、ミーチャ、お父さんは出してくれやしませんよ。」

「出してくれる筈はない、くれないことは承知の上だよ。なあ、アリョーシヤ、絶望つてどんなものか知つてるかい？」

「知つてゐます。」

「まあ聴けよ、親爺は法律的にはおれに一文だつて負ひ目はないさ。おれがありつたけ引き出しちまつたんだから、それはおれも承知だよ。しかし精神的には、親爺はおれに義務があるよ、なあ、さうぢやなからうか？ 親爺は母の二萬八千留を元手にして、十萬からの財産を儲け出したんだからなあ。親爺がもしその二萬八千留のうち、たつた三千留だけおれに呉れさへすれば、おれの魂を地獄から救ひ出して、親爺にしても澤山な罪障の償ひになるといふものだ。おれはその三千留で——お前に誓つて置くが——きれいさつぱり片をつけて、その後おれの噂ひとつ親爺の耳へ入れるこつちやないんだ。つまり、



これを最後に、もう一度だけ父となる機会を親爺に提供してやるんだ。親爺にさう言つてやつてくれ、この機会こそ神様がお授けになるのだつて。」

「ミーチャ、お父さんはどんなことがあつても出してくれやしませんよ。」

「知つてるよ、出さないつてことは百も承知さ。まして、今は尙更なんだよ。さつきの話のほかにも、おれはまだこんなことを知つてるんだ。ついこの頃、ほんの二三日前、いや、ひよつとしたらまだ昨日あたりかも知れんが、親爺は、グルーシエンカがほんとに冗談でなしにおれと不意に結婚するかも知れないつてことを初めて眞面目に、(この眞面目にといふ點に氣をつけてくれ)喚ぎ出しをつたのだ。親爺もあいつの氣性を知つてるんだよ。あの牝猫のさ。だから、あの女にうつつを抜かしてゐる當の親爺が、この危険を助長するために、わざわざおれに金を出してくれる筈はないさ。しかしまだ、それだけぢやない、もつと重大なことを聞かしてやるよ、それはかうだ、もう五日ほど前に、親爺は三千留の金を抜き出して百留の札にくづし、大きな封筒に入れて封印をべたべた五つも捺した上に、赤い紐を十文字にかけたものだ。どうだい、實に詳しく知つてるだらう！ 封筒にはかういふ上書がしてあるのさ、『わが天使なるグルーシエンカへ——若しわが許に來りなば』これはしんと寝しづまつた時こそり自分で書きつけたのだ。こんな金が寝かしてあることは下男のスメルチャコフの他には誰ひとり知る者はない。この男の正直なことを、親爺はまるで自分と同じくらゐに信じきつてゐるんだからな。ところで、親爺はもう今日で三日か四日、グルーシエンカがその金包みを取りに來るのを當てにして、待ちあぐねてゐるんだよ。親爺の方から知らせてやつたので、あの女からも『行くかも知れない』といふ返事があつた

さうだ。だからもしあの女が親爺のとこへやつて來るやうなら、おれはあの女といつしよになんかなれやしないだろ？ なんておれはこんな處に内證で坐つてゐるのか、何を見はつてゐるのか、これでお前にも合點が行つた筈だな。」

「あの女を見はつてゐるんでせう？」

「さうだよ。ところで、ここのお引摺りの家の小部屋をフォマといふ男が借りてるんだよ。このフォマは土地の者で兵隊あがりの男なのさ。夜だけ、ここで夜番に使はれてゐて、晝間は松鷄を撃ちに出かけたりしてゐるのだ。おれはまんまとこの男のところへ入り込んでゐるんだが、この男も、この家の母娘もおれの秘密は知らないのだ。つまり、おれがここで何を見はつてゐるかつてことを知らないんだよ。」

「スメルチャコフだけが知つてるんですね？」

「あいつだけだよ。もし女が老鷹のとこへ來たら、あいつが知らせる手筈なんだ。」

「金包みのことを兄さんに話したのもあの男ですな？」

「あいつさ。だがこれは絶対の秘密なんだよ。イワンにさへ、金のことは愚か、何にも知らしてないんだから。ところで、親爺は二三日の間、イワンをチェルマーシニヤへやらうとしてゐるんだよ。森の買手がついて、何でも八千留とかで木を伐り出させるんだとさ。それで親爺は、『手助けをするつもりで、行つて來て呉れ』と、イワンを口説いてゐるところだが、二三日はかかる用事なんだ。これはつまり、イワンの留守にグルーシエンカを引き入れようといふ肚だよ。」



「それぢや、お父さんは今日にも、グルーシエンカが来るかと待つてる譯ですな？」

「いや、あの女は今日は来ない。ちやんと徴候があるんだ。きつと来やしないよ！」と、突然、ミーチャは叫んだ。「スメルチャコフもさう考へてるのさ。親爺は今イワンと差もむかひで酒を飲んでゐるんだよ。ひとつ出かけて三千留もらつて来てくれないか……」

「ミーチャ、兄さん、どうなすつたの！」と、アリオーシャは床几から飛び上つて、逆上したやうなドミトリイ・フォードロキツチの頭を見つめながら叫んだ。一瞬間、彼は兄が氣違ひになつたのではないのかと思つた。

「お前こそどうしたんだい？ おれは氣は確かなんだよ。」かう、じつと、妙に生真面目な色さへ浮かべて、弟の顔を見つめながら、ドミトリイ・フォードロキツチが言つた。「なるほど、おれはお前に親爺のところへ使ひに行つて貰はうとしてゐるが、自分の喋つてゐることはちやんと分かつてゐるよ。おれは奇蹟を信じてゐるから。」

「奇蹟を？」

「うん、神慮の奇蹟をさ。神様にはおれの胸の中がよくお分かりだ。神様はおれの絶望を見ぬいてゐて下さる。この畫面を残らず見とほしておいでになるのだ。神様が、何か怖ろしいことの持ちあがるのを見すみす見通してお置きになるだらうか？ アリオーシャ、おれは奇蹟を信じるよ、さあ行つて来てくれ！」

「ぢや行つて來ます。で、兄さんはここに待つててくれますね？」

「待つてるとも、多少時間のかかることは分かつてるし、さう行きなり切り出す譯にも行くまいからさ！ それに今ごろは酔つぱらつてゐるだらうし。待つてるよ、三時間でも、四時間でも、五時間でも、六時間でも、七時間でも、しかし、いいかい、今日ぢゆうに、たとへ夜中になつても、金を持つてなり、持たないでなり、カテリーナ・イワーノヴナのところへ行つて、兄が宜しく申しましたと言つてくれるんだよ。おれはお前に是非この『宜しく申しました』つていふ句を言つてもらひたいんだよ。」

「ミーチャ！ でも、不意に今日グルーシエンカがやつて來たら……今日でなくても、明日なり、明後日なり？」

「グルーシエンカが？ 狙つてゐて見つけ次第踏んこんで邪魔をしてやる……」

「でも若しか……」

「若しかなんてことがあつたら、打ち殺しちまふさ。指をくはへて見ちやゐないよ。」

「誰を殺すんです？」

「爺いをさ。女は殺さないよ。」

「兄さん、何てことを言ふのです！」

「いや、おれには分からない、分からない……もしかしたら殺されないかも知れないし、また場合によつては殺すかも知れん。ただ、いよいよ瞬間に親爺の顔を見て急に憎惡を感じやしないかと、ただそれだけが氣になるんだ。おれにはあの喉團子や、あの鼻や、あのふてぶてしい嘲弄が憎くらくて堪らないのだ。全體に蟲が好かないのだ。それが心配なんだよ。こればかりは我慢がならないから。」



「ミーチャ、僕行つて來ます。僕は神様が、そんなに怖ろしいことの起こらないやうに、上手に取りさばいて下さることを信じます。」

「ぢや、おれはここに坐つて、奇蹟を待つことにしよう。もし奇蹟が起こらなかつたら、その時は……」アリオーシャは思ひに沈みながら、父のもとをさして出かけた。

VI

スメルチャコフ

彼は果してまだ父が食卓に向かつてゐるところへ行つた。この家には別に本式の食堂があるのに、いつもの習慣で食卓は廣間に用意されてあつた。それは家ぢゆうで一番大きい部屋で、何だか昔臭い造りの室内裝飾が施してあつた。家具類は思ひ切り古風なもので、白い骨に古ぼけた赤い絹まじりの布が張つてある。窓と窓との間の壁には鏡が箴めこんであるが、その縁はやはり白地に金をちりばめて、古臭い彫刻をこてと施したものである。もうあちらこちら裂けた白い紙張りの壁には、二つの大きな肖像畫が勿體らしく懸つてゐる——一つの方は、三十年ばかりも前にこの地方の總督をしてゐた、さる公爵で、もう一つの方はやはり餘程以前に世を去つた或る僧正であつた。部屋の正面の隅には幾つもの聖

像が安置されて、夜になるとその前に燈明があげられたが、それは信心のためといふよりは、夜分部屋の中を明るくするためであつた。フォードル・パーヴロキツチは毎晩たいへん遅く、夜明けの三時か四時に寢に就くので、それまでは部屋の中を歩き廻つたり、肘椅子に腰かけて考へごとをするのであつた。それが癖になつてしまつたのである。彼はよく召使を傍屋へさげてしまつて、まるきり一人で母家に寢ることがあつたけれど、大抵は下男のスメルチャコフが毎晩、彼の身邊に居残つて、控室の腰掛の上で寢てゐた。アリオーシャが入つて行つた時には、もう食事が済んでジャムと珈琲が出てゐた。フォードル・パーヴロキツチは食後に甘いものを食べてコニャクをやるのが好きであつた。イワン・フォードルキツチもやはり食卓に向かつて珈琲を飲んでゐた。従僕のグリゴリイとスメルチャコフが食卓の傍に立つてゐた。どうやら主人側も召使の方も、眼に見えてひどく愉快にはしやいでゐるらしかつた。フォードル・パーヴロキツチは大きな聲で笑つたり、にこにこしてゐた。アリオーシャは玄關へ入つたばかりで、もうあの父の、前からよく聞き馴れてゐる甲高い笑ひ聲を耳にしたのである。彼はその笑ひ聲から、父がまだ酔つ拂ふといふところまでには大分間のある、ほんの一杯機嫌になつてゐるに過ぎないことを、立ちどころに推察した。

「ほら、來たぞ、來たぞ！」と、フォードル・パーヴロキツチはアリオーシャのやつて來たのを無性に悦んで喚き出した。「さあ相伴をしろ、ここへ來て珈琲を一杯やんな——なあに、精進の珈琲だよ、精進の。熱くて、うまいぞ！ コニャクはすすめないよ、お前は精進を守つてるのだから、しかしどうだ、少しやらんか？ いや、それよりお前には利久酒をやらう、素晴らしい奴だぜ！ スメルチャコフ、



戸棚へ行つて取つて来い、二番目の棚の右側にある。そら鍵だ、早く持つて来い！」  
アリョーシヤは利久酒を断らうとした。

「なあに、どうせ出すんだ。お前がいらなきや、わしらがやるよ。」と、フョードル・パーヴロキツチはほくほくしながら、「それはさうと、お前、食事は済んだのか、どうだ？」

「もう済みましたよ。」と、アリョーシヤは答へたものの、その實、修道院長の臺所で、麵麩を一切れにクワスを一杯飲んだだけであつた。「僕はこの熱い珈琲をいただきませう。」

「可愛い奴！ 感心々々！ こいつは珈琲を飲むつていふぜ。温めなくていいかな？ いや、まだ煮え立つてをるわい。素晴らしい珈琲だて、スメルチャコフのお手際だよ。この男は珈琲と魚饅頭にかけては名人だ。あ、それからまだ魚汁にかけてもな。ほんとにいつか、魚汁を食ひに来んか。その時は前もつて知らせるんだぞ……いや待て待て、さつき、わしは、今日さつそく蒲團と枕を持つて歸つて来いとお前に言ひつけたが、ほんとに蒲團を擔いで来たかよ？ へ、へ、へ！」

「いいえ、持つて来ませんよ。」とアリョーシヤも薄笑ひをした。

「な、吃驚したろ、さつきはほんとに吃驚したらう？ なあこれ、坊主、わしがお前を侮辱するなんてことはとてもできるこつちやないわい。でな、イワン、わしはこれがこんな風にわしの顔を見て笑ふと、どうも平氣で見ちやゐられないわい、いや、こたへられないて。つい誘はれてにつこりしてしまふのだよ、可愛くてな！ アリョーシカ、さあ一つわしが父としての祝福を授けてやらう。」

アリョーシヤは起ち上がった。しかしフョードル・パーヴロキツチはもうその間にも氣持を變へて

ゐた。

「いや、いや、今はただ十字を切つてやるだけにしとかう、さあこれでよしと。掛けな。ところで、お前の悦びさうな話があるのだよ。しかもお前の畠なんだぜ。腹の皮をよるこつたらうて。うちのヴラームの驢馬が喋り出したのさ。そのまた話のうまいこといつたら！」

ヴラームの驢馬とは、下男のスメルチャコフのことであつた。彼はまだやつと二十四五歳の若者であつた。が恐ろしく人づきの悪い黙り者であつた。それも内氣な、羞みやといふ譯ではなくて、反對に彼は傲慢な性質で、人をすべて輕蔑してゐるやうなところがあつた。それは借、茲で、この男のことをたとへ一言でも述べておかなければならない。しかも丁度今でなくてはならないのである。彼はマルファ・イグナーチエヴナとグリゴリイ・ワシーリエキツチの手で育てられたが、グリゴリイの言ひ草ではないが、『まるで恩知らず』に成長して、野育ちの子供らしく隅つこから世間を窺ふやうにしてゐた。小さい頃に彼は、猫を絞め殺して、後で葬式の眞似をするのが大好きであつた。そのために敷布をひつかけて法衣の代りにして、何か香爐の代りになるものを猫の死骸の上で振り廻しながら、讚美歌をうたつたものである。これは嚴重な秘密裡にこつそりと取り行はれた。或る時、さういふお勤めをしてゐるところを、グリゴリイに見つけられて、鞭でこつびどく折檻されたことがある。するとこの子供は片隅へ引つこんでしまつて、一週間ばかりといふもの、そこから白い眼を光らせてゐた。『このできそこなひはわしやお前を好いてゐねえだよ。』とグリゴリイは妻のマルファ・イグナーチエヴナに言ひ言ひ

\* ヴラームの不幸を人間の言葉にて警告したる聖書中の驢馬。



した。「いや、誰一人好いてゐねんだよ。それでも手前は人間なのかい？」と、彼は出し抜けに當のスメルヂャコフに向かつて、こんな風に言ふことがあつた。「うんにや、手前は人間ぢやねえ。湯殿の濕氣から出て出た奴だ、それが手前なんだぞ……」それは後で分かつた話だが、スメルヂャコフはいつまでもこの言葉を怨みに思つてゐた。グリゴリイは彼に読み書きを教へた。そして子供が十二歳になつたとき聖書の講釋をしにかかつた。が、それは直ぐ失敗に終つた。まだほんの二度目か三度目の稽古の折、子供は不意にやりと笑つた。

「どうしたんだ？」と、眼鏡ごしにいかつく子供を睨みながら、グリゴリイが問ひ訊した。

「何でもありません。神さまが世界をお創りになつたのは初めの日でせう、それだのにお日さまやお月さまや、お星さまができたのは四日目ぢやありませんか。初めての日には何處から明りが映したのです？」グリゴリイは立ち竦んでしまつた。少年は嘲るやうに教師を見やつた。その眼眸には何處か高慢ちきなところさへ窺はれた。グリゴリイはとても怵へきれなかつた。「そうら、此處からだ！」と嗚鳴りざま、猛烈に教へ子の頬を殴りつけた。子供は黙つてその折檻をこらへてゐたが、またもや幾日かのあひだ隅つこへ引つこんでしまつた。ところが、ちやうどそれから一週間たつて、彼の一生の持病となつた癲癇の兆候が初めて現はれた。このことを聞くと、フォードル・パーヴロキッチは突然この子供に對する態度を一變したやうである。それまで彼は、一度も叱りつけるやうなこともなく、出會ふ毎に一哥づつくれてやつたり、機嫌のいい折には食卓へ出た甘いものを届けてやつたりしたこともあつたが、何だか無關心な眼で子供を眺めてゐた。ところが病氣の話を聞くと共に、急にこの子供のことを心配し

だして、醫者を迎へて治療にかかつたけれど、治療の見込みはないといふことが分かつた。發作は一月に平均一度ぐらゐ襲つて來たが、その期間はさまざまであつた。また發作の程度もまちまちで、時には軽く、時には非常に激烈であつた。フォードル・パーヴロキッチはグリゴリイに向かつて、子供に體刑を加はへることを厳しく禁じた。そして子供に上の自分の部屋へ出入りすることを許した。また、どんなことにもせよ、物を教へることも當分のあひだ差し留めた。ところが、ある時、子供はもう十五になつてゐたが、フォードル・パーヴロキッチは彼が書棚の邊をうろつき廻つて、硝子戸ごしに本の標題を讀んでゐる姿を見た。フォードル・パーヴロキッチのところにはかなり澤山、百冊餘りも書物があつたけれど、彼が書物を讀んでゐるのを見た者は一人もなかつた。彼は早速戸棚の鍵をスメルヂャコフに渡した。「さあ、讀め、讀め、庭をうろつき廻つてゐるより、圖書係にでもなつた方がましだらう。坐つて讀むがいい。まあ、こんなものでも讀んで見る。」さう言つてフォードル・パーヴロキッチは「デイカンカ近郷夜話」を抜き出して與へた。

子供は讀みにかかつたが、ひどく不満らしい様子で、にこりともしないばかりか、讀み終つた時には、却つて顔を擧げてゐたくらゐである。

「どうだい？ 可笑しくないかい？」と、フォードル・パーヴロキッチが訊いた。

スメルヂャコフは黙りこんでゐた。

「返事をしろ、馬鹿め！」

「嘘つばちばかり書いてありますね。」とスメルヂャコフはにやにやしながら曖昧な返事をした。



「ふん、勝手にしろ、この下郎根性め。まあ待て、これを貸してやらう、スマラグドフの萬國史だ。これならば本當のことばかり書いてあるぞ、読んで見る。」

けれどスメルチャコフはそのスマラグドフも十頁とは讀まなかつた。まるつきり退屈なものに思はれたのである。こんな風で書棚は又もとのやうに閉ぢられてしまつた。間もなくマルファとグリゴリイは、スメルチャコフが妙にだんだん氣むづかしくなつたことを、フォードル・パーヴロキツチに報告した。といふのは、スープを啜りにかかつて、匙を握つたまま切りとスープの中を吟味したり、屈み込んで覗いたり、一匙すくつて明りに透して見たりするといふのであつた。

「油蟲でもをるのか？」とグリゴリイが訊く。

「きつと蠅でせうよ。」とマルファが口をいれる。

潔癖な少年は一度も返事をしなかつたが、麵麩であれ、肉であれ、すべての食物について同じやうなことをするのであつた。何でも食物の切れを肉叉フナクにさして、明りの方へ持つて行くと、まるで顯微鏡でも覗くやうに仔細に検査をして、長いあひだ躊躇してゐてから、やつと思ひ切つて口の中へ入れるといふ風であつた。それを見るとグリゴリイは『へん、まるで御大身のお坊ちやまだよ。』と呟いたものだ。フォードル・パーヴロキツチはスメルチャコフのかうした新しい性分を聞き知ると、さつそく料理人に仕立てようと思ひ立つて、モスクワへ修業にやつた。彼は数年のあひだ修業をして、歸つて來た時にはすつかり面變りがしてゐた。急にまるで年に似合はず甚く老け込んで、皺が寄り、黄色くなつたところは、まるで去勢者のやうであつた。性質の方はモスクワへ行く前と殆んど變りがなかつた。相變らず人

づきが悪く、誰とも、交際するなどといふことは、てんでその必要を認めなかつたのである。後で人から聞いたところによると、彼はモスクワでも始終しんねりむつりで押し通したとのことである。モスクワそのものも極めて僅かしか彼の興味を惹かなかつたので、市中のこともほんの二三しか知らず、その餘のことにはてんで見向かうともしなかつたのである。一度、芝居へ行つたことがあるけれど、黙りこくつて、不満らしい様子で歸つて來た。その代りモスクワから歸つて來た時は、なかなか凝つた服装ナリをしてゐた。きれいなフロックコートにワイシャツを着こんで、日に二度は必らず自分で念入りに服に刷毛をかけ、氣取つた犢皮の靴を特製の英國靴墨で鏡のやうに磨き上げるのが好きであつた。料理人としての彼は實に立派なものであつた。フォードル・パーヴロキツチは彼に一定の給料を與へてゐたが、スメルチャコフはその給料の殆んど全部を着物やボマードや、香水などに使つてしまふのであつた。しかし女性を輕蔑する點では、男性に對すると變りなさうで、女に面と向かふと如何にも四角ばつて、殆んど近寄ることができないくらゐに振舞つた。フォードル・パーヴロキツチはまた少し別な見地から彼を眺めるやうになつた。スメルチャコフの癩癩の發作がますます烈しくなつて來て、さういふ日には食事の調理をマルファ・イグナーチエヅナが代つてしたが、それがフォードル・パーヴロキツチにはどうにも我慢がならなかつたのである。

「どうしてお前の發作はかうだんだん度重つて來たのだらうな？」彼は新しい料理人の顔を流し目に見やりながら、かう言つた。「お前、嫁を貰つたらどうだな。何なら世話をしてやるが。」

しかし、スメルチャコフはこの言葉を聞くと、ただ腹が立つて眞蒼な顔をしただけで、返事ひとつし



なかつた。でフォードル・パーヴロキッチも手一つ振つておいて、その場をはづしてしまつた。しかし何よりも重大な點は、彼がこの青年の正直さを絶対に信用して、相手が決して物を取つたり盗んだりしないと信じきつてゐることであつた。ある時、フォードル・パーヴロキッチは酔つぱらつてゐたために、受け取つたばかりの虹幣を三枚自宅の庭のぬかるみへ落としたことがある。翌る日になつて初めて氣がついて、あわててポケットの中を探しにかかつたが、ふと見れば、虹幣は三枚ともちやんと卓の上に載つてゐる。一體どこから出て来たんだ？ スメルチャコフが拾つて、もう前の日からそこへ持つて来てあつたのである。『いやどうも、お前みたいな男は見ることがないぞ。』フォードル・パーヴロキッチはさう言つてその時、彼に十留くれてやつた。茲でつけ加はへておかねばならぬのは、フォードル・パーヴロキッチは單に彼の正直さを信じてゐたばかりではなく、何とはなしにこの青年が好もしかつたのである。その癖この若者の方は彼に對しても、赤の他人に對すると同様、白眼を向けて、いつもむつとりとしてゐた。口を利くことも稀れであつた。こんな場合、誰かが彼の顔を眺めながら、一體この若者は何に興味を抱いてゐるのか、また心の中で何を一番に考へてゐるのか、そんなことを知りたいと思つても、相手の様子を見ただけでは、とてもそれを判断することができなかつた。ところで又、彼はどうかすると、家の中でも、庭でも、また往來の眞中でも、ふと立ちどまつて、何か考へ込みながら、ものの十分間も佇んでゐることがよくあつた。骨相學者がもしこの時の彼の顔をよく觀察したならば、そこには思考もなければ想念もなく、ただ何か瞑想とでもいふものがあるばかりだ、と言ふに違ひない。畫家クラムスキイの作品のなかに『瞑想する人』と題する傑作がある。それは冬の森の景色で、その森

の中の路には、踏み迷つた一人の百姓が、ぼろぼろの上衣に木の皮の靴を穿いてただ獨り深い静寂の中に佇つてゐる。いかにも彼は、何か物思ひに耽つてゐるやうではあるが、それも決して考へこんでゐるのではなく、ただ何か『瞑想』してゐるのである。もしこの男をとんと突いたなら、彼は屹度ぎくりとして、まるで夢から醒めたやうに、相手の顔を見まもるだらうが、その實、何が何だか少しも分からないのである。實際すぐ我に返るに違ひないけれど、何をぼんやり立つて考へたのかと訊かれても、恐らく何の記憶もないに違ひない。しかし、その代り、彼が瞑想中に受けた印象は、深くその心の底に秘められてゐるのである。かうした印象は本人にとつてなかなか大切なもので、恐らく彼は自からそれと意識しないで、いつとはなしに、それを蓄積してゆくのである——何のために、どうしてといふことも自分では無論わかつてゐないのである。だが、永年の間かうした印象を蓄積した擧句、突然すべての物を抛つて、遍歴と修行のためにエルサレムをさして旅立つかも知れないが、或ひはまた、不意に自分の生れ故郷の村を焦土と化してしまふかも知れぬ。若しかしたら、その兩方が一時に起こらないにも限らぬのである。瞑想家は民間にかなり多い。スマルチャコフも恐らくさうした瞑想家の一人であつて、やはり同じやうに自分では何のためとも知らずして、独自の印象を貪るやうに蓄積してゐるのに違ひない。



ところが、このブラームの驢馬が突然口をきき始めたのである。その話題は奇態なものであつた。グリゴリーが、今朝はやくルキヤノフの店へ買ものに行つて、この商人から或る一人の露西亞兵の話を聞いて來たのである。何でもその兵士は、どこか遠い亞細亞の國境で敵の捕虜になつたが、即刻、慘酷な死刑に處するといふ威嚇のもとに、基督教を捨てて回々教に改宗するやうに強制されたにも拘らず、彼は自分の信仰を裏切ることを肯んじないで受難を選び、生皮を剥がれながら、キリストを讃へて、従容として死んで行つたといふのである。この美談は、ちやうどその日届いた新聞にも掲載されてゐた。この話をグリゴリーが食事の間に持ち出したのである。フォードル・パーヴロキッチは昔から食後のデザートに、たとへグリゴリーを相手にしてでも、何か面白い話をして、わつと一笑ひするのが好きであつた。この時も氣軽で、愉快な、のんびりした氣分になつてゐた。で、コニャクを傾けながらその一部始終を聞き終ると、さういふ兵士は直ぐにも聖徒の中へ祭りこまねばならぬ、そして剥がれた皮は何處かのお寺へ納めたがよい。『それこそ大變な參詣人で、さぞお賽錢もあがることだらうぜ。』と言つた。

グリゴリーはフォードル・パーヴロキッチが少しも身に浸みて感じないばかりか、いつもの癖で、罰當りなことを言ひ出したのを見て顔を擧げた。ちやうどその時、扉の際に立つてゐたスメルチャコフが、不意ににやりと笑つた。スメルチャコフはこれまでもよく食事のしまひ頃に食卓の傍へ出ることを許されてゐたが、イワン・フォードロキッチがこの町へやつて來てからといふものは、殆んど食事のたんびに顔を出すやうになつた。

「どうしたんだ、これ？」と、その薄笑ひを目敏く見つけると同時に、それがグリゴリーに向けられたものだと思ひながら、フォードル・パーヴロキッチが訊いてみた。

「今の話でございしますが、」と、スメルチャコフは、突然大きな聲で思ひがけないことを言ひ出した。

「その感心な兵士のしたことはなるほど偉いには違ひありませんが、そんな危急な場合にはその兵士がキリストの御名と自分の洗禮を否定したからと言つて、一向罪にはならないだらうと思ひます。さうしますれば、この先きいろいろ良い仕事をするために、自分の命を全うすることができます。またその良い仕事で長の年月の間には、自分の無分別な行爲も償ふことができるではありませんか。」

「どうしてそれが罪にならないのか？ 馬鹿なことを言へ、そんな口をきくと眞直に地獄へ突き落されて、羊肉のやうに焙られるぞ。」フォードル・パーヴロキッチが口を入れた。丁度この時、そこへアリョーシャが入つて來たのである。フォードル・パーヴロキッチは、前にも述べたやうに、アリョーシヤを見て無性に喜んだのである。

「お前の畜だ！」と彼はアリョーシヤを席に就かせながら、忍び笑ひをしたものである。



「羊肉のことですが、そんなことは決してある筈がありません。それにあんなことを言つた位でそんなことになる筈もありません。またあるべきものでもございません——公平に申しまして。」と、スメルチャコフは依怙地になつて答へた。

「公平に申しましてといふのは何のことだい？」膝でアリオーシャを小突きながら、フォードル・パーヴロキッチはなほ一層面白さうに叫んだ。

「畜生です。それだけの奴です！」とグリゴリイが、突然、口走つた。彼は憎々しげに、ひたとスメルチャコフの顔を見据ゑた。

「畜生だなどと仰しやることは少々お待ち下さい、グリゴリイ・ワシーリエキッチ、」とスメルチャコフは落ちついた控へ目な調子で口答へをした。「それより、自分でもよく考へて御覽なさい。もしわたしが基督教徒の敵の手に捕へられて、神の御名を咀ひ自分の洗禮を否定せよと強ひられたとしましたら、わたしはこの、自分の考へどほり行動する権利を持つてゐるのです。さうしたからとて罪などになる筈がないからです。」

「そのことならもうさつき言つたぢやないか、駄法螺ばかり吹いてゐないで、證據を言つて見る！」とフォードル・パーヴロキッチが呶鳴つた。

「この煮出汁（にでじゆ）とり野郎め！」とグリゴリイが吐き出すやうにぼやいた。

「煮出汁とり野郎だなんて、それもやはり少々お待ち下さい、そんな汚ない口をきかないで、よく考へて御覽なさいグリゴリイ・ワシーリエキッチ、だつてわたしが敵の奴らに向かつて『さうです、もう

わたしは基督教徒ぢやありません、わたしは自分の神様を咀ひます』といふが早いか、すぐさまわたしは、最高の神の裁きによつて特別に呪はれたる破門者となつて、異教徒と全然おなじやうに、神聖な教會から追放されるに違ひありません、ですからわたしが口を切る一瞬間といふよりも、寧ろ口を切らうと思つた刹那に——この間は四分の一秒もかかりません——わたしはもう破門されてをるんです——さうぢやありませんか、グリゴリイ・ワシーリエキッチ？」

彼は如何にも満足さうにグリゴリイに向かつてかう言つた。しかしその實、ただフォードル・パーヴロキッチの質問に對して答へてゐるだけだといふことは、自分でもよく知つてゐる癖に、わざとその質問をグリゴリイが發してゐるやうな素振りをして見せるのであつた。

「イワン！」と、突然フォードル・パーヴロキッチが叫んだ。「ちよつと耳を貸してくれ。あれはみんなお前をめあてにやつてをるんだよ、お前に褒めて貰ひたいが、山々なのだ、褒めてやれよ。」

イワン・フォードロキッチは父の有頂天な言葉を眞面目くさつた様子で聽いてゐた。

「待つた、スメルチャコフ、ちよつとの間、黙つてをれ。」と、またしてもフォードル・パーヴロキッチが叫んだ。「イワン、もう一ぺん耳を貸してくれ。」

イワン・フォードロキッチはまた思ひきり眞面目くさつた様子をして身を屈めた。

「わしはお前も、アリオーシャと同じやうに好きなんだぞ、わしがお前を嫌つとるなどと思はんでくれ、コニャクをやらうか？」

「下さい、』しかし、自分でいい加減酔つぱらつてゐるくせに。」と思つて、イワン・フォードロキッチ



チはじつと父の顔を見つめた。が、それと同時に異常な好奇心を以つてスメルヂャコフを観察してゐたのである。

「貴様は今でも『呪はれたる破門者』だぞ。」と出し抜けにグリゴリイが爆發したやうに叫びつた。

「だのに、なんだつて貴様はそんな屁理窟が捏ねられるのだ、もし……」

「これ悪態を吐くな、グリゴリイ、悪態を！」とフォードル・パーヴロキッチが遮つた。

「グリゴリイ・ワシーリエキッチ、まあほんのちよつとの間でよろしいから待つて下さい、まだすつかりお話をしてしまつた譯ではありませんから、もし先きを聴いて下さい。ところで、わたしがすぐ神様から咀はれた瞬間——そのぎりぎりの一瞬間に、わたしはもう異教徒と同じ者になつて、洗禮もわたしから取り去られてしまふのです、そしてわたしには何の責任もなくなる譯です——それに違ひありませんね？」

「鼻をつげんか、これ、早く鼻を。」と、好い機嫌で杯をぐいと呷りながら、フォードル・パーヴロキッチが急ぎ立てた。

「そこで、もはやわたしは基督教徒でないとすれば、敵の奴らから『お前は基督教徒か、基督教徒でないか?』と訊かれた時、嘘を吐いたことにはなりません。なぜといつて、まだわたしが敵にむかつて一言も口をきかない先きに、ただ言はうと心に思つただけで、既にわたしは神様から基督教徒としての資格を奪はれてしまつてゐるからです、もし資格を奪はれてしまつてゐるとすれば、あの世へ行つた際、キリストを否定したといふ理由で、わたしを基督教徒なみに、兎や角と詮議立てするどんな正義がある

のです? だつて、わたしは、ただ否定しようとして心に思つただけで否定するより前にもうちゃんと洗禮を剝ぎ取られてゐるんですからね、で、若しわたしは基督教徒でないとすれば、わたしはキリストを否定することもできません、なぜと言つて、否定しようにも否定すべきものがないではありませんか、穢らしい鞭打人が天國へ行つたからとて、なぜお前は基督教徒に生れなかつたと言つて、咎め立てするものはありませんからね、グリゴリイ・ワシーリエキッチ、一匹の牛から二枚の革の取れないことを知つてゐる位の人だつたら、こんな人間に罰を當てたりはしませんよ、萬能の神様だつて、その鞭打人が死んだ時には、穢れた両親から穢れた鞭打人としてこの世へ生れて來たからとて、當人に何の責任もないといふことを斟酌して、ほんのちよつびり、申譯だけの罰をお當てになるだけだと思ひますよ、(全然、罰しないといふわけにも行きますまいからね) また神様にしても無理に鞭打人を掴まへて、お前は基督教徒であつたらう、などと仰しやる譯には行かないぢやありませんか? そんなことを仰しやつたら、神様が眞赤な嘘をおつきになつたことになりませんか、いつたい天地の支配者たる神様が、たとへ一言でも嘘をお吐きになるやうなことがあるでせうかねえ?」

グリゴリイは立ち竦んだまま、眼を剝いて辯舌者を見つめてゐた。彼には今語られたことがよくは呑め込めなかつたけれど、それでもこの證語のやうな言葉の中から、何かしら或るものを掴むことができたので、まるで、出し抜けに額を壁にぶつつけた人のやうな顔をして、じつとその場に突つ立つてゐた。フォードル・パーヴロキッチは杯をぐいと飲み乾すと、甲高い聲を立てて笑ひ出した。

「アリオーシャ、アリオーシャ、どんなもんだい? おい驢馬、お主やなかなか理窟こきだな! イ



ワン、こいつは大方どこかのエズイタ派のところにおたんだぜ、おい、<sup>スメルヂ・インヂイ・エズイ</sup>悪臭い異教徒、いつたいお前はどこでそんなことを教はつて来たんだ？ だが、胡麻化し屋、お前の言つてゐることは嘘だよ、眞赤な嘘だよ、これグリゴリイ、泣くな、今すぐにわしらがこいつの尻理窟を叩き潰して呉れるからな、こら驢馬先生、さあ返答をしろ、たとへお前が敵の前で公明正大だとしても、お前自身は肚の中で、自分の信仰を否定するのぢやらう、そしてそれと同時に破門者になつてしまふのだと、お前は自分でも言つてゐるのぢやらう、ところで一旦、破門者になつたとすれば、地獄へ行つた時に、よくまあ破門者になつたと、お前の頭を撫でてくれはせんぞ、そのところをお前は何と思ふ、立派なエズイタ先生？」

「わたしが肚の中で信仰を否定したといふことは疑ひございませぬが、それだからとて別に罪にもなりやしませんよ、罪になるにしても極く當り前な罪ですよ。」

「何で極く當り前な罪です、ぢや？」

「馬鹿こけ、この罰あたりめが！」とグリゴリイが唸るやうに喚いた。

「まあ、よく御自分で考へて御覽なさいグリゴリイ・ワシーリエキツチ、」と、糞落つきに落ついて鹿爪らしくスメルヂャコフが言葉をつづけた、それは自分の勝利を自覺してゐながら、敗れた敵を憐れむといつた調子であつた。「まあ、考へて御覽なさい、グリゴリイ・ワシーリエキツチ、聖書にもかう言つてあるぢやありませんか、人が若しほんの小さな、芥子粒の信仰でも持つてをれば、山に向かつて海へはいれと言へば、山はその最初の命令とともに、猶豫なく海へはいつて行くつてね、どうですかねグリゴリイ・ワシーリエキツチ、わたしが不信心者で、あなたがしつきりなしにがみがみわたしを唸鳴り

つけなさるほど、立派な信仰を持つていらつしやるとしたら、試しに一つ、あの山に向かつて、命令して御覽なさいよ、海へとまで言はなくても、(何しろここからぢや海までは大分道のりがありますからね、)せめて、つい庭の外に流れてゐる、あの臭い溝でもよござんすよ、さうすれば直ぐに、あなたがどれほど唸鳴つてみなすつたところで、何一つびくともしないで、そつくり元のままでゐることは御自分でお分かりになりますよ、これはつまり、あなたが本當の意味の信仰を持つてもゐない癖に何ぞといへば、他人を悪口してゐなさるだけだつてことになりますよ、グリゴリイ・ワシーリエキツチ、しかし考へて見れば、これはあなただけぢやありません、今の時世で身分の上下を問はず、山を海の中へ押しこかすことのできるやうな人は一人だつてありませんよ、例外があつたところで、廣い世界中に一人か、多くて二人くらゐなものでせうて。それもどこか埃及あたりの沙漠の中で、こつそり隠遁してゐるでせうから、とてもそんな人は見つかりつこありませんよ、もしさうだとして、それ以外の人がみんな不信心者だしたら、あれほど萬人に知れ渡つたお慈悲深い御心の神様が、その沙漠にゐる二人の隠者を除けた他の、全世界の人間を、盡くお呪ひになつて、一人もお許しにはならないでせうか？ こんな譯ですから、一たん神様を疑つたとしたところで、悔恨の涙さへ流したら許して戴けるだらうと、わたしは信じてゐるのですよ。」

「おつと待つた！」と、フォードル・パーヴロキツチはすつかり有頂天になつて、金切り聲で叫んだ。「ぢやあ、その、山を動かすことのできる人間が、とにかく二人だけはあるとお前は考へるんだな？ イワン、そこんことをよく覺えて書き留めといてくれ、實に露西亞人の面目躍如たりだ！」



「ええ、お父さんの仰しやる通りです、これは宗教上の國民的な特質ですよ。」と、我が意を得たりといふやうな微笑を浮かべて、イワン・フォードロキッチは同意した。

「賛成だな？ お前が賛成する以上、それに違ひなしだ！ アリョーシカ、ほんとだらう？ まつたく露西亞的な信仰だらう？」

「いいえ、スメルチャコフは少しも露西亞的な信仰を持つてゐません。」と、眞面目な確固たる調子でアリョーシカが言つた。

「わしが言ふのはこいつの信仰のことぢやない、あの二人の隠者についての點だよ、あの一點だけの話だよ、あれこそ露西亞式だらう、まつたく露西亞式だらう？」

「ええ、その點は全然露西亞式です。」とアリョーシカは微笑んだ。

「驢馬先生、お前のこの一言は金貨一枚だけの値打ちがあるぞ、ほんとに今日お前に呉れてやるわい、だが、そのほかのことは嘘だぞ、眞赤な嘘だぞ、なあこら、お馬鹿さん、われわれ一同がこの世で信仰を持たないのは心が淺墓なからだ、何しろ、暇がないからなあ、第一、いろんな用事にかまけてしまふ、第二に神様が時間を碌々授けて下さらないで、せいぜい一日が二十四時間やそこいらでは、悔い改めるはさて置き、充分に眠る暇もないからなあ、ところが、お前が敵の前で神様を否定したのは、信仰のことよりほかには考へられないやうな場合で、然も是が非でも自分の信仰心を示さなくつちやならないやうな土壇場ぢやないかい！ おいどうだ、きやうだい、一理あるだらうぢやないか？」

「一理あるにはありますがね、まあ、よく考へて御覽なさい、グリゴリイ・ワシーリエキッチ、一理

あればこそ、尙のこと、わたしにとつて罪が軽くなるといふものです、若しわたしが間違ひのない正當な信仰を持つてゐたとしたら、その信仰のための受難に甘んじないで、穢らはしい回々教へ轉んだのは、まつたく罪深いことに違ひありませんよ、しかし、それにしても、責め苦を受けるといふところまでは行かないで済んだ筈ですよ、だつて、その時、眼の前の山に向かつて、さあ動いて來て敵を潰して下さい、へと言ひさへすれば、山は即刻動き出して、敵の奴輩を油蟲か何ぞのやうに押し潰してしまつた筈です、さうすれば、わたしは何ごともなかつたやうに、鼻唄でもうたひながら、神の榮光を讃へながら引き上げて行きますよ、ところが、もしその土壇場になつて、そのとほりにやつて見て、わたしがその山に向かつて敵を押し潰してくれと、わざと大きな聲で嗚鳴つたところで、山がいつかう敵を押し潰してくれさうにないとしたら、わたしだつてそんな恐ろしい命懸けの場合に、どうして疑ひを起さずにおられるものですか？ それでなくても、とても天國へなどまともに行きつけるものでないことを承知してゐますのに、だつて、わたしの聲で山が動かなくなつたところを見ると、天國でもわたしの信仰をあまり信用してくれなささうですから、大した御褒美があつた世でわたしを待つてゐるやうにも思はれませんからね、何をすき好んで、その上、役にも立たないのに自分の生皮を剥がせる必要がありませんか？ たとへ、もう半分脊中の皮を剥がれながらわたしが嗚鳴つたり喚いたりして見たところで、山はびくともしやしませんからね、こんな瞬間には疑ひが起さるくらゐは愚かなこと、恐ろしさの餘りに、思慮分別もなくなるか知れませんが、いや、分別を廻らすなんてことは全然不可能です、して見れば、この世でもあの世でも、自分に何の得になることでもなく、大して御褒美にもあづかれないと分かつたら、せめて自



分の皮だけでも大事にしようと思つたからとて、それが一體どれだけ悪いことでせう？ ですから、わたしは神様のお慈悲をあてにして、何ごともきれいに許して戴けるものと、どこまでもさう思つてゐるのです。」

Ⅶ

コニャクを飲みながら

討論はこれで終つたが、奇態なことに、あれほど上々の御機嫌であつたフォードル・パーヴロキッチが、終りごろから急に苦い顔をし出した。顔を皺めて、ぐいとコニャクを呷つたが、それはもうまるで餘計な一杯であつた。

「さあいい加減に出て行かんか、エズイタ共め、」と彼は下男に呶鳴りつけた。「もう出て行け、スメルチャコフ、約束の金貨はけふぢゆうに届けてやるから、お前はもう退つていいぞ。泣くな、グリゴリイ、マルファのところへ行きな、あれが慰めて、寝かしてくれらあな、」「横着者めらが、食事の後でゆつくり寛ろがせもしをらん、」命令に依つて下男たちが出て行くと、彼はいきなり腹立しさうに言ひ切つた。「この頃スメルチャコフは、食事のたんびに出しやばりをるが、餘つぽどお前が珍らしいのだと見

える、一體お前は どうしてあいつを籠絡したんだい？」と、彼はイワン・フォードロキッチに向かつて、かう言ひ足した。

「どうもしやしませんよ、」とこちらは答へた、「勝手に僕を尊敬する氣になつたんでせうよ、なあに、あれはただの下種下郎ですよ、しかし時期が到来したら、前衛に立つべき人間でせうね。」

「前衛に？」

「他にも、もつと立派な人間が出て来るでせうが、あんなものも出て来ますね、初めにあんなのが出て、それからもつといいのが現はれるのです。」

「で、その『時期』はいつ来るんだね？」

「狼火があがつたら、しかし、ことによると、燃えきらないかも知れませんが、今のところ民衆は、あんな煮出汁とり風情のいふことには、あまり耳を貸しませんからね。」

「なるほどな、ところでお前、あのブライムの驢馬めはいつも何だか考へてばかりゐるが、いつたい、どんなとこまで考へ抜くか、知れたもんぢやないぜ。」

「思想を蓄めこんでゐるのですよ。」とイワンは薄笑ひを洩らした。

「だがな、わしはちやんと知つとる、あいつは他の者にもさうだが、わしといふ人間に我慢できないのだよ、お前にだつて同じことだぞ、お前は『勝手に僕を尊敬する氣になつた』などと言つてをるけれどさ、アリオシカはなほのことだ、あいつはアリオシカを小馬鹿にしてをるよ、だが、あいつは盗みをしをらん、そこが取柄さ、それにいつも黙りこくつて告げ口をせんし、内輪のあらを外へ持ち出す



やうなこともない、魚饅頭も手際よく焼きをる、しかし、あんな奴なんぞ、ほんとにどうだつて構やせんわい、あんな奴のことをかれこれ言ふがものはないよ。」

「無論、言ふがものはありませんよ。」

「ところで、あいつが一人腹の中で何か考へ込んでをるといふと……つまり、露西亞の百姓は一般に言うて、うんとぶん殴つてやらにやならんのだ、わしはいつもさう言つてをるんだよ、百姓なんでもは鬮兒かたじけなくだから、同情してなんかやるには當らん、今でもたまにぶん殴る者がをるから、もつたものだ、露西亞の土地は、白樺があればこそ、しつかりしてゐるんだ、森を伐り拂つてしまつたら、露西亞の國も崩れてしまふのだ、わしは賢い人の味方をするな、われわれは一かど懶巧ぶつて、百姓を殴つことをやめたけれど、百姓らは相變らず自分で自分をぶつてをる、それでいいのさ、人を呪はば穴二つ……いや、どう言つたらいいかなあ……つまり、その、穴二つなんだ、まつたく露西亞は豚小屋だよ、ほんとに、わしがどんなに露西亞を憎んでをることだか……いや、露西亞をぢやない、この色んな悪をだ……、しかし、それは露西亞といふことになるかも知れない、*Tout cela c'est de la cochonnerie* それはみんな腐敗から出るの意。一體わしの好きなものが何だか知つとるか？ わしはその、頓智が好きなのだ。」

「また一杯あげましたね、もう澤山でせう。」

「まあ待つてくれ、わしはもう一杯やるよ、それからもう一杯やつたら、それでおつもりにするよ、どうもいかんよ、お前が途中で水を注すもんだから。わしはな、通りがかりにモークロエ村で、一人の老爺に訊ねてみたことがある、するとその老爺の言ふには『わしらあ罰をくはへると娘つ子をひつば

たくが、何よりも一番に面白えだ、ひつばたく役目は、いつでも若えもんにやらせますだ、ところが、今日ひつばたいた娘つ子を、明けの日には、若えもんが嫁にするつてわけさ、だもんだでいあまつ子らもそれを當りめえのやうに思つとりますだよ。』と、かうだ、何といふサード侯爵たちだらう？ まつたく旨えことを言ひをつたて、一つわしらも見物に出かけるかな、うん？ アリョーシカ、お前顔を赧くするのかい、何も羞かしがることはないよ、坊主、さつき修道院長の食事シヤクに招ばれて、坊さんたちにモークロエ村の娘つ子のことを話して聞かせなかつたのは残念だつたよ、アリョーシカ、わしはさつきお前んとこの修道院長に、うんと悪態を吐いたけれど、腹を立てないでくれよ、わしはついむらむらつとなつてなあ、もし神様があるものなら、ござらつしやるものなら、その時は勿論わしが悪いのだからどんな咎めも受けようさ、しかし、もう神様がまるつきりないとしたら、あんな御連中にはもう用なしぢやないか？ お前んとこの坊さんたちのことだよ、さうなつた曉には、あいつらの首を刎ねるくらゐぢや足りないぞ、なぜといつて、あいつらは進歩を妨げたんだからなあ、イワン、お前は信じてくれるかい？ この考へがわしの心を悩ましてるんだよ。駄目だ、お前は信じてくれんな、その眼つきでちゃんと分かるよ、お前は世間の奴らのいふことを本當にして、わしをただの道化者だと思つとるのだ、アリョーシカ、お前もわしをただの道化だと思ふかい？」

「いいえ、ただの道化だなんて思ひませんよ。」

「それは本當らしいな、お前が心からさう思つとるといふことは、わしも信じるぞ、正直な眼つきで、正直な口をききをるからな、ところが、イワンはさうぢやない、イワンは高慢だ……しかし、とにかく、



お前のお寺とはすつかり縁を切つてしまひたいもんだなあ。ほんとに露西亞ぢゆうの神祕主義を残らず引つ摺んで、世間の馬鹿者どもの眼を醒ますために、影も形もないやうに吹き飛ばしてしまふといいのだ。さうしたら、金や銀がどれだけ造幣局へ流れこむことだらうな！」

「何のために吹き飛ばすんです？」とイワンが言った。

「ちつとでも早く、眞理が光り出すようにだ、そのためなんだよ。」

「もしもその眞理が光り出すとしたら、第一にお父さんをまる裸に剥ぎ取つた上で……それから吹き飛ばすでせうよ。」

「おやおや！ こいつはお前の言ふ通りかも知れんて。いや、わしも驢馬だわい、」とフォードル・パーヴロキッチはちよつと額を叩いて、急に體を反らした、「さういふことなら、アリョーシヤ、お前の寺もあのままにしておかう、まあ、わしらのやうな伶俐な人間は暖い部屋に陣どつて、コニヤクでもきこしめすとするさ、なあ、イワン、ひよつとすると神様が、是非さうするやうにお決めなされたのかも知れんて。ところでな、イワン、神はあるものか、ないものか、言つて見い。待て待て、確かなことを言ふんだぞ、眞面目に答へるんだぞ！ 何をまた笑つてをるのだい？」

「僕が笑つてゐるのは、さつきお父さんが、スメルヂェコフの信仰、——例の山を動かすことのできる二人の隠者が、どこかにゐるつていふ、あれについて、なかなか旨い批評をなすつたからですよ。」

「ぢや、今の話がそれに似るといふのかい？」

「大いに」

「ふん、して見れば、わしも露西亞人で、どこか露西亞的な特性があるといふ譯かな、だが、お前のやうな哲學者にだつて、同じやうな一面のあることを、とつ摺まへて見せてやれさうだぞ、ひとつ押へて見せようか、わしは請け合つて、明日にでも取つちめてやるぞ。とにかく、神様があるかないか言つて見い、ただ、眞面目にだぞ！ わしは今、眞面目にならなくてはいけないのだ！」

「さう、神はありません。」

「アリョーシカ、神様はあるのか？」

「神はあります。」

「イワン、それでは、不死はあるのか、まあ、どんなのでもよいわ、ほんの少しばかりでも、これつばかりでもいい。」

「不死もありません。」

「どんな風のも？」

「さう、どんなのも？」

「つまり全くの零か、それとも何かあるのか？ ひよつとしたら、何かありさうなものぢやないか？ 何にしても、まるつきり何もないといふ筈はないぞ！」

「絶対の無です。」

「アリョーシカ、不死はあるのか？」

「あります。」



「神も不死もか？」

「神も不死もあります。」

「ふむ！ どうやらイワンの方が本當らしいぞ、やれやれ、考へるだけでも恐ろしいわい、人間といふものはどれだけ信仰を捧げたことか、どれだけいろいろの精力を、こんな空想のために浪費したことか、しかもそれが何千年といふ永い間なのだ！ 誰がいつたい、人間をこんなに愚弄してゐるのだ？ イワン！ もう一遍、最後にきつぱり言つてくれ、神は有るものか無いものか？ これが最後だ！」

「最後でも何でも、無いものは無いのです。」

「それぢや、誰が人間を愚弄しをるのだ、イワン？」

「きつと悪魔でせうよ。」と言つて、イワン・フォードロキッチはにやりとした。

「ぢや、悪魔はあるのか？」

「いや、悪魔ありませんよ。」

「そいつは残念だ、ちえつ糞、ぢやあ神なんてものを初めに考へ出した奴を、どうして呉れよう？ 白楊の木へぶら下げて、絞首にしてやつても、飽き足りないぞ。」

「神が考へ出されなかつたら、文明といふものも、てんでなかつたでせう。」

「なかつたかも知れんといふのか？ 神がなかつたら？」

「さうです、それにコニャクも無かつたでせうよ、が、それは兎に角、そろそろコニャクを取り上げなくてはなりませんね。」

「待て、待て、待つてくれ、な、もう一杯だけだ、わしはアリョーシヤを侮辱したて、お前は怒りやせんだらうな、アレクセイ？ わしの可愛い可愛いアレクセイチックや！」

「いいえ、怒つてなんかおまかせんよ、僕はお父さんのお肚の中を知つてゐます、お父さんは頭より心の方がよつぽどいいのです。」

「わしの頭よりも心の方がいいだつて？ ああ、しかもさう言つてくれるのが誰だらう？ イワン、お前もアリョーシカが好きかい？」

「好きです。」

「好いてやつてくれよ（フォードル・パーヴロキッチはもう、ひどく酔ひが廻つて來たのである）なあ、アリョーシヤ、わしはけふお前の長老に無禮なことをしたよ、だが、わしは氣が立つてゐたのだよ、しかし、あの長老には、なかなか頓智があるなあ、お前はどう思ふ、イワン？」

「あるかも知れせんね。」

「あるとも、あるとも、Il y a du Piron là dedans あつちの中にはピロンの面影がある あれはエズイタだよ、但し露西亞式のさ、高尚な人間つてものはみんなさうだが、あの人も聖人様の眞似なんかして……心にもない芝居を打たにやならんので、肚の中ではじりじりしてゐるのだよ。」

「でも、あの人は神を信じてゐられますよ。」

「なんの、これつぽちも信じてるものか、お前は知らずにゐたのかい？ あの人は自分の口からみんなにさう言つとるぢやないか、いやみんなといつても、あの人のそこへ訪ねて來るお慥巧な連中にだけ



だけれど、縣知事のシュルツには明らかに、『Creto 債は』といつても、何を信じてをるのか、分かりません。』と言つたものだよ。』

「まさか?」

「いや、まつたください、しかし、わしはあの人を尊敬はしてゐる、あの人にはどこかメフィストフェレス式なところ、といふより、寧ろ『現代の英雄』に出て来る……アルベインだつたかな、……そんな風なところがあるよ、つまり何だよ、あれは助平爺なのさ、あの人助平なことと言つたら、ひよつとわしの娘か女房が、あの人のところへ懺悔にでも行かうものなら、とても心配で堪るまいと思ふくらゐなんだよ、第一あの人があんな話を始めると思ふかい……一昨年あの人があんな茶の會へ呼んだことがある、利久酒つきなのさ、利久酒は奥さんたちが持つて行つてやるんだよ、その時にだよ、ひよんな昔話をやり出したので、わしらはすつかり腹の皮を繕つてしまつたわい……別して面白かつたのは、あの人一人の衰弱した女を癒した話だ、『足さへ痛くなかつたら、わしが一つ踊りを見せて進ぜるのだが、』と言ふのさ、それがまた何の踊りだと思ふね? 『わしも若盛りには随分いろんな眞似をして來ましたわい、』だよ、それに、あの方はデューミードフといふ商人から、六萬留も捲きあげたことがあるんだよ。』

「何、盗つたのですか?」

「その商人があの人を善人だと思つて、『どうぞ、これを預かつて下さい、明日うちで家宅搜索がありますから』と言ふので、あの人があつたんだよ、ところが後になつて『あれはお前さんがお寺へ寄進

なすつたのぢや』と、かうだ、わしがあの人に、お前さんは悪黨だと言つてやつたら、わしは悪黨ぢやない、心が廣いのぢやとおいでなすつた……いや、待てよ、これはあの人のお話ぢやない……ああ、別の男のことだつたよ、わしは、ついで他の男の話と混同してしまつてな……氣がつかなかつたのだよ。さあ、もう一杯だけで澤山だ、イワン、蠟を片づけてくれ、それはさうと、わしがあんな無茶なことを言つてゐたのに、なんでお前は止めてくれなかつたのだ……それは嘘だとなぜ言つてくれんのぢや、イワン?」

「自分でおやめになると思つたものだからね。』

「嘘を吐け、お前はわしが憎くて止めてくれなんだのだ、ただ憎いからなんだ、お前はわしを馬鹿にしてをるのだ、このこわしのところへやつて來て、わしの家でわしを馬鹿にしてをるのだ。』

「だから僕はもう行きますよ、お父さんはコニャクに吞まれてしまつたのですね。』

「わしはお前に、どうか後生だから、チェルマーシニヤへ……一日か二日でよいから、行つて來てくれと、あれほど頼んでゐるのに、お前は出かけてくれんぢやないか。』

「そんなに仰しやるなら、明日にでも出かけますよ。』

「なんの行くものか、お前はここををつて、わしの見はりがしてゐたいのだ、さうだとも、それだから行かうとしないのだから、この意地わるめが!」

老人は容易に鎮まらなかつた。彼はもう、すつかり酔ひが廻つて、それまでどんなに温なしかつた酒呑みでも、急に不貞腐れて威張り出さなければ承知しなくなるといつた、そんな程度にまで達してゐた



のである。

「何をお前はさう、わしの方ばかり睨むのだ？ それは何といふ眼つきだ？ お前の眼はわしを睨みながら、『だらしのない酔っ拂ひの面だ』と言つてをる、その眼つきは迂散臭いぞ。どうも、人を小馬鹿にした眼つきだ……お前は何か胸に一物あつてやつて来たんだな、ほら、アリョーシヤの眼つきを見、晴れ晴れしとるぢやないか、アリョーシカはわしを馬鹿にしちやあをらんぞ。な、アリョーシカ、イワンを好くことはないぞ。」

「兄さんをそんなに怒らないで下さい！ 兄さんを侮辱するのをやめて下さい。」とアリョーシカは語氣を強めて言つた。

「うん、なあに、わしもな、よしよし、ああ、頭が痛いわい、イワン、鑿を片づけてくれんか、もう三度も同じことを言ふぞ、」彼はすこし考へ込んだが、不意に長く引つばつたやうな狡さうな笑ひ聲を立てながら、「なあ、イワン、こんな老耄の死にぞこなひに腹を立てんでくれよ、わしはお前に好かれんのはよう知つてをる、だがまあ、怒らないでくれ、わしはとても人に好かれるといふ柄ぢやないわい、ところで、どうかチエルマーシニャへ出かけてくれ、わしも行くからな、土産を持つて行くぞ、そしてあつちで一人いい娘つ子を見せてやらう、もうずつと前から見つけてあるんだよ、今でも跳で跳ね廻つとるだらうて、跳の娘だからとて驚くことはない、いや、馬鹿にしたものではないぞ——なかなかの上玉だ！……」

彼はさう言つて、自分の手をちゆつと吸つた。

「わしにとつてはな、」と、彼は自分の好きな話題に移ると同時に、まるで一時に酔ひが醒めてしまつたやうに、甚く元氣づいて来た、「わしはな……こんなことを言つても、お前たちのやうな仔豚同然なねんねには分かるまいが、わしにはな……これまでの一生を通じて、女に會つて見苦しいと思ふことはなかつたよ、これがわしの原則でなあ！ 全體、お前たちにこれが分かるか知らん？ どうして、どうして、お前らにこれが分かつてなるものか！ お前らの體内には血の代りに、まだ乳が流れてをるのだ、まだ殻が脱けきらんのだ！ わしの原則によるとな、どんな女の中にも、決して他の男には見つからんやうな、頗る、その面白いところが見つけ出せる——だが、自分で見つけ出す眼がなくてはならん、そこが肝腎だ！ 何よりも手腕だよ！ わしにとつては不器量な女といふものがないのだ、女であることが、もう興味を半ばをなしてをるのだよ、いや、こんなことはお前たちに分かる筈がない！ 老嬢などといふ手合の中からでも世間の馬鹿者どもはどうしてこれに氣がつかずに、むさむさ年を食はしてしまつたのかと、驚くやうな處を探し出すことが時々あるのだよ、跳女やすべたには、初手に先づ吃驚させてやるのだ——これがかういふ手合に取りかかる秘訣なのさ、お前は知らないかい？—かういふ手合には、まあ、わたしのやうな卑しい女を、こんな立派な旦那様が、と思つて、はつとして嬉しいやら羞かしいやらで、茫とした氣持ちにしてしまはにやいかんて、いつも召使に主人があるやうに、いつもこんな下種女にれつきとした旦那がついてるなんて、うまくできてをるぢやないか、人生の幸福に必要なのは全くこれなんだよ！ ああさうだ！……なあアリョーシカ、わしは亡くなつたお前のお袋をいつも吃驚させてやつたものだよ、尤も、別な遣り方ではあつたがね、ふだんは、どうして、甘い言葉ひとつ



かけることぢやなかつたが、ちやうど頃あひを見はからつては出し抜けに精一杯ちやほやして、あれの前で膝を突いて這ひすり廻つたり、あれの足を接吻したりして、擧句の果てには、いつでも、いつでも——ああ、わしはまるでつい今しがたのこのやうに憶えてをるが、屹度あれを笑ひ轉げさしてしまつたものだよ、その小さい笑ひ方が一種特別で、零れるやうな、透きとほつた、高くないが、神経的な奴さ、あれはそんな笑ひ方しかしなかつたんだよ、そんな時はきまつて病氣の起る前で、翌る日はいつも、憑かれた女になつて喚き出す始末だ、だから今の細い笑ひ聲も決して嬉しさの現はれではなく、こちら一杯食はされたことになるのだけれど、それでもまあ嬉しいには違ひないさ、どんなものの中からも特別な興味を探し出すつて言ふのは、つまりこれなんだよ！ ある時ベリヤーフスキイの奴が——その頃さういふ金持の好男子がこの町に住んでゐて、あれをつけ廻して、家へもよくやつて來をつたので——そいつが不意に、何かのはづみで、わしの頬を、それもあれの面前で、擲りつけやがつたのだ、すると、あの牝羊みたいな女が、この頬を一件のために、このわしをひつばたきかねないばかりの權幕で食つてかかつたのさ、『あなたは今ぶたれましたね、ぶたれましたね、あんな男に頬べたをぶたれたなんて！ あなたはわたしをあの男に賣り渡さうとしてらつしやるのでせう……ほんとに、よくもわたしの眼の前であなたをぶつたものだ！ もうもう決して、二度とわたしの傍へ寄せつけやしない！ さあすぐに追つ驅けて行つて、あの男に決闘を申し込んで下さい』……そこでわしは、あれの心を鎮めるために、お寺へ連れて行つて、坊さん方に御祈禱をして貰つたよ、しかし、アリョーシヤ、神かけてわしはあの『憑かれた女』を侮辱したためしはないよ！ いや、一度、たつた一度きりある、そ

れはまだ結婚したての、初めての年だつたが、その頃あれは、ひどく祈禱に凝つてゐて、聖母のお祭などには殊に喧ましく、その日にはわしまで自分の部屋から書齋へ追つばらふ始末なんだよ、そこでわしはあれの迷信を敲き毀してやらうと思つたのさ『そら、見てをれよ、これがお前の聖像だ、そら、かうしてわしがはづすよ、お前はこれを靈驗いやちこなものだなどと勿體ながつてるが、わしがそら、かうして、お前の眼のまへで唾をひつかけてやるけれど、何の、罰なんか當るもんか！』ところが、あれがこちらを見た時の形相といつたら、どうも、今にもわしは取り殺されるのぢやないかと思つたよ、しかし、あれは飛びあがつて手を拍つただけで、急に両手で顔を蔽つたと思ふと、ぶるぶる震へ出して、床の上へぶつ倒れると、……そのまま、ぐつたり崩れてしまつた……アリョーシヤ、アリョーシヤ！ お前どうしたんだ！』

老人は吃驚して飛びあがつた、アリョーシヤは父が母親のことを話した時から、だんだん顔色を變へ始めたのである。顔は赭くなり、眼は輝き、唇はびくびく慄へ出した……酔つ拂つた老人はそれまで何の氣もつかずに、頻りに口角から泡を飛ばしてゐたが、この時、急にアリョーシヤの身に甚だ奇怪な事態が生じたのである。といふのは、たつた今父が話した『憑かれた女』の状態とまったく同じものが、思ひがけなく彼に現はれたのである。アリョーシヤは卓から不意に飛び上るなり、今の話の母親そのままに手を拍つと同時に両手で顔を蔽つて、まるで足を拂はれたやうに、椅子の上へ倒れかかると、ヒステリカルに痙攣させながら、聲は立てないが思ひがけなくせき上げる涙に泣きくづれてしまつたのである。この恐ろしい、母親そつくりの類似が、殊のほか老人を驚かしたのである。



「イワン！、イワン！ 早く水を持って来てやれ、まるであれのやうだ、寸分たがはずあれにそつくりだ、あの時のこれの母親と同んなじだ！ お前の口から水を吹きかけてやれ、わしも彼女にさうしてやつたんだよ、これは自分の母親のことで、母親のことで……」と彼はイワンに向かつて、しどろもどろに呟いた。

「けど、僕のお母さんが、つまりアリオーシャのお母さんだと思ふんですが、どうお考へです？」突然、イワンは憤ろしい侮辱の念を制しきれないで、思はずかう口走つた。老人はぎらぎら光る彼の眼眸にぎつくりした。しかし、その時、ほんの一瞬間ではあつたが、實に奇態なことが起こつたのである。といふのは老人の頭から、アリオーシャの母が取りもなほさずイワンの母であるといふ考へが、すつかり脱け去つてゐたのである。

「なんでお前の母親がさうなんだ？」彼は、何が何だか腑に落ちないで呟いた、「なんでお前はそんなことを言ふのだ？ 一體どの母親のことを言ふのだい……あれは何だよ……やつ、こん畜生！ さうだ、あれはお前の母親だとも！ ちえつ、畜生！ いや、こいつはつひぞない、頭がぼうつとしてゐたんだよ、勘辯してくれ、わしは又、何だよ、その、イワン……へ、へ、へ！」そこで彼はふいと口を噤んだ。酔餘の、引きのばしたやうな、半ば意味のない、薄笑ひがにやりとその顔にひろがつた。が、突然この瞬間に玄關で烈しい喧騒の音が起つて、狂暴な喚き聲がしたと思ふと、ぱつと扉があいて、廣間へドミトリー・フォードロキッチが躍り込んで來たのである。老人は怯え上がつて、イワンの方へ駈け寄つた。「人殺しだ、人殺しだ！ 助けてくれ、た、助けて！」と、イワン・フォードロキッチのフロックコ-

トの裾にしがみつきなながら、彼はかう叫びつづけた。

## IX

## 淫蕩な人たち

ドミトリー・フォードロキッチのすぐ後ろから、グリゴリーとスメルチャコフとがつづいて廣間へ駆け込んだ。その前に二人は、彼を通すまいとして玄關でも争つたのである。(それは、もう二三日も前から授けられてゐる、フォードル・パーヴロキッチの指圖によつてである)ドミトリー・フォードロキッチが部屋の中へ飛びこむなり、一瞬間立ち止つてあたりを見まはしてゐる暇に、グリゴリーは逸早く食卓を一廻りして、奥へ通じてゐる、正面の観音開きの扉を閉めきつた。そして閉めた扉の前に立ち塞がると、大手を擴げて、最後の血の一滴まで、この入口を防いで見せるぞといつた身構へをした。これを見ると、ドミトリーは、叫ぶといふより、妙に甲走つた喚き聲を立てるなり、グリゴリーに跳びかかつて行つた。

「ぢやあ、あいつはそこにゐるんだな！ そこへ隠しをつたな！ だけ、畜生！」と、彼はグリゴリーを押し退けようとしたが、相手は彼を突き戻した。憤激の餘りかつと取りのぼせた彼は拳を振りかぶ



りさま、力まかせにグリゴリイを殴りつけた。と、老僕は足を掬はれたやうに、すでんと倒れた。彼はそれを跳ね越えて扉の中へ突入した。スメルヂャコフは廣間の反対側の端に突つ立つてゐたが、眞蒼になつて、ぶるぶる慄へながら、びつたりとフョードル・パーヴロキッチの方へ擦り寄つて來た。

「あいつはここにゐるぞー」とドミトリイ・フョードロキッチが叫んだ。「おれは今、あいつがこの家の方へ曲がつたのを、ちやんと見とどけたんだ、ただ追ひつゝくことができなかつただけなんだ、まあ、どこにゐる？ どこにゐる？」

この『あいつはここにゐる！』といふ叫び聲が、フョードル・パーヴロキッチに異常な感銘を與へた。そして彼のすべての驚愕はどこかへ飛んでしまつた。

「そいつを取り押へろ、取り押へろ！」と喚きながら、彼はドミトリイ・フョードロキッチの後から轉げるやうに駈け出した。グリゴリイはその間に床から起ち上がったが、まだ人心地がつかない様子であつた。イワン・フョードロキッチとアリョーシャとは父の跡を追つて駈け出した。三つ目の部屋で何が床へ落ちて、ぐわらぐわらと碎ける音がした。それは、大理石の臺に載せてあつた硝子の大花瓶（あまり高價なものではない）で、ドミトリイが傍を駈け抜ける拍子に、ひつかけて倒したのである。

「おおい！」と老人は喚き聲を立てた「誰か來てくれい！」

イワン・フョードロキッチとアリョーシャがやうやく老人に追ひついて、無理やり廣間へ連れ戻つた。「何だつて後を追つかけたりするんです！ 本當に殺されてしまふぢやありませんか！」と、イワン・フョードロキッチは腹立たしげに父を嗷鳴りつけた。

「ワ―ネチカにリョ―シエチカ、それぢやあ、グル―シエンカは、ここにゐるんぢやぞ、あいつが自分で見たと言ひをつた、あれが駈けこんだのを見た……」

彼は息ぎれがして言葉をとぎらした。まさかこんなところへグル―シエンカが來ようなどとは思ひもかけなかつたので、ここへ來てゐると意外な知らせを耳にした彼は一時に我れを忘れてしまつたのである。彼は心も顛倒したやうにぶるぶる慄へてゐた。

「だつて、あの女の來なかつたことは、御自分でもちやんと知つてらつしやるぢやありませんか！」とイワンが叫んだ。

「しかし、あちらの戸口から入つたのかも知れん。」

「あちらの戸口には錠がおりてゐますよ、それに自分で錠を持つていらつしやる癖に……」

ドミトリイが突然、またもや廣間へ現はれた。勿論、彼は裏口に錠のおりてゐるのを見て取つたのだ。果してその錠はフョードル・パーヴロキッチのポケットに入つてゐた。どの部屋もやはり窓はすつかり閉めきつてあつた。つまるところ、どこにもグル―シエンカの入つて來た口も、飛び出して行つた穴もなかつたのである。

「あいつを取り押へろ！」と、ドミトリイの姿を再び見つけると同時に、フョードル・パーヴロキッチが金切り聲で叫び出した。「あいつはわしの寢室で金を盗みをつたのだ！」さう言ふなり、彼はイワンの手を掻き放して、またもやドミトリイに飛びかかつて行つた。しかしドミトリイは、両手を振りかざすと共に、いきなり老人の兩の鬢に残つてゐる疎らな髪をひつ掴んで、ぐいと引き寄せさま、烈しい



地響きを立てて床に投げとばした。そして打ち倒れた父の顔を、いきなり二つ三つ靴の踵で蹴とばしたのである。老人は鋭い聲で悲鳴をあげた。イワン・フョードロキツチは、兄ドミトリイほどの腕力はなかつたけれど、両手で兄を抱き止めて、やつとこのことで父親から挫ぎはなした。アリョーシャも頼りない力を振り絞つて、前から兄に抱きつきながら、それに加勢した。

「氣でも違つたのぢやないのか、ほんとに殺してしまふところだつたぜ！」とイワンが叫んだ。

「それが當然なんだ！」と、ぜいぜい息を切らしながらドミトリイが喚き立てた。「これで死ななかつたら、また殺しに来てやる、手前たちに庇へるもんか！」

「ドミトリイ！　すぐここから出て行つて下さい！」とアリョーシャが嚴然たる聲で叫んだ。

「アレクセイ！　お前だけは教へてくれ、おれに信用のできるのはお前きりだから、今しがたあの女はここへ來なかつたかい？　おれはあの女が横町から籬の傍をこつちへと迂り込むのを、ちやんと見届けたんだ、おれが聲をかけたなら、逃げ出してしまつたんだ……」

「誓つて、あの女はここへなぞ來ませんでしたよ、第一あの女がここへ來ようなどとは誰も思つてもゐなかつたのです！」

「でも、おれはちやんと見届けたんだがなあ……して見ると、あいつは……よし、すぐあいつの在所を突きとめてやる……さよなら、アレクセイ！　もう決して、伊蘇普爺イソップ爺に金のことは一言もいふな、それよりカテリーナ・イワーノヴナのそこへ、これからすぐに行つて、間違なく、『よろしく申しました』と言つてくれ！　いいか、よろしく申しましたと言ふんだぞ、よろしく、よろしくつてな！　そしてこ

の騒ぎのことも詳しく話してくれ！」

その間にイワンとグリゴリイとで老人を抱き起こして、肘椅子へ坐らせた。顔は血みどろになつてゐたけれど氣は確かで、貪るやうにドミトリイの喚き聲に耳を敬てゐた。彼にはまだ、グルーシエンカがほんとにどこか、家の中にあるやうな氣がしてならなかつたのである。ドミトリイ・フョードロキツチは、ふと出がけに、憎々しげにじろりと父を睨んだ。

「おれはお前さんの血を流したからつて、後悔なんぞしないぜ！」と彼は喚き立てた。「氣を附けるよ、爺め、空想に氣をつけることだぜ、おれにだつてやつぱり空想があるんだからな！　お前さんなんざ、おれの方から組つてやら、もう頓と縁切りだ……」

そして彼は部屋を駈け出して行つた。

「あれはここにをるぞ、確かにここにをる！　スメルヂャコフ、スメルヂャコフ」と老人は、指でスメルヂャコフを招きながら、やつと聞きとれるだけの嘎れ聲で言つた。

「あの女なんか來てゐるもんですか、ほんとに譯のわからない爺さんだなあ、」とイワンは、がみがみ父を嗷鳴りつけた。「おや、氣絶した！　はやく水とタオルだ！　早くしろ、スメルヂャコフ！」

スメルヂャコフが水を取りに駈け出した。やがて老人は着物を脱がされ、寢室へ運ばれて、寢臺に寝かされた。濡れ手拭が頭に巻かれた。コニャクの酔ひと、激情と、身に受けた打撲のために衰弱しきつた彼は、頭を枕につけるのが早いか、直ぐに眼を瞑つて前後不覺になつてしまつた。イワン・フョードロキツチとアリョーシャは廣間へ戻つた。スメルヂャコフは毀れた花瓶の破片を取り片づけてゐたが、



グリゴリイは陰氣に眼を伏せて、じつと卓の傍に佇んでゐた。

「お前も頭を冷したらどうだい、そして寢床へ入つて寢た方がいいよ、」と、アリョーシャはグリゴリイに向かつて言つた。「僕たちがここにゐて、お父さんは見てゐるからさ、兄さんが随分ひどくお前を打つたからなあ……それも頭を。」

「あの人はわしに、道に外れた仕打ちをなさつただよ！」と、グリゴリイは一言一言を區切るやうに、鬱いだ調子で言つた。

「兄貴はお前どころぢやない、親爺にさへ『道に外れた仕打ち』をしたよ！」と、イワン・フォードロキツチは口を歪めながら言つた。

「わしはあの人行水まで使はしてあげただに……わしに道ならぬ仕打ちをしただよ」とグリゴリイは繰り返した。

「勝手なことを言つてる、おれがもし兄貴を引き放さなかつたものなら、ほんとに殺してしまつたかも知れないぜ、あんな伊蘇普爺イソップ爺に手間暇がかかるもんか！」とイワン・フォードロキツチがアリョーシャに囁いた。

「えい、飛んでもないことを！」とアリョーシャが叫んだ。

「何が飛んでもないんだ？」と、やはり小聲で、イワンは忌々しうに顔を歪めながら囁いた。「毒蛇が毒蛇を呑むまでのことさ、結局、両方ともそこへ落ちて行くんだよ！」

アリョーシャはぎくりとした。

「だが、勿論おれは人殺しなんかさせやしないよ、今だつてさせなかつたやうにさ。アリョーシャ、お前ここにつてくれ、おれは庭を少し散歩して来るからな、何だか頭が痛くなつて来たんだ。」

アリョーシャは父の寢室へ入つて、枕許の衝立の蔭に一時間ばかり坐つてゐた。と、不意に老人が眼を見開いて、長いこと無言のまま、じつとアリョーシャを見つめてゐた。それは何か思ひ出さうとしてゐるらしかつたが、突然、その顔に激しい興奮の色が浮かんた。

「アリョーシャ、」と、彼は不安さうに囁いた。「イワンはどこにをる？」

「庭ですよ、頭が痛むんださうです、あの人が僕らの見はりをしてゐてくれるんです。」

「鏡を取つてくれ、そら、そこに立ててある。」

アリョーシャは、箆笥の上に立ててある、小さな丸い組合せ鏡を父に渡した。老人は切りにそれを覗き込んだ。鼻が大分ひどく腫れあがり、額には、左の眉の邊にかなり目立つて紫いろの皮下出血ができてゐた。

「イワンは何と言つとる？　アリョーシャ、わしのたつた一人の息子や、わしはイワンが怖ろしい、わしはあいつより、イワンの方が怖ろしいのだ、わしに怖くないのは、ただお前だけだよ。」

「イワン兄さんだつて怖がることはありませんよ、イワン兄さんは腹を立ててゐるけれど、お父さんを護つてくれますよ。」

「アリョーシャ、それで、あいつはどうしたんだ？　グルーシエンカのところへ飛んで行つたのか！　なあ、可愛い天使、ほんとのことを言つてくれ、さつきグルーシエンカはここへ來なかつたのかい？」



「誰も見かけた者がいないのです、あれは嘘ですよ、来やしませんとも！」

「でも、ミーチカはあれと結婚するつもりなんだよ、結婚する！」

「あの女は兄さんと一緒になどなりませんよ。」

「ならんとも、ならんとも、ならんとも、決してなりはせん！……」この際、これ以上うれしい言葉を聞くことはできないもののやうに、老人は雀躍りせんばかりに悦んだ。彼は歡喜のあまりアリョーシヤの手を掴んで、自分の胸へしつかり押しつけるのであつた。そのうへ涙さへ眼に輝き出したほどである。「さつきわしが話した聖母マリヤの御像も、お前にやるから持つて行くがいい、お寺へも歸るがいいぞ……」けふ言つたことは冗談だから怒るなよ。頭が疼い、アリョーシヤ……アリョーシヤ、どうかわしの得心がゆくやうに、ほんとのことを聴かしてくれ！」

「まだ同じことを訊くんですか、あの女が来たんぢやないかつて？」とアリョーシヤは傷ましさに言つた。

「SSヤ、SSヤ、SSヤ、わしはお前のいつたことを信じてゐるよ、今度はかうぢや、お前が自分でグルーシヤのところへ行くか、それともほかで何とかして、あれに會つてな、あれがどつちにする氣でるか——わしか、それともあいつか、どつちにする氣でるか、訊いて見てほしいんだよ、早く、少しも早くな、そしてお前の眼で見て、ひとつ判じてくれるのだ、うん？ どうぢや？ できるか、できるか？」

「もし、あの女に會つたら、訊いて見ませう。」と、アリョーシヤは當惑したやうに呟くのであつた。

「いんにや、あれはお前に話しはせんぞ、」と老人が遮つた。「あいつは旋毛曲がりだからな、いきなりお前を接吻して、あんたのお嫁になりたいわ、つて言ふだらうよ、あれは嘘つきの恥知らずだよ、いや、お前はあいつのところなんぞへ行つちやあならん、斷じてならんぞ！」

「それにまたよくないことです、お父さん全くよくないことですよ。」

「あいつはさつき、どこへお前を使ひにやらうとしてゐたのだ、さつき逃げて行く時、『行つて来い』つて嗚鳴つたぢやないか？」

「カテリーナ・イワノヴナのところがへです。」

「金の用でだらう！ 無心をしにだらう？」

「いいえ、金の用事ぢやありませんよ。」

「あいつには金がないのだよ、總一文ないのだよ、なあアリョーシヤ、わしは一晚ゆつくり寝て考へるから、お前はもう行つてもいいぞ、事によると、お前、あれに會ふかも知れんな……しかし、あすの朝、間違ひなくわしのところへ来てくれよ、屹度だぞ、わしはその時、お前に一つ話したいことがあるのだよ、来てくれるか？」

「参ります。」

「来てくれるのなら、勝手に見舞ひに寄つたやうな顔をしてゐてくれ、わしが呼んだといふことは誰にも言ふんぢやないぞ、イワンには何にも言つちやならんぞ。」

「承知しました。」



「さやうなら、わしの天使、さつきお前はわしの味方をしてくれたな、あのことは死んでも忘れんぞ、あすは是非、お前に言はにやあならんことがあるけど……まだもう少し考へて見なければならんから……」

「いま気分は如何です？」

「あすはもう起きるよ、あすは、すつかりもう癒るわい、すつかり！」

庭を横切らうとして、アリオーシャは、門際のベンチに腰掛けてゐるイワンに出會つた。イワンは鉛筆で何か手帳に書きつけてゐた。アリオーシャはイワンに、父が眼を醒して正氣に返つたことと、自分に修道院へ寝に歸つてもいい、と言つたことなどを話した。

「アリオーシャ、あすの朝、僕はお前に會へたら大變都合が好いんだがな。」とイワンは立ち上がつて、愛想よく言ひ出した。かうした愛想のいい口調はアリオーシャには、全く思ひがけなかつた。

「僕はあすホフラーコワ夫人のところへ出かけますし、」とアリオーシャは答へた、「それにカテリーナ・イワーノヴナのところへも、今晚もし留守だと、あすまた行くかも知れません……」

「ぢや、これから、やつぱりカテリーナ・イワーノヴナのところへ行くんだね？ 例の『よろしく、よろしく』かい！」突然イワンは、にやりと笑つた。アリオーシャは妙にどきまぎした。

「おれはどうやら、さつき兄貴の嗚鳴つたこともすつかり讀めたし、以前からのことも幾分わかつて来たやうな氣がするよ。ドミトリイがお前を使ひにやる譯は、きつとあの女に……その……何だよ……いや、つまり一口に言へば、『よろしく言つて』ほしうからなのさ。」

「兄さん！ 一體、お父さんとミーチャとの、あの恐ろしい事件は、どんな風に結末がつくんでせうね？」とアリオーシャが叫んだ。

「はつきりしたことを言ひ當てる譯にはいかんよ、だが、大したこともなしに、立ち消えになるかも知れんよ、あの女は、黙だぜ、何れにしても、親爺は家の中に引き止めて置いて、ドミトリイを家へ入れないことだ。」

「兄さん、ぢやもう一つ訊きたいんですがね、人間は誰でも、他人を見て、誰は生きる資格があつて、誰は資格がない、などとそれを決める権利を持つてゐるものでせうか？」

「何だつて茲へ資格の決定なんか持ち込むんだい！ この問題は資格などを基礎に置くべきでなく、もつと自然な、他の理由のもとに、人間の心で決定されるのが最も普通だよ、だが、権利といふ點では、誰がいつたい希望する権利を持つてゐないだらう？」

「しかし他人の死ぬのを希望するつて譯ぢやないでせう？」

「他人の死ぬことだつて仕方がないさ、それにすべての人がそんな風な生き方をしてゐる、といふよりは、それ以外の生き方がないんだからね、何も、自分で自分に嘘をつく必要はないぢやないか、お前がそんなことを持ち出したのは、『毒蛇が二匹で呑み合つて』といつた、おれのさつきの言葉から思ひつたのかい？ さういふことなら、おれの方からも一つ訊きたいね、お前はこれのおれも、ミーチャと同じやうにあの伊蘇普爺の血を流し兼ねない——つまり殺し兼ねない人間だと思つてゐるかい？」

「何を言ふのです、イワン！ そんなことは僕は、夢にも考へたことはありません！ それにドミト



リイだつてまさかそんな……」

「いや、それだけでも有難いぞ！」とイワンはにやりとして、「おれはいつでも親爺を護つてやるよ、しかし、希望の中にはこの際、十二分の餘裕を残して置くぞ。ぢや、明日までさやうなら、おれを責めないでくれ、そして悪者あつかひにしないでなあ。」と彼は微笑を浮かべながら、つけ足した。

二人はつひぞこれまでにないやうな、強い握手を交した。アリョーシヤは、兄が自分から進んで、こつちへ一步接近して來たのは、屹度、何か魂膽があるのだと感づいた。

X

女二人が

アリョーシヤは、先刻ここへ入つた時より、更に激しく打ち碎かれ、押し拉がれたやうな氣持になつて父の家を出た。彼の理性もやはり微塵に碎けて、千々に亂れてゐるやうであつたが、同時に彼は、そのばらばらになつたのを糺ぎ合せて、けふ一日に経験したあらゆる惱ましい矛盾の中から、一つの大體の觀念を組み立てるのが空恐ろしいやうに思はれた。何か殆んど絶望そのものと境を接してゐるやうな或るものが感じられた。こんなことは、つひぞこれまでアリョーシヤの心には覺えないことであつた。

さうした一切のものうへに山のやうに聳え立つてゐるのは、あの恐ろしい女を廻つて、父と兄との間に持ちあがつてゐる事件が、どういふ結末に終るだらうか？ といふ宿命的な、解決し難い疑問であつた。今や、彼は自分自身がその目撃者であつた。自からその場に居合はして、彼は相對峙せる二人を見たのである。だが、不幸な人、本當に恐ろしく不幸な人と感じられるのは、ひとり兄ドミトリイだけであつた。彼はもはや疑ひもない、恐ろしい災厄に待ち伏せられてゐるのである。その上に、アリョーシヤがこれまで考へてゐたよりは、遙かにこの事件に關係の深い人がまだ他にもあるらしい。そればかりか、何か謎のやうなものが現はれたのである。兄のイワンは、アリョーシヤが久しく望んでゐたやうに、自分の方へ一步接近して來たけれど、彼にはなぜか、その接近の第一歩が、妙に薄氣味わるく感じられるのであつた。ところが、あの二人の女のことはどうであらう？ 奇態なことであるが、先きほどカテリーナ・イワノヴナのところを指して出かけた時、ひどく當惑を覺えたにも拘らず、今は少しもそんな氣配がなかつた。それどころか、まるでこの婦人の助言でも當てにしてゐるやうに、自分から進んで、彼女の許をさして急ぐのであつた。だが、彼女に傳言をつたへることが、明らかに先刻より一層、心ぐるしいやうに思はれた。三千留の問題がきつぱりと決定してしまつたから、兄ドミトリイはもはや自分を不正直者と決めてしまつて、絶望のあまり、どんな墮落の淵へも躊躇なく飛び込むに違ひない。それに、兄は、たつたいま突發した事件を、カテリーナ・イワノヴナに傳へてくれと言ひつけてゐる……。アリョーシヤがカテリーナ・イワノヴナの住むへ入つて行つたのはもう七時頃で、薄暮の色がかなり濃くなつてゐた。彼女は大通りに面した非常に手廣で、便利な家を一軒借りてゐた。彼女が二人の伯



母と同棲してゐることはアリョーシヤも知つてゐた。その一方の伯母といふは、姉のアガトフィヤだけの伯母に當つてゐた。これは彼女が女學院から父の家へ戻つて來た時、姉とともにいろいろ世話をしてくれた、例の無口な女であつた。もう一人の伯母は、貧しい生れでありながらおつにすまして勿體ぶつた、モスクワの貴婦人である。人の噂では、この伯母たちは二人とも萬事につけて、カテリーナ・イワノヴナの言ふがままになつて、ただ世間體のためにのみ姪に付き添つてゐるだけであつた。カテリーナ・イワノヴナが信服してゐたのは、今、病氣のためにモスクワに残つてゐる恩人の將軍夫人だけであつた。彼女はこの人に毎週二通づつ手紙を書いて、自分のことを詳しく知らせてやらなければならなかつた。

アリョーシヤが玄關へはいつて、扉を開けてくれた小間使に、自分の來訪を取り次いでくれるやうに頼んだとき、廣間の方では確かに彼の來たことをもう知つてゐるらしかつた。(事によつたら、窓からでも彼の姿を見つけたのだらう)と、急に、何かどやどやと騒々しい物音がして、誰か女の駈け出す足音や、さらさらいふ衣摺れの音などが聞こえて來た。どうやら二三人の女が駈け出したらしい氣配である。アリョーシヤは自分の來訪がどうしてこんな騒ぎを惹き起したものだらうと、奇異に感じた。しかし、彼はすぐ廣間へ通された。それは少しも田舎臭くない、優雅な家具調度で豊かに飾りつけられた大きな部屋であつた。長椅子や大小の卓子が澤山に配置され、壁には繪が懸けてあり、卓子の上には花瓶やラムプが置かれて、花卉の類も澤山あつた。そればかりか、窓際には魚を放つた硝子箱さへ据ゑてあつた。黄昏どきのことで部屋の中は幾らか薄暗かつた。つい今しがたまで人の坐つてゐたらしい長椅

子の上には、絹の婦人外套が投げ出してあり、長椅子の前の卓の上には、チョコレートを飲み餘した茶碗が二つと、ビスケットや、青い乾葡萄のはいつた硝子皿、それから菓子も盛りつたもう一つの皿が、そのままになつてゐる。どうも誰かを饗應してゐたらしい。アリョーシヤは來客の中へ飛びこんで來たなと、氣がついて思はず眉を擧げた。しかしその瞬間に帷りが上がつて、カテリーナ・イワノヴナが歡ばしさうに微笑を浮かべて、兩手をアリョーシヤの方へ差し出したながら、せかせかした急ぎ足ではいつて來た。それと同時に、女中が火をともし蠟燭を二本持つて來て、卓の上においた。

「まあ、よかつたこと、たうとうあなたもいらして下さいましたわね！ わたしけふ一日ぢゆう、あなたのことばかり神様にお祈りしてゐましたの！ さ、お掛けになつて下さいまし。」

カテリーナ・イワノヴナの美貌には、この前に會つた時も、アリョーシヤは激しく心を打たれたのであつた。それは三週間ばかり前のことで、兄のドミトリーが、彼女の切なる望みによつて、初めて弟を連れて行つて紹介した時のことである。しかしその時の會見では、二人の間に、どうも巧く話がつづかなかつた。カテリーナ・イワノヴナは、彼がひどく狼狽してゐる様子を察して、彼に不便びんをかける氣持から、その時は始めから終ひまでドミトリー・フォードロキツチにばかり話しかけたのであつた。アリョーシヤはじつと黙りこんでゐたが、いろいろのことをはつきりと、よく見分けることができた。彼はその時、思ひ上がった娘の氣位の高さと、遠慮のない打ち解けた態度と、自信の強さに驚嘆したのであつた。それは少しも疑ひのないことで、アリョーシヤは決して自分が大袈裟な見方をしてるのでないと思つた。彼は、その大きな黒い熱情的な眼の美しいこと、殊にそれが彼女の蒼白い、といふより寧



ろ薄黄いろい面長な顔によく似合つてゐることを發見した。しかし、その眼の中と、美しい唇の輪廓とには、如何にも自分の兄が夢中になつて打ち込みさうな、それでゐて、長くは愛しつづけられなさうな或るものが感じられた。この訪問の後で、ドミトリーが自分の許嫁を見てどんな印象を受けたか、腹臍なく言つてくれと、しつこく彼に訊ねた時、アリョーシヤはこの感想を殆んどむきつけに言つてしまつた。

「兄さんはあの女と結婚すれば、幸福になるでせうけれど……しかし、平和な幸福ではないかも知れませんよ。」

「その通りなんだよ、弟、ああいふ女はいつまで経つてもあのとほりなんだよ、ああいふ風な女は、決して運を天にまかせるといふことがないのさ、ぢやあ、お前は、おれがとても永久にあの女を愛しきれまいと思ふんだな？」

「さうぢやありません、多分、兄さんは永久に愛するでせう、けれど、あの人と一緒になつても、始終は幸福でゐられないかも知れませんよ……」

アリョーシヤはその時こんな意見を述べながら、眞赤になつた。そしてつい兄の頼みにつり込まれて、こんな『馬鹿げた』意見を述べたのを、自分ながら忌々しく思つた。何故ならば、それを口外すると同時に、自分の意見がわれながら恐ろしく馬鹿げたものに思はれたからである。それに自分などが偉さうに、婦人についての意見を述べ立てたことを恥かしくも思つた。さういふことがあつただけに、いま自分の方へ駈け出して來たカテリーナ・イワーノヴナを一目見た時には、もしかしたら、あの時の考へは

まるで間違つてゐたかも知れないと思つたほど、彼の驚きは尙さら大きかつたのである。今の彼女の顔には、偽りならぬ率直な善良さと、一本氣な熱しやすい眞心とが輝いてゐた。前にあれほどアリョーシヤを驚ろかした『誇りと驕慢』が、今はただ勇敢で高潔な精力と、何か明朗な力強い自信となつて現はれてゐるのであつた。アリョーシヤは彼女を一目見るなり、一言その聲を聞くなり、彼女の愛する男との間の悲劇的關係が、彼女にとつて少しも秘密でないばかりか、彼女はもう一切のことを、何から何まで知り抜いてゐるのだらうと直感した。とはいへ、それにも拘らず、彼女の顔には未來に對する信仰と光明が満ち溢れてゐた。アリョーシヤは急に、自分が彼女に對して重大な故意の罪を犯してゐるやうな氣がし始めた。彼は忽ちにして征服せられ、牽きつけられてしまつたのである。それは兎も角、最初の言葉を聞いただけで、彼女が何かしら烈しい昂奮、恐らく彼女としては非常に法外な、殆んど有頂天に近い昂奮状態にあることを見てとつたのである。

「わたしがこんなにあなたをお待ちしてゐましたのはね、今ほんたうのことが伺へるのは、ただあなたお一人きりだからですの、ほかには誰もそんな方はありませんもの！」

「僕が参りましたのは……」と、アリョーシヤは狼狽しながら、口ごもつた。「僕は……兄の使ひで参つたのです……」

「兄さんがおよこしなすつたんですつて、まあ、わたしもさうだらうと思ひましたわ、今はわたし、もう何でも知つてますのよ、何もかも！」と、カテリーナ・イワーノヴナは急に眼を輝かしながら叫んだ。「ちよつとお待ちになつてね、アレクセイ・フォードロキツチ、わたし、どういふ譯で、そんなに



あなたをお待ちしてゐたかつてことを、豫めお話しして置きますわ、もしかすると、わたしの方があなたなどよりずつとずつと澤山、いろんなことを知つてゐるかも知れませんわ。わたしがあなたからお伺ひしたのは事實の報告ではございませんの。わたしの知りたいと思ひますのは、あなた御自身が最近あの人からお受けになつた印象なんですか。どうか、それをありのままに、飾りつ氣なしに、話してお聞かせ下さいませんか。無躰けなお話だつて構ひません。(ええ、ええ、どんなに無躰けなことだつて結構でございますとも!)一體あなたは、今のあの人をどんな風に御覽になつてゐますの?そして、けふあなたがお會ひになつてから後の、あの人をどんな風でございまして?これは屹度、わたしが自分であの人と話し合ふよりか、いいに違ひないと思ひますわ。だつてあの方はもう、わたしのところへは來ないつもりでゐるんですもの、ね、わたしがあなたにどんなことを望んでゐるか、これでお分かりになつたでせう? さあ今度は、あの方が何の用でああなたを使ひによこしなすつたのか(わたし屹度あなたをお使ひによこしなさるだらうと思つてましたわ!)——どうぞ、ありのままに、一ばん肝腎なところを聴かせて下さいませ!……」

「兄はあなたに……よろしく申し上げてくれ、そしてもう二度とこちらへ足踏みをしませぬつて……で、あなたによろしく申し上げてくれつて言ひました。」

「よろしくつて! あの方がさう言つたんですね、その通りの言ひ廻しで?」

「もしかしたら、ひよいと何の氣なしにそんなことを言つたのかも知れませんがね、間違つて、言は

なければならぬ言葉でなしに、ひよんなことが口から出たのかも知れませんか?」

「いえ、兄はこの『よろしく』といふ言葉を、是非お傳へしてくれつて言ひつけたのです、忘れないうやうにお傳へしてくれつて、三度も念を押したのです。」

カテリーナ・イワーノヴナは赫つと赧くなつた。

「アレクセイ・フォードロキッチ、どうぞわたしを助けて下さい。今こそ、ほんとにあなたのお力添へが必要なのです。わたし、自分の思つてゐることを申してみますから、あなたはそれに就いて、わたしの考へが正しいかどうか、それだけを仰しやつて下さいませんか、ね、ようござんすか。もしあの方が何氣なしに、よろしく言つてくれつて、あなたに言ひつけたのであれば、——つまり特別この言葉に力を入れて、この言葉をぜひ傳へるやうに念を押さなかつたとしますと、もうそれでおしまひなんです……何もかもがおしまひなんです! ……けれど、あの方が特別この言葉に力を入れて、殊更その『よろしく』を忘れないで、わたしに傳へるやうに念を押したのであれば、屹度あの方は昂奮していらしたといふことになりますわ。若しかしたら、前後を忘却していらしたのかも知れませんがね。屹度、決心はしながらも、自分で自分の決心を恐れていらつしやるのです! しつかりした確かな足どりであつたら離れて行つたのではなくつて、急な坂を駆け下りたのです。その言葉に力を入れたのは、ただの空威張りだつたといふことにはならないでせうか……」

「さうですよ、さうですよ!」とアリオシーシャは熱心に相槌を打つた。「僕自身にも今はさう思はれるのです。」



「で、もしさうなでしたら、あの人はまだ亡びてはゐません！ただ絶望してゐるだけですから、わたしはあの人を救ふことが出来ます。ね、それはさうと、あの人は何かお金のことを、三千留のお金をあなたにお話ししませんでして？」

「話したところぢやありませんよ、屹度そのことを一番ひどく兄は苦に病んでゐるのです。兄はもうかうなつては、名譽も何も失つてしまつたのだから、どちらにしたつて同じことだと言つてゐました。」と、アリョーシャは躍氣になつて叫んだ。そして彼は、自分の心に一縷の望みが湧きあがつて來るのを覺えて、ほんとに兄のために救ひの途が開けたのかも知れないといふやうな氣がした。「だつて、あなたは一體……あの金のことを御存じなんですか？」と言ひ足したが、急に言葉を打ち切つた。

「ずつと前から知つてますわ、はつきり知つてますわ。モスクワへ電報で問ひ合せて、あの金の届いてゐないつてことは、遠の昔に知つてゐますわ。あの人はお金なんか送らなかつたのです、けれどわたしは黙つてゐましたの。あの人に、お金の要つたこと、そして今でも要るつてことは、先週わたし聞きましたの……それについて、わたし、たつた一つ目當てにしてゐることがあります、それは、あの人が、結局自分は誰の手へ歸つたらいいか、また誰が自分に一番忠實な親友かといふことを、悟つてくれるやうに仕向けることでございます。ところがあの人は、わたしがその一番に忠實な友達だつてことを、信じてくれなさいです。わたしといふものを見抜かうとはしないで、ただ女としてわたしを眺めてゐるのです。わたしは、あの三千留の使ひ込みを、あの人に恥だなどと思はせないやうにするには、どうしたらいいだらうか？と、そのことばかり思つて、この一週間のあひだ、ほんとに心配で心配で

堪りませんでしたわ。それだね、他人に對してや、自分自身に對して恥ぢるのは仕方がありませんけれど、わたしに對して恥ぢることだけはまゝたくありませんの。だつて、あの人も神様にはちつとも恥ぢないで、何もかも打ち明けてゐるぢやありませんか。それなのに、わたしがあの人のためになら、どんな辛抱だつてするつてことを、どうして今まで知つてくれなさいのでせう？どうして、どうして、あの人にはわたしの本心が分からないのでせう？あんなことまであつた後なのに、どうしてわたしの心を知らずにゐられるんでせうね？わたしはどこまでもあの人を助けたいと思ひます、わたしがあの人を許嫁だつてことを忘れてしまつたつて構ひません！それなのに、あの人は、わたしに對する身の潔白なんかを心配してゐるんですもの！だつて、あの人は、ねえ、アレクセイ・フォードロキッチ、あなたには何も恐れないで打ち明けたのぢやありませんか、どうして、わたしには、今になつてもそれだけのことがして貰へないんでせうねえ？」

彼女は涙ながらこの終りの言葉を言つた。涙は止めどなくその眼からはふり落ちるのであつた。「僕はあなたに、たつた今、兄と父との間に起こつた出來事を、お話ししなければなりません。」とアリョーシャの方も、やはり聲を慄はせながら言つた。そして彼は先刻の騒動を残らず物語つた。金の無心にやられたこと、そこへ兄が飛びこんで來て父を殴つたこと、その後で兄が特別にもう一度『よろしく』といふ言つてに念を押したことなどを物語つたのである……「兄さんはそれからあの女のところへ行きました……」と彼は低い聲でつけ足した。

「まあ、あなたはわたしがあなたの女を大目に見て行けないでも思つてらつしやるの？あの人もやは



り、さう思つてるのでせうか？ けれど、兄さんはあの女と結婚なんかしませんよ。」不意に彼女は神經的に笑ひ出した。「だつて、カラマゾフが、いつまでもあんな情慾に燃えることができるものですか！ ええ、あれは情慾といふもので、決して愛ぢやありません、兄さんは決して結婚なんかしませんよ、だつてあの女がお嫁になりませんもの……。」と、突然またカテリーナ・イワーノヴナは奇妙な薄笑ひを洩らした。

「でも、兄は結婚するかも知れませんよ。」アリョーシャは眼を伏せたまま、悲しげな調子で言つた。

「いいえ結婚なんかしませんつたら！ あの娘さんはほんとに天使のやうな女ですよ、あなたはそれを御存じですか？ あなたそれを御存じですか？」と、不意にカテリーナ・イワーノヴナは異常に熱くなつて叫んだ。「あの娘さんは、ほんとに氣紛れな中にも、とりわけ氣紛れな女ですよ、わたしあの女がずるぶん誘惑的な人だつてことも知つてゐますが、またあの人がほんとに親切で、しつかりしてゐて、しかも高尚な娘さんだといふことも知つてゐますわ。どうしてあなたそんな眼をして、あたしを御覽になるの？ 多分わたしの申しあげることには吃驚なすつたのでせう、多分このわたしの言葉を本當になさらないのでせう？ アグラフェーナ・アレクサンドロヴナ！」と、突然、彼女は次ぎの部屋の方を向いて、誰かに呼びかけた。「こちらへいらつしやいな、ここにいらつしやるのは、お友だちのアリョーシャなのよ、もうわたしたちのことはすつかり知つてらつしやるんですから、さあこちらへ出て来て、御挨拶をなさいな！」

「あたしカーテンの蔭で、あなたが呼んで下さるのを、今か今かと待つてましたのよ。」といふ、すこ

し甘つたるいくらの優しい女の聲が聞こえた。

と、帷りがあがつて……他ならぬ當のグルーシエンカが、嫣然と笑ひこぼれながら、卓へ近づいて来た。アリョーシャは身内がぎくんと慄へたやうに覺えた。彼の視線は女の方にびつたり吸ひつけられたまま、引き離すことができなかった。これがあの怖ろしい女なのだ、兄イワンが半時間まへに『獸』だと口を迂らせた、あの女なのだ。しかも、今、彼の面前に立つてゐるのは、一見、至極ありふれた、單純な一人の女——善良さうな愛くるしい女で、たとへ美人であるにしても、世間一般の美しい女に似たり寄つたりの『ありふれた』美人なのだ！ 確かにこの女は美しいには違ひない、非常にと言つてもいいほどの美人である——つまり、夢中になつて男から愛されるやうな露西亞的な美貌の持ち主なのである。彼女は相當、脊が高い方であつたが、カテリーナ・イワーノヴナよりは少し低かつた（カテリーナ・イワーノヴナは圖抜けて脊の高い方であつた）肉づきはよくて、動作がしなやかで靜かで、その聲のやうに甘つたるすぎる程なよなよしてゐた。彼女はカテリーナ・イワーノヴナのやうな、力強い、大膽な足どりとは反對に、しづしづと近づいて来た。その足が床に觸れてもまるで音を立てなかつた。彼女は見事な黒絹の衣裳をさらさらと鳴らしながら、そつと肘椅子へ腰をおろすと、高價な黒い毛織のシヨールで、乳のやうに白いむつちりした頸と幅の廣い肩を嬌やかにくるんだ。彼女は二十二であつたが、その顔はまさしくその年頃に相應してゐた。色が抜けるほど白く、頬には上品な薄薔薇いろの紅潮がほんのりとさしてゐた。顔の輪廓は、どちらかと言へば廣い方で、下頰は心持そり加減なほどである。上唇は

\* グルーシエンカの正確な呼び方。



薄かつたが、少し前へ突き出た下唇は二倍も厚くて、脹れつぽかつた。しかし、實に素晴らしい、房々した暗色の髪と、黒貂のやうに黒い眉と、睫の長い灰色がかつた空色の美しい眼とは、どんなに雑沓した人なかを散歩してゐる氣のないぼんやりした男でも、その顔を見ては、思はず立ちどまつて、長くその印象を心に曇み込まずにはゐられないであらう。この顔の中で一ばん強くアリョーシャの心を打つたのは、その子供らしく天真爛漫な表情であつた。彼女は子供のやうな眼つきをして、何かしら子供のやうに悦んでゐる様子であつた。實際、彼女はさも嬉しさうに卓へ近づいたが、その様子は丁度、今にも何か嬉しいことがあるだらうと信じきつて、子供のやうな好奇心を抱きながら、じりじりして待ち受けるといふやうな風であつた。彼女の眼眸には人の心を浮き立たせるやうなところがあつた——アリョーシャはそれを感得した。なほその上、彼にはとても理解することができなかつたけれど、恐らく無意識の中にはそれとなく感じてゐたに違ひない或るものがあつた。それは女の肉體の動作が柔かくしなやかで、猫のやうに静かなことであつた。その癖、彼女は力に充ち溢れた體軀を持つてゐた。シヨールのかけには幅の廣いむちりした肩や、はちきれさうに盛り上がった、處女のそれのやうな乳房が感じられた。ことによつたら、この體は後日ミロのヴィーナスの形を想はせるかも知れない。尤も、それはその誇張された釣合の中にも感ぜられる。露西亞女性美の鑑識家はグルーシエンカを見て、かやうな的確な豫想を發表することができらうであらう。つまり、この潑刺たる青春の美も、三十といふ年配になれば、その調和は失はれ、そろそろ下り坂になつて、顔の皮膚はたるみ、眼のまはりや額には逸はやく小皺がよつて、瑞々しさのない赭ら顔になつてしまふのであらう、——結局、それは、露西亞人に特有な稻妻

のやうにはかない東の間のものだといふのである。もとより、アリョーシャはそんなことを考へてゐた譯ではなかつた。彼は殆んど、うつとりとさせられてゐたくらみであるが、しかも心のなかでは、この女はどうしてあんなに言葉を引き伸ばしたりして、自然な物の言ひ方ができないのだらうと、妙に不愉快な感じを覺えながら、何とはなしに、残念なやうな氣持で、自分で自分に問ひかけて見るのであつた。彼女がそんなことをするのは、明らかに、さういふ工合に、言葉や音聲を引き伸ばして、いやに甘つたるい調子をつけるのを、美しい話術だと心得ての仕草であつた。勿論、それは、ただ悪い習慣であつて、彼女の育ちの卑しいことと、幼い頃から浸みこんでゐる禮儀作法に對する俗惡な觀念を立證するだけのことであつた。それにしても、アリョーシャにはその俗な發聲と語調の抑揚とは、子供らしく天真爛漫な嬉しさうな顔の表情や、おだやかな、まるで嬰兒に見られるやうな幸福さうな眼の輝やきに對稱して、殆んどあり得べからざる不合理なものやうに感ぜられた。カテリーナ・イワーノヴナは直ぐさま彼女をアリョーシャと向き合つてゐる安樂椅子にかけさせて、その笑みを含んだ唇を、幾たびも、夢中になつて接吻するのであつた。

「アレクセイ・フォードロキッチ、わたしたちは初めて會つたんですよ、」と彼女は有頂天になつて言つた。「わたし、この方に會つて、この方が知りたかつたものですから、こちらから出向かうかと思つたんですけど、ちよつとお頼みしてみたら、この方の方から、こちらへ來て下すつたんですよ。わたし、この方と御一しよだつたら、どんなことでも、すつかり、何もかもすつかり解決がつくだらうと思ひましたの。そんな風に蟲が知らせたんですよ……。わたしがこのことを決心しました時、



家の者はそんなことをしないやうにつて、懇々と止めましたの、ですけれど、わたしは、ちやんと結果を豫想してゐたのです。そして、やつぱり間違ひではございませんでしたわ。グルーシエンカはわたしに何もかも打ち明け、御自分の考へも残らず聞かせて下さつたんですよ、この方は、まるで天使のやうに、ここへ飛んで来て、平和と悦びを持つて来て下さつたんですよ……」

「あたしのやうな者でも、あなたはおさげすみになりませんでした。ほんとお優しい、立派なお嬢様でいらつしやいますわ。」グルーシエンカは、やはり例の愛嬌のある、嬉しさうな笑みをたたへながら、歌でもうたふやうに言葉を引つぱつた。

「まあ、飛んでもない、そんなことを仰しやるなんて、魅力のある、魔法使ひのやうな方の癖に！

あなたのやうな方をさげすむなんて！ さあ、もう一度わたし、あなたの下唇を接吻しますわ、あなたの下唇は脹れたやうになつてますけど、もつともつと脹れあがるほど接吻してあげてよ。そうら、もう一度……もう一度……ほらね、アレクセイ・フォードロキツチさん、この笑ひ顔をこらんなさいな、ほんとにこんな天使のやうな顔を見てゐると、心が晴れ晴れして來ますわね……」アリョーシヤは顔を赧らめて、眼に見えぬくらゐ微かに身慄ひをしてゐた。

「まあ、あなたはこんなに可愛がつて下さいますけど、ひよつとしたら、あたし、まるつきりこんなにしていただく値うちなんかない女かも知れませんわ。」

「値うちがないですつて？ この方にそれだけの値うちがないですつてさ！」とカテリーナ・イワーノヴナはまたしても、同じやうに熱した聲で叫んだ、「ねえ、アレクセイ・フォードロキツチ、この方

はすゐぶん氣まぐれで、我儘ですけれど、その代り、とてもプライドの高い御氣性よ！ この人は高尙で、寛大な方ですよ、アレクセイ・フォードロキツチさん。ただね、不合せだつただけなの、この方はつまらない、ほんとに輕薄な男のために、何もかも犠牲にしてしまはうつてもりに、あんまり早くなり過ぎたのです。一人の男の方がありましたの、やつぱり士官でしたけど、この方はその人を愛して、一切のものをそれはもう、ずつと前、五年ばかりも前のことですよ、ところが、その男はすつかりこの方のことを忘れて、結婚してしまひましたの、今では鰥かまになつて、今度、こちらへ來るといふ手紙をよこしたのですつて、——ところがね、どうでせう、この方は今でもその男を、ただその男ひとりひとを愛してゐるのです。これまで、ずつと愛し通して來たんですよ、そして永久に！ それで、その男がこちらへ來れば、グルーシエンカはまた幸福になれるんですよ。でも、この五年間といふもの、この方はすゐぶん慘めだつたんですよね。だけど、誰がこの方を咎められませう？ 誰がこの方の愛情を鼻にかけられませう？ あの足腰の立たないお爺さんの商人ひとりきりぢやありませんか。それもどちらかといへば、この方のお父さんとか、お友達とか、いつそ保護者といつた方が穩當なんですよ。このお爺さんは、ちやうどこの方が、可愛い男に棄てられて、身も世もあらず嘆き悲しんでゐるところへめぐりあはしたんですよ、……全く、この人はそのとき、身投げしようと思ひつめてゐたんですよ、だから、あの爺さんはこの人の命を救つたんですよ、命を！」

「お嬢さま、あなたは随分あたしを庇つて下さいますわね、でも、何かにつけて、あんまり氣がお早すぎますわ。」とまた、グルーシエンカは言葉を引つぱるやうに言つた。



「庇ふですつて？ まあ、あなたを庇ふなんてことができるものでせうか、そんな大それたことが？ グルーシエンカ、天使さん、あなたのお手を貸して下さいな、ねえ、アレクセイ・フォードロキッチ、まあその、ふつくらした小さな美しい手を御覽なさいよ、これはわたしに幸福を持つて来て、わたしを甦らせてくれた手なんです。さあ、わたし今、この手を接吻しますわよ、外側も内側もね、ほうらね、もう一度！ もう一度！」そして彼女は有頂天になつたやうにグルーシエンカの、まことに美しい、少しふつくり過ぎるくらゐな手を、三度までも接吻した。相手はその手を差し出したまま、神経的で、ひびきの高い、美しい笑ひ聲を立てながら、この『お嬢さま』のすることをじつと見まもつてゐたが、どうやら、彼女はそんな風に自分の手を接吻されるのが氣持よささうであつた。『すこし有頂天が過ぎるやうだ』といふ考へが、ちらりとアリオ・シヤの頭をかすめた。彼は急に顔を赧くした。その間ぢゆう彼の心は妙に落ちつかなかつた。

「お嬢さま、アレクセイ・フォードロキッチさんのいらつしやる前で、そんな風に接吻なんかして、あたしを恥づかしがらせないで下さいな。」

「まあ、わたしがこんなことをしたからつて、あなたに恥を掻かせるつもりだと思ひになつて？」カテリーナ・イワーノヴナは少し驚ろいたやうにかう言つた、「あなたはちつとも、わたしの氣持をお分かりになつて下さらないんですもの！」

「でも、あなただつて、やつぱりあたしの氣持が、本當にはお分かりになつてゐないらうございませぬ、お嬢さま、あたしは、あなたの眸に映つてゐるよりか、ずつと悪い女かも知れませぬものね、あた

しは吐のわるい我儘な女ですからね、あの可哀さうなドミトリイ・フォードロキッチだつて、ただからかひ半分にもよつとあの時、迷はして見ただけなのよ。」

「でも、そのあなたが今では、あの人を救はうとしてらつしやるんぢやありませんか、あなたはさうお約束なすつたでせう——あなたがもうずつと前から、他の人を愛していらして、その人が現にあなたと結婚することになつてゐるつてことを、あの人に打ち明けて、眼をさましてお上げになるつて……」

「まあ、違ひますつてば。あたし、そんなお約束なんかした覚えはありませんわ、それはあなたが御自分で勝手にお話しになつただけなんです、あたしお約束なんかしませんでしたわ。」

「それぢや、わたし、勘違ひをしてゐたんですわね。」と、カテリーナ・イワーノヴナはちよつと顔色を變へて、聲低くかう言つた、「でも、あなたはお約束なすつたのに……」

「違ひますのよ、お嬢さま、あたし、なんにもお約束なんかしませんわ。」と、やはり嬉しさうな無邪氣な表情をしたまま、靜かにすらすらとグルーシエンカが遮つた、「そうらね、これでお分かりになつたでせう、お嬢さま。あたし、あなたに比べたら、こんなに恥知らずな、氣儘な女なんですからね、あたし、かうしようと思ふと、すぐその通りにしてしまふ性分なんです。さつきはほんとに何かお約束をしたかも知れませんが、今また、よく考へて見ますと、急にまた、あの人が好きになるかも知れませんわ、あのミーチャが、——前にだつて、あの人が好きになつたことがありますのよ、まる一時間ぐらゐ氣に入つたことがありますわ。だから、これから歸つて行つて、今日から家に落ち着いてしまひなさいつて、あの人に言はないとも限りませぬわ……ね、あたしこんなに氣の變り易い女ですの……」



「さつきおつしやつたことは……何だかまるきり違つてゐましたわ、……」カテリーナ・イワーノヴナはやつとこれだけのことを呟やいた。

「ええ、さつきはね！ あたし氣の弱い馬鹿な女ですから、あの人がこのあたしのために、どんな苦勞をしたかと考へて見ただけでもね！ほんとに家へ歸つてから、急にあの人が氣の毒にでもなつたら——その時どうしようかしら？」

「わたし、ほんとに思ひもかけませんでしたわ……」

「まあ、ほんとにお嬢さまは、あたしなんかと比べると、何てお優しくて、氣高いお方でせうね！多分もう、かういふ氣性がお分かりになつては、あたしのやうな馬鹿女には愛憎をおつかしになつたでせうね。お嬢さま、どうぞその可愛らしいお手をお貸し下さいまし。」彼女はしとやかにかう言つて、恭しげにカテリーナ・イワーノヴナの手を取つた。「ねえ、お嬢さま、あたしかうしてあなたのお手を取つて、先刻あたしにして下すつたと同んなじやうに接吻しますわ、あなたはあたしに三度接吻して下さいましたけれど、あたしなら三百遍も接吻しなければ勘定が済みませんわ。さあ、それだけはしなくちやありませんわ、それ以上は神さまの思召しにもあることで、事と次第によつては、あたし、すつかりあなたの奴隷になつて、何でもお氣に召すとほりにするかも知れませんが、相談や約束なんかしないで、神さまがお決めになつた通りにいたしませうね。まあ、このお手、何て可愛いお手でせう！ほんとにお可愛い、おきれいな、とてもたまらないやうなお嬢さま！」

彼女は接吻の『勘定を済ます』といふ變な目的で、その手をそつと自分の唇へ持つて行つた。カテリ

ーナ・イワーノヴナは決してその手を引つこめはしなかつた。彼女はおづおづした希望をいだきながら、あの奇妙な言ひ廻しではあるが、『奴隷のやうに』望みのままになるといふ、グルーシエンカの、最後の約束に耳を傾けたのであつた。彼女は一心に相手の眼を見つめてゐた。その眼の中には相も變らず、信じ易さうな、單純な表情と、朗らかな喜びの色がうかがはれた……。『この女はあまりに無邪氣すぎるのかも知れない』といふ希望がカテリーナ・イワーノヴナの心をかすめた。その間にグルーシエンカは『可愛いお手』に恍惚となつてゐるやうな様子で、そろそろとそれを唇の方へ持つて行つた。しかも、唇のすぐ傍まで持つて行くと、不意に何か思案でもするやうに、二三秒の間、その手をそのまま支へてゐた。

「ねえ、お嬢様、」と不意に彼女は、恐ろしく物柔かな甘つたるい聲をひつばるやうに言つた。「ねえ、あたし、折角あなたのお手を戴きましたけれど、接吻はやめにしようと思ひますわ。」かう言つて、彼女は、さも可笑しさうに笑ひ出した。

「御隨意に……一體あなた、どうなすつて？」とカテリーナ・イワーノヴナは不意にぶるつと身慄ひをした。

「ぢやね、よく覚えておいて下さいな、あなたはあたしの手に接吻をさいましたけれど、あたしはしなかつたつてことをね。」ふつと、彼女の眼の中で何やらきらりと光つたものがあつた。彼女は怖ろしく執拗にカテリーナ・イワーノヴナの顔を見つめた。

「失禮な！」と、不意に何か合點が行つたらしく、カテリーナ・イワーノヴナはかう口走ると、かつ



となつて席を跳び上がった。グルーシエンカもゆつくりと立ち上がった。

「それでは、あたしミリーチャにも早速話してやりますわ、——あなたはあたしの手を接吻なさいましたけれど、あたしの方は眞似もしなかつたつて、さぞあの人が大笑ひすることですわよ！」

「穢らしい、出ておいで！」

「まあ、恥づかしげもなく、お嬢さま、何て恥づかしいことですわ、あなたのお身分でそんなはしたない口をおききになるなんて。」

「出てお行き、賣女！」とカテリーナ・イワノヴナはわめき立てた。すつかり歪んでしまつた彼女の顔の筋といふ筋が慄へてゐた。

「賣女なら賣女でもいいわよ、あなただつて生娘のくせに、お金欲しさに夕方になると色男のところへいらつしやつたぢやありませんか、その器量を賣りにいらつしやつたぢやありませんか、ちやんと知つてますよ。」

カテリーナ・イワノヴナは一聲たかく叫ぶと、相手に飛びかかつて行かうとしたが、アリオイシャが一生懸命にそれを抱き止めた。

「一歩も出ちやいけません！一言も仰しやつてはいけません！何も相手になさいますな、この人はすぐに歸りますよ、今すぐ歸つて行きますよ！」

この瞬間、カテリーナ・イワノヴナの二人の伯母と、それにつづいて小間使が、叫び聲を聞きつけて、部屋へ駆け込んで来た。皆は彼女の方へ駆け寄つた。

「ぢや、歸りますわ、」グルーシエンカは長椅子から外套を取りながら、かう言つた、「アリオイシャ、あたしを宅まで送つて頂戴な！」

「歸つて下さい、直ぐに歸つて下さい、お願いです！」アリオイシャは哀願するやうに両手を合はせた。

「可愛いアリオイシエンカ、送つてつて頂戴よ！あたし、途々あなたにとてもいいお話を一つ聴かして上げるわ！今のはね、あたし、あなたのために、わざと一芝居うつて見せたのよ、送つてつて頂戴な、あとで、ああよかつたと思ふにきまつてるのだから。」

アリオイシャは兩の手を揉みあはせながら、くるりと横を向いた。グルーシエンカは聲を立てて笑ひながら、その家を飛び出してしまつた。

カテリーナ・イワノヴナはヒステリーの發作に襲はれた。彼女はしやくり上げて泣きながら、時をり、痙攣のために息をつまらせた。一同は彼女を取りまいて、さわぎ立てた。

「だから、わたしが言はないことぢやないのよ。」と年上の方の伯母が言つた、「そんなむやみなことはしないやうにと、あれほど止めたんだのに、……あなたが餘り向かふ見ずなものだから……、ほんとに何といふことをするんでせうね！あなたは、ああいふ女たちのことを何にも知らないけれど、世間ではあれは人間の屑だつて言つてますよ、あんまりあなたは我儘が過ぎるんですよ！」

「あれは虎だわ！」とカテリーナ・イワノヴナが聲を振り絞つて叫んだ、「なぜあなたはわたしを引き止めたんです？アレクセイ・フォードロキッチ、わたしあの女を思ふさまひつばたいてやつたのに、



「ひつばたいてー！」

彼女はアリョーシャの前で、自分を抑へつけることができなかつた。或ひは抑制しようとしなかつたのかも知れない。

「あんな奴は答でひつばたいてやつても飽き足りないわ、處刑臺へのせて、首切り役をつかつて、大ぜいの前で……！」

アリョーシャは扉の方へ後ずさりした。

「だけど、まあ！」と突然、彼女は手を拍つて叫んだ、「あの人が！ほんとにあの人がそれほど恥知らずな、不人情な人間になりさがつたものだらうか！だつて、あの人は、あの怖ろしい、永久に呪つても呪ひ足りない、あの日の出来事を話して聞かせたんだもの！『お嬢さま、あなただつてその器量を賣りにいらしたぢやありませんか』だつて！あの女は知つてるんだわ！アレクセイ・フォードロキッチ、あなたの兄さんは悪黨ですよ！」

アリョーシャは何か言ひたかつたが、言ふべき言葉が見いだせなかつた。彼の胸は痛いほど締めつけられた。

「歸つて下さい、アレクセイ・フォードロキッチ！わたしは恥づかしい、わたしは怖ろしい！あす……後生ですから、いらして頂戴ね、どうぞわたしを悪く思はないでね、許して頂戴、わたしはまだ、自分で自分をどうしていいのかわからないのですから！」

アリョーシャはよろめくやうにしながら往來へ出た。彼女と同じやうに彼も泣き出したくなつた。と、

不意に後ろから女中が追ひかけて來た。

「お嬢さまがこれをお渡しするのをお忘れになりましたの、ホフラーコワさまからおことづけの手紙でございますの、もうお晝御飯の時からおあづかりしてありましたので。」

アリョーシャは薔薇いろの小さい封筒を機械的に受け取ると、殆んど無意識にポケットへ押し込んだ。

XI

更に一つの亡びたる名譽

町から修道院までは一露里とほんの少ししかなかつた。この時刻では人通りも杜絶えた道を、アリョーシャは急ぎ足に歩いて行つた。もう殆んど夜になつて、三十歩前方の物のあや目も分からなかつた。ちやうど道の中ほどに四つ辻があつて、その四つ辻の一もと柳の下に何か人影らしいものがちらついた。アリョーシャが四つ辻へかかると同時に、その人影がふつとその場を離れて、彼の方へ飛びかかつて來た。そして猛々しい聲でわめいた、「財布か、命が！」

「あ、あなたはミーチャ兄さんですね！」ひどく慄へ上がったアリョーシャは驚ろいてかう言つた。

「は、は、は！思ひがけなかつたかい？おれはどこでお前を待つてみようかと考へて見たんだよ、



あの女の家の傍にしようかな？ いや、あそこからは、道が三つに分かれてゐるから、若しかするとお前を見通すかも知れない、そこで、結局、ここで待ち受けることに決めただよ。だつて、どうせ修道院へ行くのにはもう他に道はないから、お前は屹度ここを通るだらうと思つてさ。さあ、ほんとのこと打ちまけてくれ、おれを油虫みたいに擲き潰してくれ……それはさうと、お前はどうかしたのかい？」

「何でもありませんよ、兄さん……僕ちよつとびつくりしただけです、ああ、だれどドミトリイ兄さん！ さつきお父さんの血を流したばかりなのに（さういつて、アリオーシヤは泣き出した。もうずつと前から泣き出しさうになつてゐたのであるが、今急に心の中で何かぶつりと千切れたやうな気がしたのである。）兄さんは危くお父さんを殺すやうな目に會はして……呪ひの言葉まで吐いて來たくせに……もう今は……こんなところで……冗談なんかいふんですか……『財布か命か！』なんて！」

「それがどうしたといふんだい？ いけないつていふのかい？ おれの分際に不釣合ひだといふのか？」

「いいえ、さうぢやないけど……僕はその……」

「まあ、よせ、この夜の景色を見るよ、何といふ暗い晩だらう！ 雲はどうだい、それに何といふ風だ！ おれはこの柳の下に隠れて、お前を待つてゐるうちに、ふいと考へたんだよ（正真正銘の話だよ！）、この期に及んで、おれは何をくよくよして、何をいつたい待つてゐるんだ？ ここに柳の木はあるし、ハンカチもあれば襦袢もあるから、おれは繩をすぐに縛ふことができる、おまけにズボン吊りがあるぞ——何もこのうへ、世の中の荷厄介になつて、この卑劣な體で大地の神聖をけがしてゐること

はない！ つてな、すると、そこへお前の蹠音が聞こえて來たのさ、——有難いことに！ 何かが急に、おれの上へ飛んで來たやうな気がしたのだ。さうだ、まだおれの愛してゐる人間があるぢやないか、それから、あれがさうなんだ、あの人間だ、あれこそ世界中でおれの一番好きな、たつた一人の可愛い弟ぢやないか！ さう思ふと、おれはその瞬間に、お前が可愛くて可愛くてたまらなくなつたのだ。ええつ、あれの首つ玉へ嚙りついてやれ、と考へたんだよ。ところが、又ひよいと馬鹿な考へがうかんで、『ひとつ、あれの心の浮き立つやうに、脅かしてやらう、』と思つたのさ。それで、『財布か命か！』なんて、氣違ひみたいに呟鳴つたんだよ、馬鹿な眞似をして濟まなかつたよ、——あれはほんの冗談で、胸の中は……やはり正氣なんだよ……ええ、そんなことは、まあどうだつていいや、だが、あすこでどんなことが起つたのか聞かしてくれ、あの女は何といつた？ さあ、おれを押し潰してくれ、ぶん擲つてくれ、情け容赦は要らんど！ あれは躍起になつて怒つたらうな？」

「いいえ、そんなことはありません……まるで違ひますよ、ミーチャ、あすこで……僕たつた今、二人に會ひましたよ。」

「二人につて、それや誰と誰だ？」

「グルーシエンカがカテリーナ・イワーフヴァナのそこへ行つてゐたのですよ。」

ドミトリイ・フョードロキツチは愕然とした。

「そんな筈があるもんか！」と彼は叫んだ、「お前は謔言を言つてるんだよ！ グルーシエンカがあの女のそこへ行くなんかつて？」



アリョーシヤは自分がカテリナー・イワーノヴナの家へはいつて行つた抑々から、親しく目撃した出来事を残らず話した。彼は十分間ばかり話しつづけた。無論、彼はそれを流暢に話した譯でもなかつたが、肝腎な言葉や肝要な仕草を掻いつまむやうにして、ただの一言で自分自身の感情をまさまざと傳へるやうにしながら、すべてを手に取るやうに説明した。兄ドミトリイは不氣味なほど身じろぎだもせず、じつと眼を据ゑて、無言のまま弟を見つめてゐたが、彼がすべてを了解して、一切の事實の要點を掴んだことは、アリョーシヤにもよく分かつてゐた。しかし話の進むにつれて、流石にその顔は次第に沈んで来た、といふよりはむしろ物凄くなつて来た。彼は澁面をつくつて、齒を喰ひしばつてゐたが、一つところを見据ゑてゐた眸は更にひどく凝結して、一入けはしくなつたやうに見えた……が、今まで憤りに燃えて物凄かつた顔が、異常な急速度をもつて、さつと一變したと見る間に、一そう思ひがけなく、それまできつと結ばれてゐた唇が一度に開いて、不意にドミトリイ・フョードロキツチは矢も楯もたまらないといふ風に、いかにも自然な笑ひ聲をあげて、腹をかかへて笑ひ出した。事實、彼は文字通りに腹をかかへて笑ひ崩れながら、長いあひだ、こみあげる笑ひに遮られて物を言ふこともできなかつた。

「では、その手を接吻しなかつたんだな！　ぢや、接吻せず、それなり駈け出したんだな！」彼は妙に病的な悦びをもつてかう喚いた。その悦び方は、若しもその天真爛漫さがなかつたら、或ひは無禮な悦び方と言はれても仕方がないかも知れない、「それぢや、あれはあの女を『虎』だと嗷鳴つたのかい？　いや全く虎だよ！　そしてあいつを處刑臺へのせろつて？　さうだとも、そんな目に遇はしてやればい

いんだ、おれも同意見だよ、もうすつと前からその必要があつたんだ！　だがなあ、おい、處刑臺はいとしても、まづ初めにすつかり快くなつて置かねばならないよ、しかし、おれにはあの傲慢の女王の心理が分かるよ、あの女の面目がその『お手』の中に躍如たりだ、毒婦めが！　あいつはこの世で想像することのできる、あらゆる毒婦の女王なのさ！　その中に獨特の悦びがあるんだよ！　で、あいつは家へ歸つてしまつたのだな！　おれは、どれ直ぐに……ようし……あいつのところへ一走り行つて来るぜ！　アリョーシカ、おれを責めないでくれ、あの女はほんとに絞め殺しても飽き足りない奴だよ……。」

「ぢや、カテリナー・イワーノヴナは！」とアリョーシヤは悲しさに叫んだ。

「あの女のことも分かつたよ、すつかり肚の中まで分かつたよ、今までにこんなによく分かつたことは一度もなかつた！　これは世界の四大洲を發見したやうなものだ、いや、四大洲ぢやない、五大洲だよ！　ほんとに何といふ思ひ切つたやり方だらう！　それは丁度、あの時の女學生のカーチェンカそつくりだよ、父を救はうといふ高潔な動機から、恐ろしい侮辱を受ける危険をも物ともせず、卑しい亂暴な士官のところへ平氣で出かけて行つた、あの時のカーチェンカそのままだ！　いや、自尊心だ、向かふ見ずだ！　運命に對する挑戦だ、無制限な挑戦だ！　かういふやうな心持なんだ！　ところで、あの伯母さんがあの女を止めたんだつてね？　あの伯母さんといふのは、これもどうして、なかなかのわがままな女で、例のモスクワにゐる將軍夫人の實の妹なんだが、姉より一倍と天狗だつたんだよ。それがさ、御亭主の官金費消といふ罪で、領地から何から一切合財すつてしまふこ、今まで大威張りでゐた夫人が



急に調子を低くして、それ以来、とんと頭もようあげなくなつたのさ、ちや、その人がカーチャを止めようとしても、耳を假さうともしなかつた譯だね、あの女の肚では、『何だつてわたしに征服できる、何もかもわたしの勢力範囲にあるのだから、もしその氣にさへなれば、グルーシエンカだつて丸め込んで見せる』つて譯さ、だから自分で自惚れて、空威張りをやつて退けたまでなもの、誰を恨むこともできないぢやないか？　で、あの女がわざと、進んでグルーシエンカの手を接吻したのは、何か狡い目算があつてだと思ふかい？　それは違ふよ、あの女はまつたくグルーシエンカに惚れ込んだのだよ、いや、グルーシエンカにはない、自分の空想に惚れ込んだのだ、自分の夢に惚れ込んだのだ、なぜつて、それはあの女の空想であり、あの女の夢であつたのだもの、惚れ込まずにはゐられないさ！　だが、おいアリオーシャ、一體お前どうしてあの連中のところから逃げ出して來たんだい？　法衣の裾をからけて駆け出して來たのかい？　わ、は、は！

「兄さん、あなたは、あの日のことをグルーシエンカに話したために、どんなにカテリーナ・イワーノヅナを侮辱したことになるか、そのことに少しも注意を拂はなかつたやうですね。たつた今グルーシエンカは、あの人に面と向かつて、『あなただつて、立派な器量を賣りに、こつそりと色男のところへ忍んでいらしたでせう！』つて言つたんですよ、ねえ、兄さん、これより酷い侮辱が又とあるものですか？」アリオーシャが何より心を痛めたのは、兄がまるでカテリーナ・イワーノヅナの屈辱を、悦んでゐるやうに思はれることであつた。勿論そんなことのあらう筈はなかつたけれど。

「さうか！」と、ドミトリイ・フォードロキッチは急に恐ろしく顔を擡めて、手の平で額をびしやり

と敲いた。彼は先刻アリオーシャから、この侮辱のことも、『あなたの兄さんは悪黨です！』とカテリーナ・イワーノヅナが喚いた話も、一緒にすつかり聞いた癖に、やつと今それに氣がついたのである。

「さうだ、實際、おれはカーチャの言ふ『あの恐ろしい日』の出來事をグルーシエンカに話したかも知れないよ、ああ、さうだ、話した話した、やつと思ひ出したよ！　さうさう、モークロエ村で話したんだつて、何でもあの時、おれはぐでんぐでんに酔つぱらつてゐて、ジプシイの女たちは歌をうたつてゐたつて……だが、おれはさめさめと泣いてゐたんだ、あの時泣きながら、おれは跪いてカーチャの面影に祈りを捧げてゐたのだ、そしてグルーシエンカだつて、おれの氣持を分かつてくれたよ、あの時あれは何もかも分かつてくれて、さういへばたしか自分でも泣いてゐたやうだよ……しかし、畜生！　今から思へばかうなつて行くのが當然だつたんだよ！　あの時は泣いた癖に、今は……今は『胸に劍を！』つて譯か、みんな女はそんなものさ！」

彼は伏目になつて物思ひに沈んだ。

「さうだよ、おれは悪黨だ！　紛れもない悪黨だ！」と、不意に彼は陰氣な聲でかう言つた。「泣いても泣かなくても、どちらにしても、やはり悪黨に違ひないんだ！　どうか、あの女にさう言つてくれ、それで腹が癒えるものなら、おれは悦んで悪黨よばはりに甘んじますつてな、しかし、もう澤山だ、無駄口をきくことなんかありやしない！　面白くも何ともないよ、お前はお前、おれはおれの道を行くことにしよう、おれはもう、いよいよこれが大詰めといふ瞬間までは、二度と會ひたかないんだよ、さうなら、アレクセイ！」かう言つて彼は固くアリオーシャの手を握りしめると、やはり伏目になつて頭



を垂れたまま、まるで振り切るやうにして、足早に町の方角へ歩き出した。アリョーシャはその後ろ姿を見送つてゐたが、兄がかう出し抜けに行つてしまはうとは、どうしても信ぜられないといふ風であつた。

「待つてくれ、アレクセイ、もう一つ白状したいことがあるんだ、お前にだけ！」と、不意に引つ返して来たドミトリー・フォードロキツチが言つた。「おれを見る、じつとおれを見るんだ、いいか、そこからだよ、ここで今、恐ろしい破廉恥なことが覺悟されてゐるのだ、『それからだよ』と言ひながら、ドミトリー・フォードロキツチは變な顔つきで、自分の胸をとんと拳で叩いた。それはまるで、破廉恥といふものが正しくそこにあつて、胸の上のポケットの中へでも藏つておくか、乃至は何か縫ひ込んで頸にぶら下げてゐるとでもいふやうな風であつた。お前も知つてゐるやうに、おれは悪黨だ、折紙つきの悪黨だよ！ だが、覺えておいてくれ、現在この瞬間、それからここに、このおれの胸の中におれが持つてゐる破廉恥に比べれば、以前に犯したどんなことだつて、今、又は今後し出かすかも知れんどんな陋劣なことだつて、物の數では無いんだよ、その破廉恥が現に遂行せられようとしてゐるが、それを中止しようと、決行しようと、今のところ、まだおれの自由なんだ、そこを覺えといてくれよ！ いや、結局おれは中止しないで、決行するに違ひないと思つてくれ、さつきおれは、何もかもお前にぶちまけたけれど、このことだけは話せなかつた。おれだつて、別にそれほど面の皮が厚くはないからなあ！ ところで、おれはまだ思ひ留まることが出来るんだ。思ひ留りさへすれば、あすにでも、失墜した名譽の半分だけが確かに取り戻すことができるのだ。しかし、思ひとまるまい、おれは筋書を完全に

やりとほすよ。さあお前、證人に立つてくれ、おれは前以つて、ちやんと意識してかう言つて置くからな！ 暗黒と滅亡だ！ 何も説明など必要がない、時節が来れば自然に分かるよ、穢らはしい路地と極道女か！ ちや、あばよ！ おれのことなんぞ神様に祈らないでくれよ、おれはそんな値打ちがないのだ。それに必要もないよ、いや、全然必要がないのだ！ おれはちつともそんなことをして欲しいと思はんよ！ さあ行け！……」

かう言つて不意に歩き出すと、今度は本當に行つてしまつた。アリョーシャは修道院をさして歩を進めた。「何だつて、何だつて、おれはさつぱり分らないんだ、兄さんは一體何を言つてるんだらうな？」それが彼には奇態に感ぜられた。「さうだ、明日はぜひ兄さんに會つて、問ひ訊してやらう、無理にでも問ひ訊してやるんだ、一體あれは何を言つてるんだか？」

\*

\*

\*

彼は修道院を迂回すると松林を抜けて、眞直ぐに庵室へ辿りついた。庵室へはこの刻限になると誰も入れないことになつてゐたが、彼にはすぐに扉をあけて呉れた。長老の部屋へ入つた時、彼の胸は打ち慄へた。「何のために、何のために自分はここを出て行つたのだらう？ また何のために長老は自分を「娑婆」へ送り出したのだらう？ ここには静寂と靈氣が溢れてゐるのに、かしこは擾亂と暗黒の巻で、一步そこへ足を踏み入れたが最後、昏迷の中に行き暮れてしまはなければならぬ……」



庵室には新發意のポルフィーリイとパイーシイ神父が居合はせたが、この神父はけふは終日、殆んど一時間おきに、ゾシマ長老の容態を見にやつて来たのである。アリョーシャは、長老の病氣がだんだん險悪になる一方だと聞いて、はつと愕いた。けふは、弟子たちを相手に行ふ常例の晩の法談さへできなかったとのことである。いつもは晩の勤行の後、安らかな眠りに入る前に、院内の衆僧が長老の庵室へ参集して、各自けふ一日のうちに犯した罪や、罪深い妄想や思考や誘惑、さてはめいめいの間に起こつた諍ひなどを、聲高らかに懺悔するのであつた。中には跪いて懺悔告白する者すらあつた……長老はそれを各々解決したり、和解させたり、訓戒を與へたり、改悔をすすめたりして、最後に一同を祝福して、退出させるのであつた。この衆僧の『懺悔』を楯に、長老制度の反對者が攻撃の氣勢を上げて、それを聖秘禮としての懺悔の神聖を褻すもので、殆んど瀆神罪と言つても過言でないなどと、全く見當はずれたことを言ひ出したのである。剩へ彼らは、かうした懺悔は、何ら良き結果を齎らさないばかりか、却つて人々を罪惡と誘惑に導くのみであると言つて、僧正管區長にまで問題を持ち出したほどであつた。實際、衆僧の多くは長老の許へ集まるのを苦痛に思つて、不精々々やつて來るのであつた。それといふのも大抵の者が、おれは謀叛を企ててゐるとか、高慢な人間だなどと思はれたくないために出席するだけだからである。また人の噂では、寺僧の中には、懺悔の集りへ出る前に、『おれは今朝お前に腹を立てたといふから、お前もうまくばつを合せてくれ』などと話題を拵へるため、仲間同志で豫め打ち合せをしたりさへした。實際、こんなことが度々あつたといふことは、アリョーシャも知つてゐた。その他にも彼の知つてゐること、修行僧が肉親から受け取つた手紙まで第一に長老の手へ渡されて、受信人よ

りも先きに長老が開封して目を通すといふ習慣に、非常な不満を抱いてゐる向きもあるといふことである。無論、これはすべて任意の服従から有益な指導を仰ぐ目的で、自由に誠實に行はれるべきことであつたが、實際は殆んど誠實を缺いてゐるばかりか、寧ろわざとらしい技巧を以つて行はれることがあつた。けれど、寺僧の中でも年長の經驗ふかい人々は『修行のために誠心をもつて、この壁の中へはいつて來たほどの人には、疑ひもなくかうした服従や難行が有益なもので、自分たちに偉大な利益を齎らすものであることが分かる筈である。ところが、それを煩はしく思つて不平を鳴らすやうな者は、修道士でないも同然で、そもそも修道院などへ入つて來る必要はなかつたのである。かういふ人の安住すべき場所は俗世間の中にある。罪惡や惡魔は俗世間ばかりでなく、修道院の中でも、やはり防ぎきれぬものではない。だから、些かの罪惡も默許することはできない譯である。』とこんな風に考へて、自説を主張するのであつた。

「衰弱が加はつて、嗜眠状態に陥つてお出でなさる。」とパイーシイ神父はアリョーシャを祝福した後、小聲で彼に傳へた。「もう、眼をお醒しするのも難かしいくらゐだ、もつとも、そんな必要もないけれど、先きほど五分間ばかり眼を醒されて、自分の祝福を皆に傳へてくれと頼まれ、また皆には、夜の祈禱の際、自分のために祈つて貰つて欲しいとの御傳言であつた。明日はもう一度、ぜひ聖餐を受けたいと申してをられる。それから、アレクセイ、お前のことを思ひ出されて、もう出て行つたかと訊ねられたから、今、町へ行つてをりますと申し上げたところ、『わしもさうさせるために祝福してやつたのだ、あれのゐるべき場所はあすこだ、當分はここにをらん方がよい』と、こんな風にお前のことを言はれた



ぞ。それがいかにも愛情に溢れた、心配らしい言ひ方であつた。お前は自分がどんなに心にかけてゐるか分かつてゐるかな？ けれど、長老がお前の一身上について、當分のあひだ浮世へ出てをれと言はれたのは、どういふ譯であらうな？ 大方お前の運命について、何か見抜いてをられることがあつてのことだらう！ しかし、アレクセイ、たとへお前が俗世間へ歸るとしても、それは長老がお前に授けられた一つの修行と見るべきで、決して輕薄な無分別や浮世の歡樂のためではないぞ、このことをよく胸に刻んでおくがよい……」

パイーシイ神父は出て行つた。長老は、たとへ一日二日は生き延びるとしても、所詮瀕死の状態にあるのだといふことはアリョーシャにとつて、もはや疑ひもない事實である。アリョーシャは父をはじめとしてホフラーコワ母娘や、兄や、カテリーナ・イワーノヴナなどと面會の約束はしてあるけれど、明日は決して修道院の外へ一步も出ないで、長老の臨終までその傍らにつき添つてゐようと心に固く決心した。彼の胸は愛情に燃え立つて來た。そして、彼は、世界中の誰にもまして愛してゐる人が死の床に打ち臥してゐるのを修道院に残して町へ出て、たとへ暫くでもその人を忘れることのできた自分を深く責めないではゐられなかつた。彼は長老の寢室へ入つて行くと、そのまま跪いて、眼れる人に向かつて額が地につくほどのお辭儀をした。長老は殆んど聞き取れぬくらゐ穩かに呼吸しながら、靜かに、身動きもせず眠つてゐた。その顔は飽くまで平穩であつた。

長老が今朝ほど客を迎へた次の間へ引つ返すと、アリョーシャはただ長靴を脱いだだけで、殆んど着換もしないで、固い革張りの幅の狭い長椅子の上へ横になつた。彼はもう久しいあひだ每晚枕だけ持つ

て來て、この椅子の上で寝ることに決めてゐた。今朝、父が大きな聲で嗚鳴つた例の蒲團は、もう永らく敷くの忘れてしまつてゐた。彼はただ自分の法衣を脱いで、それを上掛けの代りに體に掛けただけであつた。しかし寢に就く前に、彼は跪いて長いあひだ祈禱をした。その熱心な祈禱の中で彼が神に願つたのは、自分の惑ひを解いて貰ふことではなく、いつも神に對する讚美嘆稱の後で、自分の魂を訪れた悦ばしい歡喜の情を渴仰したばかりである。彼の就寢の前の祈禱は、たいてい神に對する讚美のみで充されてゐた。さうした歡喜の情はいつも軽い安らかな眼りを彼に齎らすのであつた。今もかうして祈禱をしてゐるうちに、ふと、先ほどカテリーナ・イワーノヴナのところの女中が追つかけて來て彼に渡した蓄微いろの小さな封筒がポケットにあるのに氣がついた。彼はちよつと當惑したけれど、とにかく祈禱をすました。それから少し躊躇した後封を開いた。その中にはリーズと署した自分あての手紙が入つてゐた——それは、今朝、長老の前で彼をからかつた、あのホフラーコワ夫人の若い娘からよこしたものであつた。

『アレクセイ・フォードロキッチ、』と彼女は書いてゐた。『わたしはこの手紙を誰にも内證で、お母さまにさへ秘密にして書いてゐます、そして、それがどんなに悪いことかかつてことも分かつてゐます。けれど、わたしは自分の心の中に生れ出たことをあなたに申し上げないでは、もう生きてゐられません。このことはわたしたち二人より他には、(當分の間)、誰にも知らしてはならないのです、けれど、わたしの申し上げたいと思ふことを、どんな風にもあなたにお話ししたいのでせうね、紙は顔を赤らめないと申しますが、それは嘘ですわ、ほんたうのことを申しますが、紙まで今のわたしと同じやうに、眞赤



な顔をしてゐるのですもの、お懐かしいアリョーシヤ、わたしはあなたを愛してゐます、まだ子供の時分から——あなたが今とはまるで別人のやうでいらした、モスクワ時代から愛してゐましたの、そして一生涯あなたを愛しつづけて行きますわ、わたしはあなたと一つになつて、年とつたら御一緒にこの世を終りたいと、自分の心の中でああなたを選んだのでございます、けれど、必らずお寺を出て下さるといふ條件つきなのですよ、わたしたちの年のことでしたら、それは法律に定められた年になるまで待ちませう、その頃までには、わたしもきつと丈夫になつて、一人で歩いたり、ダンスをしたりできるやうになりますわ、そんなことは言ふまでもないでございます。

『わたしがどんなに考へたかお分かりになつて下さるでせう、けれど、ただ一つ、どうしても考へつかないことがございますの、それは、この手紙をお読みになる時、わたしのことをどんな風にお思ひになるだらうかといふことです、わたしはいつも笑つたり、ふざけたりばかりしてゐるんですもの、今朝だつてあなたをすつかり怒らしてしまひましたでせう……けれど誓つて申し上げますわ、わたし今ペンを取る前に聖母様の御像にお祈りをしましたのよ、そして今でもやつぱりお祈りをしてゐますの、ほんともう泣き出さないばかりでございますわ。』

『わたしの秘密はもうあなたのお手に握られてしまひましたわね、明日あなたがいらして下さる時、わたしどんな顔をしてお目にかかつたらいいのかわかりませんわ、ああ、アレクセイ・フォードロキツチ、わたしがあなたのお顔を眺めてゐる間に、また我慢ができなくなつて、今朝とおんなじに、馬鹿みたいに笑ひ出したりしたら、どういたしませうね？ きつと、あなたはわたしをいやな冷かしやだとお

思ひになつて、この手紙だつて本當にしては下さらないかも知れませんが、ですから、もしわたしを可哀さうだと思ひになつたら、明日わたしのところへ入つてらつしやる時、おねがひですからあまり眞直ぐにわたしの顔を御覧にならないやうにして下さい、わたしの眼があなたのお眼に出會つたら、きつと笑ひ出すに違ひないんですから、だつて、あなたは、あんな長い着物を着てらつしやるんですもの……わたし今でも、それを思ふと體ぢゆうがぞつとしますわ、ですから、入つていらしても、暫らくはわたしの顔をちつとも御覧にならないで、お母さまの方か、窓の方を御覧になつて下さいましな……』

『たうとう、わたしあなたに戀文を書いてしまひましたわ、まあ、ほんとに何といふことをしてしまつたのでせう！ アリョーシヤ、わたしを輕蔑しないで頂戴、もしあたし大變わるいことをして、あなたをお苦しめてゐるやうでしたら、どうぞお許し下さいまし、わたしの多分永久に亡びてしまつた名譽の秘密は、今あなたの手の中にあるのです。』

『わたし今日はきつと泣きますわ、さよなら、恐ろしい、再會の時まで、リーズ。』

『二伸、アリョーシヤ、ただね、屹度、屹度、屹度いらして頂戴ね！ リーズ。』

アリョーシヤは驚愕をもつて讀み終つた。そしてもう一度讀み返して暫く考へてゐたが、不意に靜かな愉しさを微笑みを洩した。彼はぎくりと身慄ひをした。その微笑みが彼には罪惡のやうに思はれたのである。しかし一瞬の後またもや同じやうに靜かな、幸福さうな微笑みをうかべるのであつた。彼はゆるゆる手紙を封筒へ納めてから、十字を切つて、横になつた。すると胸さわぎは急にぱつたりとやんでしまつた。『主よ、さきほどの人たちがすべてを憐れみ給へ、あの不幸な、荒れ狂ふ人たちを救ひ給へ、



あの人たちを正しい道に導き給へ、すべての道はあなたの御手のうちにあります、あなたの道をもつてあの人たちを救ひ給へ、主よ、あなたは愛でゐらせられます、あの人たちすべてに悦びを授け給はらんことを！」アリオーシヤはかうつぶやきながら十字を切ると、おだやかな眠りにおちて行くのであつた。

### 第四篇

#### 破裂

I

フェラポント長老

朝まだき、まだ夜の明けないうちにアリオーシヤは起こされた。長老は眼をさますと、床を離れて安樂椅子にかけたいと言ひ出したが、しかも非常な衰へを感じてゐた。意識は全く確かで、顔にはかなり疲勞の色がうかんでゐたが、晴れ晴れして、殆んど悦ばしさうにさへも窺はれた。眼つきは愉しげに愛想よく人をさし招くかのやうであつた。

「ひよつとしたら、今日一日の壽命がないのかも知れん。」と彼はアリオーシヤにいつた。それからすぐに懺悔をすることと聖餐をうけることを所望した。彼の懺悔を聴く相手はいつもパイーシイ主教であつた。この二つの聖秘禮のうち、聖油塗布の式が行はれた。司祭たちが集まつて来て、庵



室の中はやうやく苦行者たちで一ぱいになつた。そのうちに夜が明け放れた。多くの人々が修道院の方からもやつて来るやうになつた。勤行が終つたとき、長老は誰も彼もに別かれを告げたいといつて、一人一人に接吻した。庵室が狭いので、先に来た人は、後から来た人に席をゆづつた。アリョーシャは又もや安樂椅子に坐り直した長老のわきに佇つてゐた。長老は根氣のつづくかぎり説教をつづけた。その聲は弱々しかつたが、まだかなりにしつかりしてゐた。「わしはな、皆さんもう永年のあひだ、皆さんに説教をして來ました。つまり、永年の間、大きい聲で物を言ひ通したわけです。それで、もうすつかり物をいふ癖がついてしまつて、今のやうに弱つてゐる時でも、物を言ふよりは黙つて居る方がかへつてむづかしい位になりましたよ。」彼は身のまはりに寄り集まつてゐる人々を、なつかしげに見まはしながら冗談をいふのであつた。

アリョーシャは長老がそのときに言つたことを、多少は覚えてゐた。長老の話はつきりとして、その聲も、極めてしつかりしてゐたが、話そのものはかなり、とりとめのないものであつた。彼はいろんなことを話したが、どうやら、自分の生前に話し切れなかつたことを、臨終に際して、もう一度、すつかり言つてしまひたいらしかつた。しかも、それはただ單に教訓をするためばかりではなく、自分の悦びや法悦をあらゆる人たちにわかち、更にまた、生きてゐるうちに自分の眞情を吐露したかつたのであらう。

「皆さんどうかお互に愛し合つて下さい。」と長老は説いた（このことはアリョーシャの記憶による）。「また神の子たちを愛して下さい。われわれがここへ參つて、この部屋の中に閉ぢこもつたからとい

つて、俗世間の人たちより淨いといふわけはありませんので。それどころか、ここへ參つた者は誰しも、自分が俗世間の誰よりも、またこの世の中の誰よりも劣るのだと認めてゐる筈で……。従つて僧侶たる者が部屋の中にこれからさき、暮らせば暮らすほど、一そう痛切にこのことを自覺しなければなりませんのぢや。何故と申すに、若しもさうでなかつたならば、ここへ來るいはれはない譯ですからの。自分は俗世間の誰よりも劣るといふことばかりではなく、自分はあらゆる人々の前に、萬事につけて、一切の罪、あらゆる人類の罪、世界の罪、個人の罪に對して義務を負うて居ると自覺した暁には、われわれの隠棲の目的が達せられるといふものです。つまり、何です、われわれは一人々々、疑ひもなく、この世のあらゆる人々に對して、罪があるからです。しかも、一般に世界的罪惡といふものによつてではなく、この世のあらゆる人間、すべての個人に對して、一人々々が個人的に罪があるからです。この自覺は何も僧侶ばかりではなく、地上のすべての人のふむべき最高の道なのです。すなはち、僧侶は何も特殊な人ではなく、ただ單に、この世の誰しもが當然かくあるべき管の道をゆくだけのものですからの。かくてこそ、われわれの心は、初めて限りなく、宇宙的な、飽くことを知らぬ愛に感激するものです。その時こそ、あなた方はめいめいに愛によつて全世界を征服し、涙をもつて世界の罪を洗ひ去ることができませう……。誰もが自分の心をいまして、絶えず己れに懺悔をなさるがよい。己れの罪を恐れずに、罪を感じたときにも、ただ悔いあらためて、決して神に誓ひをかけてはなりません。くりかへして言ふやうですが——決して高ぶつてはなりません。小さな者に對してばかりでなく、大きな者に對しても高ぶるものではありません。またこちらを排斥するもの、侮辱するもの、誹謗するもの、中傷



するものをも憎んではなりません。無神論者、悪の傳道者、物質論者をも、その中の善良な者のみではなく、邪悪な者をすらも憎んではなりません。何となれば、さういふ人たちの中にも、善良な人は澤山のちやから、殊に今のやうな時世にはな。だからかういふ人たちのために祈つておやりなされ、『主よ、誰にも祈つてもらへぬ凡ゆる人たちを救ひたまへ。御身に祈ることを欲せざる者をも救ひたまへ』と。それからそこで附け加へて下さい、『主よ、わがかかることを祈るは高慢のためではござりませぬ。わが身みづからも、誰にもまして忌まはしい者でござりますから……』と、どうか神の子を愛して下さい、羊の群れを外來の者に奪はせるやうなことがあつてはなりませんぞ。若しも怠けてゐたり、思ひあがつてゐたり、なほ甚だしきは貪慾のはてに居眠りでもしてゐたら、四方八方から、淺ましい奴どもがやつて来て、羊の群れを奪つて行くのですからの。どうか人民どもに、たゆむことなく福音を説いてやつて下さい……。彼らから高利を貪るやうなことがあつてはなりません……。金銀を愛して、これを貯へたりしてはなりません……。神を信じて、信仰の旗をしつかと握つてゐて下さい。高くこれを振りかざすやうに……』

それにしても、長老の言葉は、ここに記したよりも、すなはち、アリョーシャが後に書きとどめたよりも、ずつと斷れ斷れなものであつた。どうかすると、彼は力を集中するかのやうに、すつかり言葉をとぎらせて、喘いだりしてゐたが、しかもなほ、法悦に浸つてゐるかのやうであつた。人々は感激しながら耳を傾けてゐた。尤も、多くのものは、彼の言葉に驚ろいて、そこに暗澹たるものを認めてゐた……。アリョーシャは偶々、庵室をほんの一寸のあひだ離れたとき、庵室の中と、庵室のあたりに集ま

つてゐた僧侶たちが一樣に昂奮して、近づきつつあるものを待ちうけてゐる様に今更ながら驚ろいた。この期待はある人たちの間では殆んど不安に近く、また或る人たちにとつては嚴肅なものであつた。誰も彼も、長老が瞑目すると直ちに何かしら大きなことが起るだらうと期待してゐたのである。この期待は一方から見ると殆んど輕はづみなものとも考へられたが、いとも嚴格な主教たちさへも、この考に襲はれてゐた。中で最もいかめしい顔をしてゐるのはパイシー主教であつた。アリョーシャが庵室を出たのは、町から歸つて来たラキーチンが、一人の僧を通じて、こつそり呼び出したからであつた。ラキーチンはアリョーシャに宛てたホフラーコワ夫人の奇怪な手紙を携へてゐたのである。夫人はアリョーシャに一つの興味のある、いかにもこの場合にふさはしい消息を傳へてゐた。事件といふのは、昨日、長老に闊見して、祝福するためにやつて来た平民の女の信者の中に、町の者でプローホロヴナといふ下士官の婦がゐたことであつた。彼女は長老にむかつて、ワーセンカといふ息子が、遠くシベリヤのイルクーツクへ勤めに行つたが、もう一年ほども、何一つ便りがなから、死んだ者として、教會でそのあとを弔つてもよいだらうかと訊ねた。この質問に對して、長老は嚴肅な面持で、はつきり分りもしないのに供養をするなどは、もつての外のことだと禁めて、かやうな仕業は魔術にも等しいものだといつた。か、その後で、長老はお婆さんの無知から来たことだと赦してやつて、『まるで未來記でも見てゐるかのやうに』(ホフラーコワ夫人の手紙の言葉による)、慰めて、『お前の息子のワーシャは間違ひなく生きて居る。だから近々のうちに母親のところへ歸つて来るか、手紙をよこすに相違ない。まづ、

\* これと同じやうなことが第二篇の第三章にも出てゐる九十三頁参照。(續卷)



お前も自宅へ歸つて、それを待つてゐたらよい。』と附け足した。『ところが、どうせう？』とホフラーコワ夫人は感激して附け加へてゐる、『豫言は文字どほりに、それどころか、それ以上に的中したのです。』お婆さんがわが家へ歸つたかと思ふと、もうシベリヤから待ちに待つてゐた便りを渡された。しかも、そればかりではなく、ワーシヤは途中、エカテリンブルグからよこしたこの手紙のなかで、自分がいま、或る役人と一しよに、露西亞内地へ歸國の途上にあること、この手紙をお母さんが受けとつてから三週間すると、『お母さんを抱きしめることができるでせう』などと書いてよこしてゐた。

ホフラーコワ夫人はここに新しく實現された『豫言の奇蹟』をすぐに修道院長やその他一同の者に傳へてくれとアリョーシヤに熱心に頼んで、『このことは誰も彼も、みんなに知つてゐて貰はなければなりません！』と、手紙の終りで、詠歎してゐた。手紙は走り書きで、一行一行に筆者の昂奮が感ぜられた。しかし、アリョーシヤは仲間の人たちに話すことは少しもしなかつた。といふのは、みんなでこのことを知つてゐたからである。ラキーチンは彼を呼び出すやうにと僧侶に頼んだとき、『ラキーチンがぜひともお話したいことがあり、しかも非常に大事なことで、一刻も報告を猶豫することができないものだ』と、パイーシイ主教様に申し上げて、かやうな不躰なことを幾重にもお詫び申し上げる。』との言づてを頼んだ。ところが、この坊さんはラキーチンの頼みをアリョーシヤに傳へる前にパイーシイ主教に傳へたので、アリョーシヤは元の席に歸つたとき、ただパイーシイ主教に手紙を読んで聞かせ、ほんの記録として報告するほかに、なすことがなかつた。ところが、この峻厳にして、容易に人を信用しない僧侶でさへもが、『奇蹟』の消息を読むと、苦い顔をして、心の中の或る種の感情を全く抑へる

ことができなかつたのである。彼の眼はかがやき、唇は勿體ぶつて、熱中してゐるやうに、急に微笑みをうかべた。

「われわれもそんなことを見るだらうか？」と彼はうつかりしてゐたらしく、不意に口を迂らした。「われわれもこれからそんなことを見るのだらうか、そんなことを！」と周圍にゐた僧侶たちも繰り返したが、パイーシイ主教は又もや苦い顔をして、一同の者に、——もう暫らくこのことは誰にも言はないで貰ひたい、『もつと、はつきり事實がわかるまでは、何しろ、世間の輕はずみなために起る話はずるぶんだいのだし、それにまた、今度の事件でも、自然こんなことになつたかも知れんのだから』と頼んだ。彼はまるで良心に申しわけをするかのやうに、用心ぶかく附け足したが、自分でも殆んど自分の釋明を信じてゐなかつたのである。このことは、話を聞いてゐた人々も實によく見抜いてゐた。

勿論、この『奇蹟』は一時間を出でずして、修道院中にも、また、彌撒のために修道院へやつて來た世間の人たちの多くにも、知れ渡つてしまつた。誰にもまして、この實現された奇蹟に心をうたれたのは、極北のオブドルスクの、小さな修道院から、『聖シリエストル』の使ひで、つい昨日ここの修道院へやつて來た僧侶である。

彼は昨日、ホフラーコワ夫人のわきに佇つて、長老にお辭儀をすると、『病氣のなほつた』令嬢を指しながら、長老にむかつて、熱心に、『どうしてあなた方はそんな大膽なことをなさるのです？』と訊ねたものである。

問題は彼が今、或る種の疑惑につつまれて、何を信じていいのか殆んど分からないといふところにあ



つた。昨日、彼はこの修道院のフェラポント長老を、蜜蜂小屋の向うにある離れの庵室に訪れたが、この會見は彼に並々ならぬ、すさまじい印象を惹きおこした。このフェラポント長老はここでの最年長者で、精進と沈黙を守る偉大な苦行者であつた（この人のことはすでに長老ゾシマ、殊に長老制度に對する反對者として少しく述べておいたが、彼はこの制度をもつて、有害にして輕率な改革だと見做してゐた）。彼は沈黙を守つて、誰とも殆んど一ことも物をいはなかつたが、極めて危険な反對者であつた。彼が危険であつたといふのは、主として、この寺の多くの僧侶が衷心から彼に同情を寄せ、この寺に來る世間の人たちにも、彼を真正正銘のキ印だと思ひながらも、偉大なる義人とし、苦行者として、崇めてゐる者が非常に多かつたからである。

しかし、このキ印だといふことが多くの人々を魅了したのであつた。フェラポント長老は一度としてゾシマ長老のところへは行かなかつた。彼は庵室に暮らしてゐたが、庵室の規則によつて、それほど煩はされはしなかつた。つまり、彼がまぎれもないキ印のやうに振舞つてゐたからである。彼は七十五歳くらゐ、或ひはそれより多いくらゐであつたが、いつも蜜蜂小屋の向うの眞垣の隅の、殆んど崩れかかつた古い木造の庵室に暮らしてゐた。この庵室は遠い昔（前世紀ではあつたが）に、百五歳までも生き延びたヨナといふ偉大なる精進と沈黙の苦行者のために建てられたもので、この人の事蹟については、この修道院はもとより近在にまでも、多くの極めて興味のある物語が今に至るまで傳はつてゐる。

フェラポントはつひに永い間の願ひが叶つて、七年ほど前にこの百姓小屋にも等しいやうな、寂しい庵室に住まはして貰ふやうになつた。尤も、この庵室は祈禱堂にかなり似かよつてゐた。つまり、そ

こには人々の寄進にかかるたくさん聖像があつて、その前にはやはり寄進にかかる燈明が、永劫に消ゆることなく點されてゐたからであつた。そこで、フェラポントはこの燈明の番人としてここへ置かれたかのやうな恰好であつた。

世間の人の噂では（この噂は事實であつた）、彼の食物は三日に麵麩二斤だけで、そのほかには何もないのであつた。麵麩はすそ近くの蜂小屋に住んでゐる蜂飼が、三日に一度づつ運ぶのであつたが、自分のためにこんな勞をとつてくれる蜂飼とも、彼はやはり滅多に言葉を交はさなかつた。この四斤の麵麩と、それに、日曜ごとに規則正しく、夜の祈禱式の後で院長から送られる聖餅と、——この二つが一週間の彼の食物の全部であつた。コップの水は日に一度とり變へられた。

彼は祈禱式には稀れにしか出なかつた。ときをり、膝をついたまま、脇目もふらずに、一日ぢゆう祈禱をしながら起きようともせぬ彼の姿を、參詣の人々は見受けることがあつた。何かの拍子で參詣の人と言葉を交へることがあつても、その話しぶりは簡單で、ぶつきら棒で、奇妙で、いつも粗暴ならぬであつた。尤も、外から來た人と長いこと話し込むことも極めて珍らしいことであつた。そんな場合には、大てい、相手の者に大きな謎でもかけるやうな言葉を、何か一つ必ず話の間に挿むのであつた。その後では、何といつて頼んでも、決して説明をしてくれなかつた。彼は僧位といふものを何も持つてゐなかつた。單に一介の僧侶たるに過ぎなかつた。これは極めて無智な人たちの間に限つてゐたが、かなり、奇怪な或る噂が傳はつてゐた、——といふのは、フェラポントが天の精靈と交り結んで、この精靈だけを話相手にしてゐるので、そのために、人間に對しては、いつも沈黙を守つてゐるといふので



あつた。

オブドルスクの坊さんは蜜蜂小屋へ辿りつくと、蜂飼に教へられて（これもやはり非常に氣むづかしい僧であつた）、フェラポントの庵室の立つてゐる一隅をさして進んで行つた。『ひよつとしたら、よそから来た人だといふので、話をなされるかも知れませんが、またことによつたら、何ひとつ聞き出せないかも知れませんよ。』蜂飼の僧は豫め注意を促した。後になつて當人が話したところによると、坊さんははげしい怖れをいだきながら庵室へ近づいたとのことであつた。すでに、時刻はかなり遅くなつてゐた。フェラポントはこのとき庵室の戸口にある低い小さなベンチに腰をかけてゐた。その上には、大きな楡の老樹が、微かにそよいでゐた。夕ぐれの冷氣が通りすぎた。オブドルスクの僧は苦行者の前に身を投げ出して、祝福を乞うた。

「お前さんはわたしを自分の前へ、同じやうにうつ伏しにさせようといふのかな？」とフェラポントはいつた。「起きなよ！」

坊さんは立ちあがつた。

「わたしにも祝福を授け、自分でも祝福を受けてから、傍へ来て坐るがよろしい。いづれから参つたのかな？」

何にもまして、この衰れた僧を驚ろかせたのは、フェラポントが疑ひもなく極度の精進をして、しかもかなり年が寄つてゐたのにも拘はらず、見かけたところでは、力づよい背の高い老人で、腰も曲らずにしやんとして、顔も痩せてはゐるが、元氣らしく、いきいきしてゐることであつた。その體の中に、

まだ並々ならぬ力が保たれてゐることは確かであつた。體格などは、まるで力士のやうであつた。これほどの年になつてゐながら、彼はまだすっかり胡麻鹽にはなりきつてゐなかつた、もとは眞黒であつた髪の毛は、頭にも頤にも房々としてゐて、大きな眼は灰色に輝やいてゐるが、目立つて飛び出してゐた。彼はOの母音に強い力點をおいて物を言つてゐた。そのむかし、囚人羅紗といつてゐた粗末な地の、長い赤茶けた百姓外套を着け、太い繩を帯にしてゐる。頸と胸とは、すっかり剥き出しになつてゐたが、幾月も脱いだことがなく、眞黒になつてゐる厚地の麻で作つたシャツが、外套のかけから覗いてゐた。人の話によると、彼は外套の下に、三十斤の錘をつけてゐることであつた。形の殆んど崩れかかつた古い沓を素足に履いてゐた。

「オブドルスクの小さな修院から、聖シリエストルのお使で参りましたので。」そはそはして、好奇の色に充ち、しかも、幾分おびえたやうな眼つきで、遠來の客は隠者を觀察しながら、つつましく答へた。

「ああ、お前さんのシリエストルのところへ行つたことがある。暫らく滞在してゐたものぢや。シリエストルは丈夫かえの？」

僧は口ごもつた。

「お前さんは譯の分からん人だでう！ 時に、精進はどんな風に守つて居るかの？」

「わたくしの方の食事は昔の行者の仕來りで、このやうになつて居ります。四旬節について申しますると、月曜、水曜、金曜には、全く食事をとりません。火曜と木曜には、同宿のもの一同に白麴麩に蜜入りの汁、それに莓か鹽漬の玉菜、それから碾割の燕麥がつくことになつて居ります。土曜日には、白



スープと豌豆の素麺、それにどろどろのお粥が出ます。これにはみんなバタがつくのでございます。日曜には、乾魚とお粥がスープにつくことになつて居ります。神聖週間には、月曜から土曜の晩まで、六日間といふものは麵麩と水ばかりで、ただ生の野菜を食べるくらゐのものでござりますが、それさへも制限がありまして、毎日食べる譯には参りません。これは第一週について申した通りでございます。神聖金曜には何一つ食べることが出来ません。それと同じで神聖土曜にも二時すぎまで断食をいたしました。二時すぎに初めて麵麩を少々と水を飲み、葡萄酒を一杯だけ頂きます。神聖木曜にはバタのつかない食物とお酒を飲んで、時によつては、乾ものを食べることもござります。と申しますのは、神聖木曜についてのラオヂキアの會議集にも、『四旬節の最終の木曜を慎しまさるは、四旬節のすべてをけがすに同じ』と申してあるからでございます。わたくし共の方では、こんな風にいたして居ります。しかし、あなた様とくらべましたら、これくらゐのことが何でございませうの！」と坊さんは急に元氣づいて言ふのであつた、「なぜかと申しますと、あなた様は年中——復活祭にさへも麵麩と水ばかり召しあがつていらつしやるからです。何しろ、わたくし共の二日分の麵麩は、あなた様の一週間分にも當るくらゐでございますよ。實に驚ろき入つたる偉大なご精進でございますよ。」

「では、<sup>グリス</sup>草は？」<sup>グレイ</sup>「Iの音を喉から押し出すやうに、殆んどXのやうに發音しながら、だしぬけにフェラポントは訊ねた。

「草？」と坊さんはびつくりして問ひ返した。

「さやう、さやう、わしはあいつらの麵麩など少しもいりませんから、そんな物から顔をそむけて、

森の中へでも入つて、そこで草か毒で命をつなぐわ。ところが、この奴らは自分の麵麩を見すてようとはせんのだ。つまり、悪魔に結びつけられてをるのでな。このごろ、穢らはしい奴らは、そんなに精進することはいらんなど言ひをるが、さういふ奴らの考へば、まことに高ぶつて穢らはしいものぢや。」

「おお、さやうでございますよ。」と坊さんは嘆息した。

「あいつらの所で悪魔を見たかの？」とフェラポントが訊ねた。

「あいつらとは誰のことでございます？」坊さんは怖る怖る問ひ返した。

「わしは去年の神聖金曜に修道院長のところへ参つたが、それ以來すこしも出かけんのぢや。そのとき悪魔を見たのぢや。或る者は胸の所に抱いて衣のかけに隠し、ただちよつと顔だけ覗かして居る。また或る者はかくしの中から覗かせてゐたが、悪魔め、眼ざといもので、わしを怖がつてゐる。或る者は汚れきつた腹の中に巢をくはせて居り、また或る者は頸に嚙りつかせて、ぶら下げて居るが、當人は一向それに氣がつかずに連れて歩いて居るのぢや。」

「あなた様……お見えになりますか？」と坊さんは訊ねた。

「見えるというたでないか。ちやんと見え透いてをるわ。わしが院長のところから出て來ると、一匹の悪魔がわしをよけて、戸のかけへ隠れるのが見えたのぢや。そいつがなかなか大きな奴で、脊の高さ三尺もある。太くて長い茶色の尻尾をして居つたが、その先が丁度、戸のすき間へはいつたのぢや。わ



しもまんざら馬鹿ではないから、いきなり戸をばたんと閉めて、そいつの尻尾を挟んでやつた。すると、吠え立てて、もがき出したから、わしは十字架で三たびも十字を切つてやつた。見ると、踏み潰された蜘蛛のやうに息たえてしまった。今はきつと隅の方で腐れかかつて、臭い匂ひを放つて居る筈ぢやが、それが皆の眼に入らんのだぢや。鼻が利かんのぢや。わしは、もう一年も行かん。お前さんはよそから来た者ぢやによつて、打ち明ける次第ぢや。」

「何といふ怖ろしい言葉でございませう！　ところで、方丈様、」と坊さんは次第々々に大膽になつて来た。

「あなた様のことがかなりの遠方まで、大へんな噂が立つて居りますのは、本當のこととございませうか？　何でも、あなた様が、精霊と絶えず交り續けていらつしやるとか……」

「飛んで来るのだぢや。よく。」

「どんなにして飛んで参るのでございませう？　どんな形をして居りますやら？」

「鳥のやうにな。」

「鳩の形をした精霊でございませうか？」

「精霊が来ることもあるし、神霊が来ることもある。神霊はまた別な鳥の形をして降りて来るのだ。時には燕、時には金翅雀、時には山雀の形をして。」

「山雀を御覧になつて、どうして精霊だといふことがおわかりになります？」

「物をいふので。」

「どんなことをいふのでございませう。どんな言葉で？」

「人間の言葉ぢや。」

「どのやうなことをあなた様に申しますの？」

「今日はこんな知らせがあつた、今に馬鹿ものがやつて来て、つまらんことを訊くぢやらうと。お前さんはいろんなことを訊きたがるのう。」

「まあ、恐ろしいことを、方丈様。」と坊さんは首を振つた。その小心な眸の中には、疑はしげな色が窺はれた。

「さて、お前さんはこの木が見えるかの？」暫らく黙つてゐたフェラポントはかう訊いた。

「はい、方丈様。」

「お前さんの眼には楡ぢやらうが、わしの眼から見ると別の光景ぢや。」

「一體どのやうな繪で？」坊さんは空しい期待をいだきながら黙つてゐた。

「夜はよくあることぢや。あの二本の枝が見えるかの？　あれが夜になると、ちやうどキリストさまが、わしの方へお手を差しのばされて、その手でわしを捜しておいでになるやうに、まささまと見えるのだぢや、それでわしは慄へるのだ。怖ろしい、おお、怖ろしい！」

「キリスト様であつたなら、何も怖ろしいことはありませんまいに？」

「だつて、掴んで連れて行かれるので。」

「生きてままでございますか？」



「靈魂とイリヤの光榮の中ぢや！ 聞いたことがないのか？ 抱へて連れて行かれるのぢや。」

オブドルスクの僧はこの會話ののち、同宿の者の一人ある指定された庵室へ歸つて來た。彼はひどく懷疑の念をさへ寄せてゐたが、それでもゾシマよりは勿論、フェラポントの方に、より多く彼の心は親しみを感じてゐた。オブドルスクの僧は何にもまして、精進に重きをおく人であつたから、フェラポントのやうな偉大なる苦行者が、『奇蹟を見る』のも決して怪しむに足りないと思へてゐた。もとより、彼の言葉は馬鹿げたもののやうに見られぬでもなかつたが、その中にいかなる意味が含まれてゐるかは知る由もなかつた。それにまた信心きちがひといふものは、まだまだこれどころではない妙なことをいつたり、變なことをしたりするものである。戸のすき間に尻尾をしめつけられた悪魔のことは、ただ單に譬喩としてばかりでなく、直接の意味においても、心から悦んで信じたいやうな氣持がした。おまけに、彼はこの修道院へ來る前から、噂に聞いてゐただけの長老制度なるものに對して、非常な先入觀を抱いてゐたので、他の多くの者の尻馬に乗つて、有害な改革だと決めてしまつたのである。この修道院に一日、滞在するうちに、彼は早くも、長老制度にあきたらない輕卒な同宿の二三の人の、不平がましい内證話を嗅ぎつけた。その上、彼は生まれつきが、何ごとにつけても非常な好奇心をいだいて、すぐにどこへでも首を突つ込む人間なのであつた。だからこそ、ゾシマ長老によつて實現された新しい『奇蹟』についての消息は、彼の心のうちに極度の疑惑を呼び起したのであつた。

アリョーシヤは後になつて、好奇心に燃えるオブドルスクの客僧が、長老のぐるりや、その庵室のほとりにおしよせる僧侶の中に入つて、あちこちにかたまつてゐる群集の中へ一々首を突き入れ、話とい

ふ話に耳を傾け、誰にでも何か訊いてゐたのを思ひ出した。しかし、彼は今、そんな人にはさほどの注意を拂はずに、後になつて、一切のことを思ひ起したのであつた……。また、今はそれほどの騒ぎではなかつたのである。ゾシマ長老は又しても疲れを感じ、再び床に横たはつたが、もう眼をつむらうとして、急にアリョーシヤのことを思ひおこしたので、傍へ呼んでくれるやうにいつた。アリョーシヤはすぐに駆けつけた。長老のわきにはバイーシイとヨシフ、それに新發意のポルフィーリイがゐるばかりであつた。長老は疲れはてた眼を見開いて、じつとアリョーシヤを見つめてゐたが、いきなり問ひかけた。

「家の人たちがお前を待つて居るぢやらうな、お前？」

アリョーシヤはどきまぎしてゐた。

「お前に用のある人がありはせんか？ 昨日、誰かに今日ゆくと約束はしなかつたか？」

「いたしました……お父さんと……兄さん二人と……それからほかの人にも……」

「それ。是非とも行きなさい。心配しないがよい。わしはな、お前のそばで、この世における最後の言葉をいはずに死ぬやうなことはないんぢやから。この最後の言葉はお前にいふのぢや、ね、アリョーシヤ、お前に言ひ遺すのぢや。なぜというて、お前はわしを愛してくれるで。しかし、今は約束した人たちのところへ行くがよい。」

アリョーシヤはこの場を離れるのが辛かつたが、すぐに、この言葉に従つた。しかし、師のこの世における最後の言葉、しかも自分に對する遺言と思はれるものを聞かしてやらうといふ約束は、アリョーシヤ



シヤの心を動かして、歡喜の情をよびおこした。彼は町の用事を早く片づけ帰つて來ようと、急いで支度をした。丁度その時、パイーシイ主教が彼に門出の言葉と與へたが、その言葉は極めて強い、思ひもよらない感銘を與へるのであつた。それは二人が長老の庵室を出た時のことであつた。

「お前はな、たゆまず思ひおこさねばならぬことがある(とパイーシイは何一つ前置きなしに、いきなり言ひ出した)。つまり、世界の科學は、一つの大きな力に結合して、殊に現代に至つて、聖書に約束されて居る一切の尊いことを解剖したのだ。世間の學者のなした容赦のない解剖分析の結果、むかし神聖なものとされてゐたものは、影も形も残らんことになつてゐるのだ。しかも、彼らは部分々々のみを解剖して、全體といふものをすつかり見おとして居る。その盲目さ加減は驚異に價するくらゐだ。ところが、その全體は、昔と同じやうに、しつかりと彼らの眼の前に立つてゐて、地獄の門もそれを征服することができないのだ。果してこれは十九世紀に及ぶ永い間、生きて居らなかつたものか、また現に今でも個々の心の動きのうちに——民衆の動きの中に生きて居らんものだらうか？ それどころか、凡ゆるものを破壊する無神論者の心の動きの中にさへ、以前と同じやうに儼然と生きてをるのぢや。つまり、基督教を否定して、叛旗をひるがへす人でさへもが、その本質においては、基督の面影を宿して居るによつてぢや、しかも今もなほ、その通りの人として生活を續けて居るからだ。その證據には、彼らの智慧も、彼らの情熱も、嘗てキリストによつて示されしもの以外に、人間とその品位に相當する卓れたおすがたを、創り出すことができなかったのではないか。種々の試みもあつたが、それはいづれも片輪のやうな醜いものばかりだ。アリオーシヤ、このことは特によう覚えておくがよろしい。なぜというて、

お前は、臨終の長老のお指圖で、世間へ乗り出して行かねばならんからだ。この偉大なる目を思ひ出すときに、お前の門出のために衷心から與へたわしの言葉も、やはり忘れずに居つてくれるぢやらうな。何せ、お前は若いから、世の中の誘惑がはげしうて、堪へてゆくのは力に及ばぬかも知れぬでな。いや、もうよい、行きなさい。」

かういつてパイーシイ主教は彼を祝福した。修道院を出て行くとき、この思ひもかけない言葉を思ひめぐらしてゐるうち、アリオーシヤは、急に今まで自分に對して嚴重冷酷であつたこの主教が、今にして見れば思ひもよらない親友で、また、温かい氣持で自分を愛してくれる新しい指導者だ、といふことがやつと分かつて來た、——まるでゾシマ長老が死に面して、この人に遺言でもしたかのやうであつた。『多分、お二人の間に、それ位のことがあつたのかも知れない。』アリオーシヤはふと考へた。たつたいま、彼の聞かされた思ひがけない學者らしい議論は、ほかならぬこの議論は、パイーシイ主教の情熱に富んだ心を證明してゐる。彼はできるだけ急いでアリオーシヤの若い知性に、世の誘惑と闘ふべき武器を與へ、遺言によつて自分に託された若い魂に、我ながらこれ以上堅固なものを想像しえないくらゐに、堅固な牆をめぐらさうとしたのである。



父のもとにて

アリョーシャはまづ最初に父のところへ赴いた。傍まで来たとき、彼は昨日、父親が、なるべくイワンに見つからないやうにそつと入つて来いと、強く言ひ含めたことを思ひ出した。

『一體どういふわけなんだらう？』と今になつてアリョーシャは不意に氣がついた、『お父さんが僕ひとり何かこつそり話したいことがあるにしても、何も僕がこつそり入る必要はないんぢやないかな？』と、昨日は昂奮して何か別のことをいふつもりだつたのに、よう言へなかつたんだらう。』と彼はひとり決めをした。それにしても、マルファが彼のためにくぐりをあけながら（グリゴリイは病氣をして離れに寝てゐた）、彼の質問にたいして、イワンはもう二時間も前に外出したと答へたとき、彼はひどく喜んだ。

「お父さんは？」

「もうお起きなすつて、珈琲を召しあがつていらつしやいますよ。」とマルファは何だかそつけない調子でかう答へた。

アリョーシャは中へ入つた。老人はスリッパをはき、古ぼけた上着をひっかけ、たつたひとりで、食卓に向かひ、別にそれほどの注意も拂はずに、ただ氣をまぎらはらすために、何かの勘定書に眼を通してゐた。この家のなかに、彼はたつた一人きりであつた。（スメルヂャコフは晝の物を買ひに出かけて行つたのである）。しかし、彼の心にかかつてゐるのは勘定書ではなかつた。彼は早起きをして、元氣を出してはゐるが、それでも疲れた弱々しい様子をしてゐた。額は昨夜のうちに、打ちみが大きく紫いろに腫れ上がったので、赤い布を巻きつけてあつた。鼻もまた、一晩のうちにひどく腫れあがつて、打ちみが斑點のやうに幾つもできてゐた。別に眼に立つほどではなかつたが、何かしら特に意地わるさうないらいらした表情を、顔全體に付け加へてゐた。老人は自分でもそれをよく承知してゐたので、入つて来るアリョーシャを無愛想に見やるのであつた。

「冷し珈琲だ。」と彼はするどい調子で叫んだ、「別にすすめはすまい。わしはな、アリョーシャ、今日は自分からお精進をして、スープも肉もとらないんだ。だから、誰も呼ばずに置いたのだよ。一體、何か用でもあつて来たのか？」

「お氣分はいかがと思ひまして。」

「いよ。それに昨日、わしが自分の方から、お前に来いとはいつたけれど、あんなことはみんな出たらめだぞ。そんな心配をして貰はなくてもよかつたのにな。だが、わしもお前がこのこやつて来るだらうとは思つてゐたんだ。」

彼は意地わるさうな氣持を見せながらいひ出した。その間に彼は立ち上がつて、いかにも氣にかかる



やうな風で、鏡を覗いて自分の鼻を心配さうに眺めるのであつた。(恐らく、これでもう今朝から四  
べんくらゐになるかも知れぬ)。それから、また額の赤い布もちよつと體裁よく直した。

「赤い方がよろしい。白いのをしてゐると、病院くさいのでな。」と彼は仔細ありげにいつた。「とこ  
ろで、お前の方はどうだえ？ お前の長老はどんなだ？」

「大へんお悪いんです、事によつたら、今日は、おかくれになるかも知れませんが」とアリョーシヤは  
答へた。しかし、父はそれをろくろく聞かうともしなかつた。そればかりではなく、自分の發した質問  
すらもすぐに忘れてしまつてゐた。

「イワンは出て行つたよ」彼はいきなり言ひ出した。「あいつは一生懸命にミィチカの嫁さんを横取り  
しようとしてゐる。そのためにここに暮らしてゐるんだよ。」と彼は恨めしさうに言つて、口を歪めな  
がら、アリョーシヤを見つめた。

「一體、兄さんが自分でさういつたんですか？」とアリョーシヤは訊いた。

「もう、かなり前にいつたことだ。お前は何だと思つてたんだ？ 三週間も前にさういつたんだよ。  
あれはまさか、こつそり、わしを殺さうと思つて、ここへ來たんぢやあるまいな？ 一體、何のために  
やつて來たんだらう？」

「お父さん、何ですか！ 何だつてそんなことを仰つしやるんです？」とアリョーシヤはひどく口ご  
もつた。

「あいつは金をくれとはいはん、それは本當だ。しかし、それにしても、わしからは銀一文取れる譯

ぢやないんだから。わしはな、アレクセイさん、この世にできるだけ長く暮らすつもりですよ。このこ  
とは、お前たちに心得ておいてもらひたい。だからさ、一哥の金でもわしには大切なんだ。わしが長生  
きをすればするほど、なほさら大切になつて行くんどの。」黄色い夏の麻布で作つた大きな脂じみた  
外套のポケットに兩手をつきいれて、隅から隅へと部屋を歩きまはりながら、彼は言葉をつづけた、  
「今のところ、わしもまだやうやく五十五だから男の仲間だが、まだこれから先二十年くらゐは男の仲  
間でゐたいものだ。しかし、さうなると年をとつて——汚たならしくなるから、女子どもが好きこのん  
でわしの傍へ寄りついてはくれなくなる。さあ、ここで必要になつて來るのは金ぢやがな。だから、今か  
うやつて、上へ上へと蓄め込んでやるのぢや、それも自分一人のためなんだぞ、アレクセイさん、この  
ことを心得ておいてもらひませう。なぜといふに、わしは最後まで穢い世界に生きてをりたいからだ。  
このことを心得ておいてもらひませう。穢い世界の方がいい氣持だ。穢い世界のことを誰も悪くいふけ  
れど、誰だつて、その中に生きて居るんだ。ただ、みんなが内證でこそそとするのに、わしは公然と  
するだけの違ひなんだ。しかも、この正直といふことのために、世間の穢れた奴らが、わしを攻撃する  
のだ。ところでな、アレクセイさん、お前の天國へなんか行くのはわしの性に合はんがな。このことは  
心得ておいてもらひませう。それに身分のある人間が、よし天國といふ奴が本當にあるとしても、そん  
なところへ行くのは身分にかかはることだよ。わしの考へでは、一たび寢入つたら、もう眼をさましつ  
こはないと思ふんだ。それだけのことなんだ。若しお前に氣があるなら供養して貰はうが、氣が向かな  
んだら、それでいい、これがわしの哲學なんだよ。昨日イワンがここで巧いことをいつたよ。むろん、



みんな酔つ拂つては居つたがな。イワンは法螺ふきだよ、何もそんなに大した學者ぢやないがな、……それどころか、特別な教育といふほどのものさへなくせに。ただ、黙つて人の顔を見ながら、にこにこしてゐるんだ——それがあいつの奥の手なんだ。」

アリョーシャは黙つて聴いてゐた。

「何だつて、あいつはわじと話をせんのだらう？ 何かの拍子で物をいふことがあると、何だか妙にひねくれたことばかりいひをる。本當にイワンは悪黨だ！ なあに、グルーシエンカとは氣さへ向いたら、すぐにも結婚して見せる。金を持つた人間はただ氣さへ向いたら、何でもできるからな、アレクセイさん。イワンはこれが怖いもんだから、わしが結婚せんやうに見はりして、ミーチカをつついて、グルーシエンカと結婚せようとして居るのだ。かうして、グルーシエンカがわしのところへ来る邪魔をしようと思つとるんだ。（へん、もしもわしがグルーシエンカと結婚せなんだら、あいつに金でも残すと思つとるのかい！）また一面から見ると、ミーチカがグルーシエンカと結婚したら、イワンは見貴の裕福な花嫁を自分のものにしようといふ肚なんだ。これがあいつの胸算用なんだ！ 本當にイワンは悪黨だ！」

「お父さんはほんとにいらいらしていらつしやいますねえ。それは昨日のことのためですよ、行つて横におなりになる方がいいでせう。」とアリョーシャがいつた。

「それ見ろ、お前がさういつても、」はじめて頭に浮かんだことか何かのやうに、老人はいきなり言ひ出した。「わしは若しもイワンがそれと同じことをいつたら、わしはきつと腹を立てたに相違ない。お

前と話して居るときだけ、わしもいい氣持になるのぢやが、そのほかのときは、わしは全く意地の悪い人間だからな。」

「意地の悪い人間ぢやなくて、ひねくれてしまつた人なんですよ。」とアリョーシャは微笑みをうかべた。

「時にな、わしは今日、あのミーチカの強盜を牢の中へ打ちこんでやらうかと思つたが、今またどうしたものかと迷つてをるのだ。もちろん、流行を追ふ今の時世では、親父やおふくろを舊式な人間に見られるのが當り前のやうになつてゐるが、しかし、いくら今の時世だといつたところで、年よりの親父の髪をつかんで、おまげに靴の踵で顔を蹴飛ばすなんかといふことは、法律上ゆるされて居らん。しかも場所は當の親の家ぢやないか、それに、もう一度やつて来て、今度こそ本當に殺してやると、證人のをる前で廣言するとは何事だ。わしの了簡ひとつで、さつそくあいつを取つちめて、昨日のことを理由にして、今すぐにも牢に打ちこんでやれるんだが。」

「では、告訴する氣はないんでせう、ね？」

「イワンがわしをとめたのでな。なに、イワンなど問題にはして居らんのだが、わしも自分で一つ面白いことを考へたもんだからな……」

彼はアリョーシャの方へかがみこんでいかにも信用しきつたやうな調子で囁やいた。

「もし、わしがあの悪黨を牢の中へ入れたことを聞いたら、あの女はさつそくあいつの方へ走つて行くに相違ない。ところで、若しも、あいつがこの弱い老人を半殺しの目に合はせたといふことを、今日



にもあの女が聞きつけたら、きつとあいつを捨てて、わしのところへ見舞ひに来るだらう、……人間といふ奴はこんな性質を授かつてをるのだよ、——何でも反対々々と出かけたんだ。わしはあの女の性質をすつかり見透してしまつたんだ！　ところで、コニャクでも飲まんか？　冷し珈琲に杯の四つ一くらの落したら、なかなか味のいいもんだで。」

「いいえ、結構です、有りがたう。それよりこの麵麩をもらつて行きませう、下さるでせう。」といつて、アリョーシヤは、三哥ほどの佛蘭西麵麩を取つて、法衣のポケットに入れた、「それにお父さんもコニャクは上がらない方がいいでせう。」と彼父の顔を覗きこみながら、おづおづと言つた。

「お前のいふ通りだ。氣をいらいらさせるばかりで、静かな氣持にしてくれない。しかし、ほんの一杯きりだからな、……わしはちよつと戸棚から出してくる……」

彼は鍵を取り出して、戸棚をあけ、杯へ一つ注いで飲み干すと、また戸棚に鍵をかけて、それを元のポケットへしまひ込んだ。

「もう澤山だ、一杯ぐらゐでは、くたばりはせん。」

「そら、お父さんはずつと人が好くなりましたよ。」とアリョーシヤは微笑んだ。

「ふむ！　わしはコニャクを飲まんでもお前が好きだよ。しかし、相手が悪黨だつたら、わしも悪黨になるんだ。イワンはチェルマーシニヤへ行かんが、——一體、どういふわけだらう？　もしグルーシエンカが来たとき、わしがある大金をやりやせんかと、探らうとしてゐるんだ。どいつもこいつも悪黨だ！　それにわしはイワンといふ奴がさつぱり分からん。まるで分からん。どうしてあんな奴が生れ

たのか知ら？　あいつは、まるで精神のちがふ奴だ。まるでわしがあいつに遺産でもやるか何ぞのやうに思つてゐやがる。だが、わしは何も遺言なんか残して死にはせん。このことはお前たちもよく分かつて居るだらう。ところで、ミーチカの奴なんぞは、油蟲のやうに踏みつぶしてくれらわ。わしはゆふべ、スリッパで油蟲を何匹も踏みつぶしてやつた。足を載せたらぐしやりといつたが、お前のミーチャもやはりぐしやりといふんだ。お前のミーチャといつたのは、お前があいつを愛して居るからだ。尤も、お前があれを愛してをるからつて、びくびくするわしぢやないんだ。若しもイワンがあいつを愛して居るとなると、わしはわが身のために心配したかも知れん。しかし、イワンは誰も愛しはせん。あいつは人間の仲間ぢやないんだ。イワンのやうな奴は、人間ぢやない、風に舞ひ上がった埃だ。風が吹きすぎる、埃も飛んで行つてしまふ、……昨日、お前に今日やつて来いといひつけたとき、ひよいと馬鹿な考へが浮かんで来たよ。實は、お前の手を通して、ミーチカの考へを探らうと思つたのさ。若しも今わしが千か二千かの金をあいつに分けてやつたら、あの恥知らずの乞食みたいな奴だから、すつかりここから姿を隠してしまふだらうよ、五年くらゐのあひだ……いや、あはよくば三十五年だ。そして、グルーシエンカは連れて行かないのだよ。いや、いつそあれのことはきれいにあきらめてもらひたいのだ、承知するだらうか、え？」

「僕……僕、兄さんに訊いて見ませう、……」とアリョーシヤは呟やいた、「若し三千留すつかり耳を揃へておやりになつたら、或ひは兄さんも……」

「馬鹿をいへ！　今となつては訊くに及ばん。何も訊く必要はない！　わしはもう考へ直したんだ。」



ちよつと昨日そんな馬鹿な考へが頭に浮かんだまでのことだ。何一つくれてやるものか、鏝一文だつてやりはせん。わしは自分でも金がいるんだから。」と老人は手を振つた。「それよりも、あんな奴は油蟲のやうに踏みつぶしてやる。あいつに何もいつちやならんぞ、でないよ、また當にするだらうから。それにお前もわしのところに居つたつて、何もすることはないんだから、もう歸るがいい。ところで、あの許嫁のカテリーナさん、あの女をミーチャはいつも一生懸命に、わしからかくすやうにしてゐるが、一體、あの子はミーチャと結婚するんだらうか？ お前きのふあの女のところへ行つたらう……」

「あの人はどんなことがあつても兄さんを見棄てないでせうよ。」

「その通りだ、ああいふ優しいお嬢さん方は、あいつのやうな極道者や悪黨を好くもんだ！ わしに言はせれば、あんな顔いろの悪いお嬢さんといふものは、やくざな代物だ。普通ぢやないんだから……ああ！ 若しも、わしにあいつの若さと、あの年頃のわしの顔があつたら（なぜといつて、二十八時代のわしは、あいつより男ぶりがよかつたからな）、それこそ、わしもあいつと同じくらゐには、女を泣かせて見せるんだが、畜生め！ とにかく、グルーシエンカは手に入れさせはせんぞ、手に入れさせるものか……あんな奴、へし潰してくれるわだ！」

最後の言葉とともに、彼はまた凄じい權幕になつて來た。

「お前ももう歸れよ、ここに居つたところで、今は何の用事もありはせん。」と彼は鋭い調子で言ひ切つた。

アリョーシヤは暇を告げるために彼に近づいて、父の肩に接吻した。

「何だつてそんなことをするんだ？」と老人はいささか驚ろいた様子で、「また會へるぢやないか、それとももう會へないとも思ふのかえ？」

「決してそんなことはありません。僕は何の氣なしに……」

「うん、わしもやはり何の氣なしに……わしもただその……」と老人はわが子を見つめた、「おい、ちよつと」と、彼はうしろから聲をかけた、「いつかまた近いうちに來るといい、魚のスープを食べな。魚汁をこさへるから。今日のやうな奴ぢやなくつて、特別のをな。きつと來るんだぞ！ 明日は、きつと來い、よいか、來るんだぞ、明日は！」

アリョーシヤが戸の向うへ出て行くが早いか、彼はまた戸棚に近づいて、更に杯に半分ほど注ぐのであつた。

「もうこれでおしまひだ！」と呟やいて、喉をくつと鳴らしながら、又もや戸棚に鍵をおろすと、またその鍵をポケットにしまひ込んで、それから寢室へ赴いて、ぐつたりと床の上に横になると、そのまま直ぐに眠りに落ちてしまつた。



『やれやれ、お父さんがグルーシエンカのことを訊かなくてよかつたわい。』アリョーシヤはまたアリョーシヤで、父のところを出て、ホフラーコワ夫人の家に向かひながら、心の中で考へるのであつた。『さうでなかつたら、恐らく昨日グルーシヤと會つたことを、話さなければならなかつたらう。』アリョーシヤは二人の敵同志が昨晚のうちに元氣を恢復して、夜が明けるとともに再び石のやうに意固地になつたといふことを痛感するのであつた。『お父さんはいらいらして、意地が悪くなつてゐる。きつと何か考へついて、そのことを思ひつめてゐるのに相違ない。ところが、兄さんの方はどうだらう？ 兄さんもやはり、昨夜のうちに氣分を持ち直して、同じやうにいらいらした意地のわるい氣持になつてゐるに相違ない。それに、勿論、何かたくらんでるに相違ない。……ああ、どうしても今日の間に合ふやうに、兄さんを捜し出す必要がある……』

しかし、アリョーシヤは長くこんなことを考へてゐるわけに行かなかつた。途中で思ひもよらない出来事が、彼の身の上に起つたのである。それは見たところは大したことではなかつたが、彼に強烈な印象を與へた。小さな溝を隔てて（この町は到るところ溝川が縦横に貫通してゐるので）、大通りと並行してゐるミハイロフ通りへ出ようと思つて、廣場を通り抜けて横町へ曲がつたとき、小さな橋の手前で一塊りになつてゐる、小學生が眼に入つたのである。みんな年の行かない子供ばかりで、九つから十二つまでの、それより上の者はなかつた。みんな學校のかへりで、背に小さな背嚢を負つた者や、草の鞆を肩にかけてゐる者、短い上衣を着、小さい外套を着てゐる者などが居り、また中には、よく親に甘やかされた金持の子供が殊に好んで誇りとする、胴に襷のはいつた長靴を履いてゐる者までが交つて

ゐた。この一群は元氣のいい調子でがやがや話し合つてゐた。何かの相談らしい。アリョーシヤはモスクワ時代このかた、いかなる時でも、子供の傍を平氣で通りすぎる事ができなかつた。尤も、彼は三つくらゐの子供が何よりも好きであつたが、十か十一くらゐの小學生も好きであつた。

そこで、今もいろいろと心配ごとがあつたが、急に子供たちの方へまがつて行つて、話の仲間へ入りたくなつた。傍へ寄つて、彼らの襪齋色をした元氣のいい顔を眺めてゐるうちに、ふと氣がついて見ると、一同の子供はてんでに石を一つづつ持つてゐるのである。中には二つ持つてゐるものもあつた。溝川の向うには、こつちの群から凡そ三十歩ばかり隔つた垣根のわきに、もう一人の子供が立つてゐた。やはり、鞆を肩にかけた小學生で、脊の恰好から見ると、まだ十になるかならずであつた。青白い弱々しげな顔をして、黒い眼を光らせてゐる。彼は注意ぶかく試験でもするやうに、六人の子供の群れを眺めてゐた。彼らは明らかに友だち同志で、今しがた、一しよに學校から出て來たばかりであるが、平生からあまり仲がよくないのだといふことは、一寸見ただけでも察しがついた。アリョーシヤは白つばい髪の渦を巻いた血色のいい一人の子供に近づいて、黒の短い上着を着た姿を見廻はしながら話しかけた。『僕が君たちと同じやうな鞆をかけてた時分、みんな左の肩にかけて歩いたものだよ。それは右の手ですぐに本が出せるからさ。ところが君は右の肩にかけてるが、それでは出すのに面倒ぢやないの？』アリョーシヤは別に前々から用意した技巧を弄するまでもなく、いきなりかうした實際的な注意をもつて會話を始めた。全く大人がいきなり子供の――特に大ぜいの子供の信用を得るためには――これよりほかに話の始めやうがないのである。眞面目で實際的な話を始めること、そしてまるつきり對等の態



度をとること、これが何より肝腎なのである。アリオーシャにはこれが本能的に分かつてゐた。

「だつて、こいつは左ききなんだよ。」活潑で丈夫らしい十一ばかりの別な男の子が、すぐにかう答へた。そのほかの五人の子供は、しげしげとアリオーシャを見つめた。

「こいつは石を投げるんでも左なんだよ。」ともう一人の子が口を入れた。

ちやうどこのとき、一つの石が大勢の真中へ飛んで来て、ちよつと左ききの子供にさはつたが、そのまま飛びすぎてしまつた。しかし、その投げ方はなかなか上手で力が入つてゐた。それは溝の向かうの子が投げたのである。

「スムーロフ、やつつけろ、くらはしてやれ！」と一同が叫んだ。

しかし、左ききのスムーロフはいはれるまでもなく、すぐにまた復讐をした。彼は溝の向かうにゐる子供を目がけて石を抛つたが、うまく當らずに、石は地面を打つただけであつた。溝の向かうの子供は直ぐにまた一つ、こつちの群れを目がけて投げつけたが、今度はうまくアリオーシャにあたつて、かなり強く彼の肩を打つた。溝の向かうにゐる子供のかくしは、用意の石ころでいつばいであつた。それは三十歩あひだを隔ててゐても、外套のかくしがふくらんでゐるので察しられた。

「あれは君を、君をわざと狙つたんだよ。だつて君はカラマゾフぢやないの、カラマゾフぢやないの？」と子供らは笑ひながら叫んだ。「さあ、みんな一時にやるんだぞ、やれつ！」すると、六つの石が同時に群れの中から飛んで出た。そのなかの一つが向かうの子供の頭へ當つた。彼はぱつたり倒れたが、すぐにまた跳ね起きて、死物ぐるひに應戦を始めた。両方から絶え間のない戦がつづけられた。見

ると、こつちの子供らのかくしにも、用意の石がいつばいにつめてあつた。

「みんな何をやるんだ！ 恥づかしくないのかえ！ 六人で一人のものにかかつて行つたら、あの子を殺してしまふぢやないの！」アリオーシャは叫んだ。

彼は跳り出て、身をもつて溝川の向かうの少年をかばはうとして、飛んで来る石に向かつて突つ立つた。三人の子供はちよつとのあひだ、投げるのを控へた。

「だつて、あいつから先に始めたんだよ！」赤いシャツを着た少年が、腹を立てて、子供らしい聲でどなつた。「あいつは卑怯な奴だ。さつきクラツトキンをナイフで切りつけて、血を出したんですよ。クラツトキンは厭やだといつて、先生に言ひつけなかつたけれど、あんな奴、ひどい目に合してやればいいんです……」

「でも、どういふ譯なの？ どうせ君たちの方から先にかかつてんだらう？」

「ああ、また君の脊中へ當てやがつた。あいつは君を知つてゐるんだよ。」と、子供は叫んだ。「今あいつは僕たちでなくつて、君を狙つて投げてゐるんだよ。さあ、またみんなでやつつけろ、スムーロフ、やりそこなつたら駄目だぞ！」

かうしてまた石合戦が始まつたが、今度は前より一そう猛悪になつて来た。やがて一つの石が溝の向かうにゐる子供の胸に當つた。彼はきやつと悲鳴をあげると、泣きながら坂をのぼつて、ミハイロフ通りをさして行つた。すると、多勢の者は「やあい、怖くなつて逃げ出しやがつた。やあい、馬鹿野郎！」と喊聲をあげた。



「あいつがどんなに卑怯な奴か、あんたはまだ知らないんですね、あいつは殺したつて足りない奴です。」と短い上衣を着た少年が眼を光らせながらいつた。仲間で一ばん年上の者らしかった。

「あれが一體どんな子だつて？」とアリオーシャは訊いた、「告げ口やだともいふの？」子供たちは馬鹿にしたやうに、互ひに顔を見合はせてゐた。

「あなたもやつぱりあつちへ行くんでせう、ミハイロフ通りへ？」と前の少年が言葉をついだ、「それなら、すぐあいつを追つかけて訊いて御覽なさい、……ほら、ちよつと、あいつまたじつと立つて待つてますよ。あんたの方をじろじろ見てる。」

「あんたの方を見て、あんたの方を見て！」と子供たちはすぐに引き取つた。

「あのね、一つあいつにかう訊いて御覽、お前はぼろぼろになつた風呂場の絲瓜が好きかつて、ね、さういつて訊くんですよ。」

すると一時にどつと笑つた。アリオーシャは子供たちを、子供たちはアリオーシャをじつと見つめるのであつた。

「厭だつていつたら、君はぶんなぐられるよ。」とスミーロフが大きな聲で警戒した。

「いや、僕はそんな絲瓜のことなんぞ訊きやしないよ。だつて、君たちはこの絲瓜でもつて、あの子をからかつてるのに相違ないんだもの。それよりは、どうして君たちがあの子をそんなに憎むのか、あの子に直接きいてみるよ……」

「訊いて御覽、訊いて御覽よ！」と子供たちはまた笑ひ出した。

アリオーシャは橋を渡つて、垣根に沿うた坂路をのぼつて、のけ者にされてゐる子供の方へ眞つすぐに進んで行つた。

「氣をつけなよ、」と子供たちは後ろから注意した。「あいつは君だつて怖れやしないから、いきなりナイフを出して、不意打に君を斬るかも知れんよ、あのクラソトキンのやうに……」

少年はじつとその場を動かないで、彼を待ち受けてゐた。びつたりと傍へよつたとき、アリオーシャは自分の前に立つてゐる少年が、まだ九つを越さない、脊の低い弱々しい、瘦せて蒼白い、細長い顔をした子供だといふことを見てとつた。大きな黒い眼は恨めしさうに彼を見すゑてゐた。子供は體に合はない不恰好な、ひどく時代のついた外套を着てゐた。あらはな手を兩袖から突き出して、ズボンの左の膝には大きなつぎがあたつてゐた。右の方の靴は、親指にあたる爪さきに大きな穴があいて、その上からインキを塗つたあとが見える。ふくれ上がった兩方のかくしには石ころがいつばいにつまつてゐた。アリオーシャは彼から二歩ばかり前に立つて、訝かしげにその顔を見守つた。少年はアリオーシャの眼つきから推して、彼に自分をなぐる氣がないことを知つたので、自分の方でも力を抜いて先に口をきつた。

「僕は一人きりだけど、相手は六人もゐるんだ……僕は一人であいつらをみんな負かしてやる。」

彼はいきなり眼を光らせながらいひ出した。

「だけど、石が一つひどく君に當つたぢやない？」とアリオーシャがいつた。

「僕だつてスミーロフの頭へ當ててやつたんだ！」と少年は叫んだ。



「僕、あつちで聞いて来たんだが、君は僕を知つて、わざと僕を狙つて投げたんだつてね？」アリ  
ーシャはかう訊いた。

子供は沈んだ眼つきをして彼をながめた。

「僕、君を知らないけれど、君は本當に僕を知つてるの？」とアリョーシャは質問をすすめた。

「うるさいよ！」出しぬけに子供は痛癢聲を張り上げて叫んだ。しかも、今もなほ何かしら待ちうけ  
てゐるかのやうに、その場を動かうともせず、又もや恨めしげに眼を光らせた。

「ぢや、僕行かう、」とアリョーシャはいつた、「ただ、僕は君を知らないんだから、君をからかひも  
しないよ。あつちにゐる子供たちは、しきりに僕をからかつていつてたけれど、僕は君をからか  
ふ氣なんか少しもないんだからね。ぢや、さよなら！」

「やあ、坊主のくせに絹の股引をはいてる！」少年は相も變らず憎々しげな、挑むやうな眼つきで、  
アリョーシャを見送りながら叫んだが、今度こそ必らずアリョーシャが跳びかかつて来るに相違ないと  
思つたらしく、ついでにちよつと應戦の身がまへをした。しかし、アリョーシャは振りかへつて彼の方  
を見ただけで、そのまま向かうへ行きかかつた。が、三步とも踏み出さないうちに、少年の投げた石が  
彼の背中を強く打つた。しかも、それは少年のポケットにある石の中で、最も大きなものであつた。

「君はうしろからそんなことをするの？ あつちにゐる子供たちが、君はいつも不意打ばかりすると  
いつたのは本當なんだね。」とアリョーシャは振りかへつて、言つた。が、少年は死物ぐるひになつて、  
又しても石を投げつけた。しかも、今度は顔の眞ん中を狙つたのである。ところが、アリョーシャがう

まく身をかはしたので、石は彼の肘にあつた。

「よく君は恥づかしくないねえ！ 君に僕が何をしたといふんだらう？」と彼は叫んだ。

少年は今度こそもうアリョーシャが、きつと自分に飛びかかつて来るに相違ないと思つて、黙々と、  
挑むやうな風で、そればかりを待ちかまへてゐた。が、彼が今度もかかつて来ないのを見ると、まるで  
小さな野獸のやうに、すつかり夢中になつてしまつて、いきなり跳りあがつて、自分の方からアリョー  
シャに飛びかかつた。こちらが身をかはず暇もないうちに、両手で彼の左手を握りしめて、首をかがめ  
たと思ふと、いきなりぎゆつと中指にかみついて、しつかり食ひついたまま、十秒間ほど放さうとし  
なかつた。アリョーシャは精いつばい自分の指をもぎとらうとしながら、痛みにたへかねて叫び聲をあ  
げた。少年はつひに、指を放して後ろへ飛び退くと、以前と同じ隔たりをおいて突つ立つた。指は爪の  
すぐ傍を深さ骨に達するほど齒を立てられて、血がたらたらと流れて来た。アリョーシャはハンカチを  
取り出して、傷のところをしつかりと巻きつけた。その間、殆んどまる一分間ほどかかつたが、少年は  
じつと立つたまま待ちうけてゐた。つひにアリョーシャはその方へおだやかな視線を向けた。

「さあ、これでさう。」と彼はいつた、「ね、御覽、ずるぶんひどく噛んだぢやないか。でも、これで  
氣がすんだらう、ね？ さあ、今度こそ教へてもらはう、僕が一體、何をしたといふの？」

少年はきつとして彼の顔を見つめた。

「僕はまるで君を知らないし、會つたのも今がはじめてなのに、」アリョーシャはやはり落ちついた調  
子でかういつた、「しかし、僕が何もしないつて答はないだらう。君が何のわけもなしにあんなに僕を



いぢめるつて法はないだらう。僕が一體、何をしたといふの、君にたいして、どんな悪いことをしたといふの？」

返事のかはりに、少年は不意に大きな聲で泣き出して、いきなりアリョーシャのそばを駆け出した。アリョーシャはそのあとを追つて、靜かにミハイロフ通りの方へ歩いて行つた。そしてやはり歩調をゆるめずに、後ろを振り向きもしないで、遠く走つて行く少年を、長いあひだ見送つてゐた。少年はやはり聲をあげて、泣き泣き走つてゐるらしかつた。彼は折を見てこの少年をさがし出し、不思議な謎を解かなければならないといふ氣になつた。それにしても、今はそんな暇はないのである。

#### IV.

#### ホフラーコワ家にて

程なく彼はホフラーコワ夫人の家に近づいた。それは夫人の持家で、この町でも最も美しい立派な石造の二階建てであつた。ホフラーコワ夫人は大ていは、自分の領地のある他の縣と、自宅のあるモスクワに暮らしてゐたが、この町にも先祖から傳はつた家を持つて居り、それにこの郡にある領地が、夫人の三つの領地の中で大きかつた。しかもなほ夫人がこの郡へ來ることは、今もかなり稀れであつた。彼

女はアリョーシャを出迎へて控室まで駆け出した。

「あなた、あなた、あなたは新しい奇蹟のことを書いたわたしの手紙を御覽になりました？」と夫人は早口に、いらいらしてゐるやうに言ひ出した。

「ええ、拜見しました。」

「みんなにひるめて下さいましたか、みんなに見せて下さいましたか、あのお方は母親に息子を取り戻しておやりなすつたのです！」

「あのお方は今日おなくなりなさいます。」

「さうですつてね、聞きましたわ、知つてますわ。ああ、わたしはあなたと話したくてたまりません！ あなたでなければ誰かほかの人と、このことを話したくてたまりません！ いいえ、やはりあなたと、あなたに限りませう。ですけれど、わたし、長老様にどうしてもお眼にかかれぬのが、残念でたまりません！ 町ぢゆうのものが大さわぎをして、誰も彼も待ち受けてゐるのです。けれど、今……あなた、カテリーナさんが今、ここへ來ていらつしやるのを御存じ？」

「えつ、それは好都合でした！」とアリョーシャは叫んだ、「ぢや、僕はお宅であの人に會はしていただきます。あの人を今日ぜひ訪ねてくれるやうにと、昨日、僕にくれぐれも仰つしやつたのです。」

「わたし、すつかり存じてますわ、すつかり知つてますの。わたしは昨日あの人のところであつたことを詳しく聞きました、……そして、あの……賣女の怖ろしい仕打もすつかり…… C'est tragique ほんとうに悲 わたしがあの人<sup>ほんとうに悲</sup>の立場にゐたら、——わたしがあの人<sup>ほんとうに悲</sup>の立場だつたら何を仕出かしたかわかりません



よ！それに、あなたの御兄弟のドミトリーさんは何といふお方でせう、——まあ！アレクセイさん、わたしすつかりまごついでしまひましたわ。どうしたのでせう！今あちらへあなたの兄さんが、といつても、あの昨日の怖ろしい兄さんぢやありませんよ、も一人の方のイワンさんが、あの人といつしよにあちらにいらつしやるんですよ。そのお二人の話が實に大へんなんですよ。あなた、本氣になさらないでせうけれど、今お二人の間にどんなことが始まつてるでせう、まあ、どんなに怖ろしいこととせう。あれはあなた破裂ですよ。まさかと思ふやうな、怖ろしいお伽ばなしですよ。お二人とも何のためだか分からないことで、命まですてようとしてらつしやるのです。しかも自分でそれを承知しながら、かへつてそれを楽しんでいらつしやるぢやありませんか。わたし、あなたを待ちかねてゐましたの！待ちかねてゐましたの！第一わたし、あんなことを見てゐるわけに行きません。まあ、このことはあとですぐに詳しく、お話ししますが、今はちよつと別なことを申し上げなければなりません。しかも、一ばん肝腎なことですの。まあ、わたしもあらう者が、これが一ばん肝腎だといふことさへ忘れてゐるぢやありませんか。ねえ、一體、どういふわけで、リーズはヒステリーばかり起こすんでせう！あなたがおいでになつたことを聞くが早い、もう早速ヒステリーを始めるんですからね。」

「母さん、今ヒステリーを起こしてゐるのはお母さんで、あたしぢやなくつてよ。」不意に戸のすき間から、次の部屋にゐるリーズの甲高い聲が聞こえて來た。そのすき間ばかり小さかつたが、まるで罅の入つたかのやうであつた。アリョーシヤはすぐにこのすき間に氣がついた。恐らくリーズは例の肘椅子から身を乗り出しながら、このすき間から自分を覗いてゐるのに違ひないとは思つたものの、そこまで

は見分けがつかなかつた。

「ちつとも不思議はないよ、リーズ、お前の氣まぐれのために、わたしまでヒステリーを起こしたからといつて、ちつとも不思議はありませんよ。尤も、あの子は大へんからだが悪いんですよ、アレクセイさん、昨晚など、夜どほし體が悪くつて、熱に浮かされながら呻つてゐましたの！早く夜が明け、ヘルツェンシュトゥベが來てくれればいいがと、どんなに待ち遠しかつたか知れませんか。ところが、あのお醫者さまはどうも手當がしにくい、少し経過を見なくちやならんとおつしやるんですの。いつ來て見ても、何も分かりませんの一點張りなんですからね。あなたが家のそばまでいらつしやると、アレクセイさん、この子はすぐに大きな聲を立てて、そのまま發作を起こしましたの。そしてこの部屋へ椅子を引つばつて來てくれと申しましてね……」

「母さん、あたし、アレクセイさんのいらしたことを、ちつとも知らなかつたのよ。あたしがこの部屋へ來たいつて言つたのは、そんなことのためぢやないわよ。」

「嘘をいつてますね、リーズ、ユーリヤ(下)が入つて來て、この方のいらつしやつたことを知らせたぢやないの。あれは、お前に番兵を言ひつかつてゐるんだからね。」

「まあ、母さんてば、何てそんな間の抜けたことを仰つしやるんでせう。もし名譽恢復のために、さつそく何か大へん氣の利いたことが言ひたかつたらね、母さん、今はいつてらしたアレクセイ・カラマゾフさんにさういつてお上げなさいな、——『昨日のことがあつたあとで、あんなにさんざん冷やかされたのもお構ひなしに、けふ圖々しく家へ來る氣におんなすつたといふこと一つで、あなたは自分の



間抜けを證明していらつしやいますね。』つて……」

「リーズ、あんまり言ひすぎますよ。本當に、前から言つておきますが、しまひには容赦してはおきませんよ。一體、誰がこの方を冷やかしてます？ それどころか、わたしはこの方の來て下すつたのが、大へん嬉しいんですよ。この方はね、わたしにはなくてならない方なんですよ、ああ、アレクセイさん、わたしは本當に不仕合はせですわ！」

「一體、母さん、どうなすつたの？」

「まあ、リーズ、お前の氣まぐれと、うはついた氣持と、お前の病氣と、あの怖ろしい、夜通しの熱と、あの怖ろしいいつまでたつても際限のないヘルツェンシュトゥベと……まあ、何よりも厭やなのは、いつまでも、いつまでも果てしないことです！ そのうへに、まだいふことがあつたぢやないの？ ……それからまた、あの奇蹟までがね！ アレクセイさん。わたしにあの奇蹟のためにどんなに驚ろかさされ、どんなショックを受けたか分かりません！ おまけに、あそこの客間では、とても見てゐられないやうな悲劇が起こつてるでせう。いえ、たまりませんわ、わたし、前からあなたに言つておきます、とても見てゐられないんですよ。でも、若しかしたら、悲劇でなくつて喜劇かも知れませんわ。ところで、あのゾシマ長老は明日まで大丈夫でせうか、え、生き延びられるでせうか？ ああ、本當にわたしはどうしたんでせう！ しよつちう、かうして眼をふさぐたびに、何もかもみんなつまらない氣がするぢやありませんか。」

「僕、折り入つてお願ひがあるんですが、」といきなりアリオーシャが話をさへぎつた。「何か指を巻

くやうなきれいな小ぎれを下さいませんか。ひどく怪我をしまして、それがしくしく痛んでたまらないものですから。」

アリオーシャは子供に咬まれた指を解いて見せた。ハンカチは血に染まつてゐた。ホフラーコワ夫人は悲鳴をあげて、眼を細めた。

「あらまあ、何といふ傷でせう、本當に怖ろしい！」

しかし、リーズは戸のすき間からアリオーシャの指を見るや否や、いきなり力いつばい戸を開け放してしまつた。

「入つてらつしやい、あたしの方へ入つてらつしやい。」と彼女は命令するやうな力のもつた聲で叫んだ。「もう冗談どころぢやないんだよ！ まあ、何だつてこんな時に黙つてぼかんと立つてらつしやるの？ 血が出てだめになつてしまふぢやないの！ あなた、どこでこんな怪我をなすつたの！ まあ、何より先に傷を洗ふのに水があるわ！ 水があるわ！ だけど、それよりは、冷たい水の中に浸して、そのままじつとしてる方がいいわ、じつとそのまま、……さうすると、痛みが止まつてよ。早く、早く水を、母さん、嗽ひ茶碗へ……ねえ、早くさ。」と彼女は神経質に叫んだ。彼女はすつかりびつくりしてしまつた。アリオーシャの傷が怖ろしい印象を與へたのである。

「ヘルツェンシュトゥベを呼んで來ませうか？」と夫人は叫んだ。

「お母さんは、あたしを殺してしまふつもりなの。あなたのヘルツェンシュトゥベなんか來たつて、『どうしても分かりません』といふに決まつてるわ。水を、水を！ 母さん、後生だから、御自分で



行つて、ユーリヤをせき立てて頂戴。あの女は鈍くて、用を言ひつけても間に合つたことなんかないんですもの！ねえ、早くつてばさ、母さん、でなければ、あたし死んぢまつてよ……」

「こんなこと何でもありませんよ！」アリョーシャは母と子の驚ろき方にびつくりしてかう叫んだ。ユーリヤは水を持って駆け込んで来た。アリョーシャはその中へ指を浸した。

「お母さん、後生だからガーゼを持って来て下さいな、ガーゼを！それからあの切傷につける、氣持のわるい濁つた薬があつたでせう。何といひましたつけ！家にあるわ、あるわよ、あるの、あるのよ……母さん、御存じでせう、あの薬の瓶がどこにあるか。ほら、お母さんの寝間の右側にある戸棚よ、あそこに壘とガーゼがあるのよ……」

「すぐ持つて来るから、そんなに騒がないで、おくれ、そんなに心配することはありませんよ。御覽なさい、アレクセイさんは御自分の不幸を、立派にこらへてらつしやるぢやありませんか。ですけれど、どこであなはそんな怖ろしい怪我をなすつたんですの？」

ホフラーコワ夫人は出て行つた。リースはただ、そればかりを待ちかまへてゐた。

「先づ第一に、」とリースは早口にひひ出した、「どこであな、そんなお怪我をなすつたのか、それを眞つ先に教へて頂戴。そのあとでわたしまるで違つたことをお話ししますから。さあ！」

母夫人の歸つて来るまでの時間が、彼女にとつてどんなに貴いかをアリョーシャは本能的に悟つたので、例の小學生との謎のやうな遭遇を大急ぎで、簡単に、しかも、正確に、はつきり物語つた。聞き終つたとき、リースは両手を拍つた。

「まあ、そんな着物を着たままで、ちつぽけな子供たちにかかり合ふなんて？」と彼女はまるで自分がアリョーシャに對して、何かの権利でもあるかのやうに、腹立たしげに叫んだ、「そんなことをなさるところを見ると、あなたもやはり坊やなのねえ、すつかり坊やなんだわ！ただ、その生意氣な小僧のことは是非とも探り出して、わたしにすつかり話して聞かして頂戴、だつて、それにはきつと何か曰くがあるに相違ないんですもの。さあ、今度は第二の話ですが、その前に訊いて置かなくてはならないことがありますわ。アレクセイさん、あなたはその傷が痛んでも、思ひ切つてつまらないお話しをすることが出来ますか？つまらないことといつても、眞面目に話さなくちや駄目なの。」

「出来ますとも、今はさう大して痛くありませんから。」

「それはあなたが指を水の中へつけてるからよ。もう水を入れ替へなくちやなりませんわ。でないよ、すぐに暖かくなつてしまひますものね。ユーリヤ、大急ぎで水のかけらを穴藏から出して、別の嗽ひ茶碗に水を入れておいで、さあ、あれも行つてしまつたから、わたし用事にとりかかつてよ。アレクセイさん、今すぐあの手紙を、あたしが昨日あなたに上げた手紙をかへして頂戴。今すぐよ、だつてお母さんが今にも歸つて来るかも知れませんから。あたしはもう……」

「僕はいまあの手紙を持つてゐないんです。」

「嘘おつしやいよ、持つてくるくせに。あたし、さう仰つしやるだらうとは思つてたの。あの手紙はこのポケットにあるわよ。あたし、どうしてあんな馬鹿なことをしたらうと思つて、ゆうべ夜つびて後悔したのよ。さ、すぐに返して頂戴、返して頂戴！」



「僕あつちへ置いて来たんです。」

「でも、あなたはあんな馬鹿なことを書いた手紙を讀んで、あたしをほんの小娘……ちつぽけな、ちつぽけな小娘と思はないではゐられないでせう！ あたし、あんな馬鹿なことをしたのは、あなたに濟まないと思ひますけれど、手紙だけは是非もつて来て頂戴。もし本當にいま持つてらつしやらないとすれば、今日にでも来て頂戴、きつとよ、きつとよ！」

「今日といふ譯にはどうしても行きません。何しろ、寺へ歸りますと、もう二日三日、ことによつたら四日ばかり、こちらへは参りませんからね。だつて、ゾシマ長老が……」

「四日ですつて、そんな馬鹿げたことを！ ねえ、あなたは思ふ存分、あたしのことを笑つたでせう？」

「僕は少しも笑ひやしません。」

「どうしてですの？」

「それはあなたをすつかり信用したからです。」

「あなたはわたしを侮辱なさるのね？」

「どういたしまして、僕はあの手紙を讀んだとき、すぐにさう思ひました——これは本當にこの通りになるに相違ないつて。なぜつて、僕はゾシマ長老がおかくれになつたら、すぐに寺を出なければならぬんです。それから僕はまた學校へ入つて試験を受けるつもりです。そして法律で決められた時が來たら結婚させよう。僕はいつまでもあなたを愛します。これまでに僕は落ちついて考へてゐる暇がなかつ

たんですけれど、それでもあなた以上の妻を見いだすことはできないと思ひました。それに長老も僕に結婚をせよとおつしやいましたし。」

「だつて、わたし片輪よ。肘椅子に乗せて引つ張つてもらつてるのよ。」とリーズは頬をかすかに赧らめながら笑ひ出した。

「僕は自分であなたを引つ張つて歩きます。しかし、それまでにはよくなると思ひますよ。」

「あなたは氣が違つたんぢやなくつて？」とリーズは神経質らしく、いひ出した、「あんな冗談を眞面目にとつて、そんな馬鹿なことを言ひ出すんですもの！……あら、お母さんだわ、却つて好都合だわ。母さん、どうしてあなたはそんなにいつもいつも、のろいんでせうね。どうしてそんなに手間がとれるんでせうね！ ほら、もうユーリヤが氷を持つて來たわ！」

「まあ、リーズ、そんな聲を立てないでくれ——お願ひだから、そんな聲を。わたしはそのわめき聲を聞くと、……だつて仕方がないぢやないの、お前がまるで別なところへガーゼをしまひ込んでるんだもの、……わたしさんさん捜したんぢやないの、……事によつたら、おまへわざとあんなことをしたんぢやないの。」

「だつて、この人が指を咬まれて來ようなんて、まるで知るわけがないぢやありませんか。もしそれが前から分かつてたら、本當にわざとさうしたかも知れないわ。母さん、あなたは太へん氣の利いたことをいふやうにおんなすつたのね。」

「氣の利いたことでもどうでもいいけど、まあ、リーズ、アレクセイさんの指といひ、そのほかのこ



とといひ、どんな氣持がすると思ひだえ！ ああアレクセイさん、わたしを困らすのは一つ一つの事柄ぢやありません、ヘルツェンシュトゥベなんかのことぢやありません。みんな全體ひつくるめてです。みんな一しよにです。だから、わたしとして辛抱がしきれないんですよ。」

「澤山だわ、母さん、ヘルツェンシュトゥベのことなんか澤山だわ。」とリーズは面白さうに叫んだ。

「さあ、早くガーズを頂戴。これはただのグーラー<sup>\*</sup>下液だわ。アレクセイさん、今やつと名前を思ひ出したわ、だけどこれはいい薬よ。ところで、お母さん、どうでせう、この人は途中で餓鬼どもと喧嘩をしたんですつてさ。そして、これはね、その中の一人に咬まれた傷なんですとさ。ねえ、この人やはり赤ん坊だわ、さうぢやなくつて？ ねえ、そんなことをする子供に結婚なんかできやしないわね。だつて、この人は結婚したいつていふんですもの、をかしいわね、母さん。ほんとにこの人がお嫁さんをもつなんて、考へてもをかしいぢやないの。怖ろしいぢやないの？」

リーズはするい眼つきをしてアリョーシヤを眺めながら、絶えず小氣味わるく、微かに笑ふのであつた。

「え、どうして結婚なんてことを、リーズ、何だつてお前はそんなことをだしぬけに言ひ出すの？ そんなことをいふ場合ぢやありませんよ……それに、その子供はひよつとしたら、恐水病にかかつてるかも知れないぢやないの。」

「あら、お母さん！ 恐水病の子供なんてあるものなの？」

「ゐないつて、なぜ？ まるでわたしが馬鹿なことでもいつたみたいだわね、若しその子供に狂犬が

咬みついたとしたなら、今度はその子供が、手近の人を咬むやうになるんですよ。まあ、リーズは、上手に繻帯をしましたねえ、アレクセイさん。わたしには、とてもうまくできませんわ。今でも痛みますの？」

「もう大したことはありません。」

「時にあなたは水が怖くありませんの？」とリーズは訊ねた。

「まあ、もう澤山よ、リーズ。全くわたしもあんまりあわてて、恐水病の子供なんて言ひ出したけれど、すぐお前はそんな馬鹿なことを持ち出すんだもの。時に、カテリーナさんはあなたのいらつしたことを聞くと、早速わたしのところへかけつけてらしたんですよ。あなたを待ちこがれていらつしやるのよ、たまらないほど……」

「まあ、母さん！ あなた一人であつちへいらつしやいな。この人は今すぐいらつしやるわけに行きませんわ。だつて、あんなに痛がつてらつしやるんですもの。」

「決して痛がつてはゐません、平氣で行けますよ……」とアリョーシヤはいった。

「なんですつて、あなたいらつしやるの？ ぢやあなたは？ ぢやあなたは？」

「何ですか？ なあに、僕はあつちの用をすましたら、またここへ歸つて來ますよ。そしたらあなたのお氣に入るだけお話ししませうよ。だつて、僕は今、とてもカテリーナさんに會ひたい譯があるんですよ。何しろ、僕はどつちにしる今日は、できるだけ早く寺へ歸らうと思つてますからね。」

\* 佛蘭西の外科醫グーラーの創製にかゝる洗滌液。(譯者註)



「母さん、早くこの人を連れて行つて頂戴な。アレクセイさん、カテリーナさんのあとでここへ寄らうなんて、そんな御心配には及びませんよ。あなたは眞つすぐにお寺へいらつしやい。その方が本當ですよ。わたし眠たくなつちやつたわ、ゆうべ一寸も寝なかつたもんですから。」

「まあ、リーズ、そんな冗談をいふもんぢやなくつてよ。でも、本當に寝んだらどう！」とホフラーコワ夫人は叫んだ。

「僕には分かりませんが、どうしてかう……僕はもう三分ほどここにゐます。若し何なら、五分でも。」とアリョーシヤは呟やいた。

「五分でもつて！ ねえ、お母さん、早くこの人を連れてつて頂戴よ、この人はお化けだわ！」

「リーズ、お前は氣でも違つたのかい。さあ、参りませう、アレクセイさん。この子は今日あんまり氣まぐれがひどすぎますよ、わたし、この子の氣をいらさらせるのが怖くてなりません。ああ、神経質の女を相手にするのは辛いですね。アレクセイさん！ でも、本當にこの子はあなたの傍にゐるうちに、眠くなつたのかも知れませんよ。まあ、よくそんなに早く、この子に眠氣をつけて下さいましたわね、本當にいい鹽梅でしたわ！」

「あら、まあ、お母さんは大へん愛想のいいことがいへるやうになりましたわね。御褒美にあたし接吻して上げるわ。」

「ぢや、わたしもお前を。ところで、アレクセイさん。」アリョーシヤと一しよに部屋を出ながら、夫人は秘密めかしい物々しい調子で早口に囁やいた、「今わたしはあなたに何も仄めかす氣もありません

し、この幕を上げるつもりもありませんよ。けれど、入つて御覽なすつたら、御自分ですこの様子がお分かりになりませう、本當に怖ろしいことです、ひどく突拍子もない狂言ですよ！ あの人はイワンさんを愛してらつしやるのに、御自分では一生懸命にドミトリーさんを愛してゐると、強情を張りなするつて。恐ろしいわねえ！ わたしはあなたと一しよに入つて行つて、若しも追ひ出されなかつたら、しまひまでじつと坐つてゐませうよ。」

### 客間における破裂

しかし、客間ではもう話が済んでゐた。カテリーナは思ひきつたやうな風をしてゐたが、ひどく昂奮してゐた。丁度、そのときアリョーシヤとホフラーコワ夫人が入つて來たのであるが、イワンは席を立つて歸らうとしてゐた。彼の顔はいささか蒼ざめてゐたので、アリョーシヤは心もとなく覗きこんだ。といふのは、今アリョーシヤにとつて一つの疑惑が、いつの頃からか彼を悩ましてゐた一つの不安な謎が、解決されようとしてゐるからであつた。一月ほど前から彼はゐるんな方面から、兄のイワンがカテリーナに思ひを寄せて、實際にミーチャの手から『横取り』するつもりでゐるといふ噂を、仄めかされてゐ



たのであつた。ついこの間まで、このことはアリョーシヤには、ひどく心配ではあつたが、しかも實に不思議なことに思へてならなかつた。彼は二人とも愛してゐたので、二人の間のかうした競争が怖ろしくてたまらなかつた。さうかうしてゐるうちに、昨日ドミトリーが不意に彼に面と向かつて、自分ばかりでイワンの競争を喜んでゐる、その方が色々な點において自分のために都合がよいといつたのである。どうして都合がよいといふのが？ グルーシエンカと結婚するためなのか？ しかしアリョーシヤには、こんなことは自暴自棄な最後の手段としか思へなかつた。のみならず、彼はつい昨日の晩まで、つきりカテリーナ自身も熱情的に、執拗に兄ドミトリーを愛してゐるものばかり思ひ込んでゐた（しかし、この信念もただ昨日の夕方までであつた）。おまけに、――彼女はドミトリーを愛してゐる、いかにこのやうな愛が奇怪に見えるとしても、現在のままの兄を愛してゐるに相違ないといふ考へが、どういふ譯か、絶えず彼の心に浮んで來るのであつた。ところが、昨日グルーシエンカの騒ぎに出會つて、いきなり別な考へが彼の心を打つた。たつた今、ホフラーコワ夫人のいつた『破裂』といふ言葉は、危うく彼を慄へ上がらせるところであつた。つまり、今朝の夜明け頃、うつらうつらしてゐるうちに、恐らく自分で自分の夢に答へるつもりであつたらう、だしぬけに『破裂、破裂』と叫んだからである。彼は夜通し例のカテリーナのところでの怖ろしい場面を夢みてゐた。カテリーナはイワンを愛してゐるのに、何かの戯れのために、何かの『破裂』のために、故らに自分を欺いて、何やら感謝の念でも現はしたさに、兄ドミトリーを愛してゐるやうに見せかけて、わが身を苦しめてゐるのだと、今ホフラーコワ夫人があけすけに、しつこく言つたのをきいて、アリョーシヤは心をうたれたのであつた。『さうだ、

事によると、實際にあの言葉には、充分の眞實が含まれてゐるのかも知れん！』と考へたのである。

しかし、若しもさうだとしたら、イワンの立場はどうであらう？ アリョーシヤは一種の本能によつて、カテリーナのやうな性格は、何かを支配せずには居られない、ところが、彼女に支配できるのは、ドミトリーのやうな男であつて、決してイワンではないのだと直感した。たしかにドミトリーは、たとひ長い月日を要するとしても、いつかは彼女に屈服して、しかも幸福を感じ得るに相違ない（それはアリョーシヤのむしろ望むところであつた）。しかし、イワンはさうではない。イワンは彼女に屈服することもできないし、また屈服しても幸福にならう筈がないのである。アリョーシヤはどういふわけか、心の中で、イワンに關してかういふ風な考へを形づくつてゐたのである。彼が客間に入つたとき、かうした動搖と想像が彼の頭を掠めて行つた。するとまた別な考へが、又もや不意に、おさへることのできない力をもつて、彼の心に忍びこんで來た。『若しも、この人が誰も愛してゐなかつたらどうだらう、二人とも愛してゐなかつたらどうだらう？』と。

序でにいつておくが、アリョーシヤはかういふ風に自分の考へを恥づかしがるやうな氣味で、この一ヶ月の間、どうかして、かういふ考へが浮かんて來る度に、自分で自分を責めるのであつた。『一體、自分なんか愛だの女性だのといふことが少しでも分かるかしら？ 一體、どうしてこんな結論ができるのか？』かういつたやうな考へや臆測をした後で、必らず彼は、心の中でかういつて自分を責め立てるのであつた。といつて、考へずに居るわけにも行かなかつたのである。今、二人の兄の運命から見ると、この争ひは實に重大な問題であり、その解決の如何によつては、非常な結果を生ずるといふことは、



彼にも本能的に分かつてゐた。

『一匹の蛇が他の一匹を咬み殺すのだ。』とは、昨日イワン兄が父とドミトリイのことで、憤慨しながら言つた言葉であつた。して見ると、イワンの眼から見ても、ドミトリイは蛇なのである。恐らく、ずつと前からさうなのかも知れない。事によると、イワンがカテリーナを見たときからではなからうか？もとより、この言葉は何の氣なしに、イワンがうつかり口を迂らせてのことに相違はないが、何心なく出ただけか、一そう重大な意味があるのだ。若しさうだとすれば、この場合、平和が訪れるわけではないではないか？ それどころか、かへつて、一家のうちに、憎しみと、恨みとの、新しい根拠が現はれるだけではないか？ それにしても、アリョーシャにとつては、二人のうち誰に同情したらいのか？ 一人々々の者に何を期待してやつたらいのか？ といふことが大きな問題であつた。彼は二人の兄を両方とも愛してはゐるが、この怖ろしい矛盾の中にあつて、一人々々に何を望んでやつたらいのか？ であらう？ この迷宮に入つたら、誰しも途方に暮れてしまふであらう。ところが、アリョーシャの心は暗暗裡に葬られることをいさぎよしとしない。なぜといつて、彼の愛といふものが實行的な性質のものである。消極的な愛は、彼には不可能なことであつた。一たび愛したとなると、すぐに救済に取りかかるのである。このためには確固たる目的を立てて、夫々の人にどんなことが望ましく、また必要であるかといふことを、正確に知らなければならぬ。かうして目的の正確なことを確かめてこそ、初めて自然なやり方で、各々に助力を興へることが出来る。ところが、今は何ごとも正確な目的の代りに、曖昧さと混亂とに充たされてゐるのである。たつた今、『破裂』といふ言葉が出たが、しかしこの『破裂』

といふ言葉を何と解釋したらいいのか？ このあらゆるものが混沌としてゐる中では、最初の一句からして、もう彼には呑みこめないのである。

カテリーナはアリョーシャの姿を見るや否や、席を立つてもう歸り支度をしてゐるイワンにむかつて、早口に嬉しさに話しかけた。

「ちよつと！ ちよつと待つて下さい？ わたしは自分が心から信用してゐるこのお方の御意見が聞きたいのです。奥さん、あなたも行かないでゐて下さい。」と彼女はホフラーコワ夫人に向かつて、言ふのであつた。彼女はアリョーシャを自分の傍へ坐らせた。夫人はその向かひ側のイワンと並んで腰をおろした。

「ここにゐらつしやる皆さんは、世界中に又とないわたしのお友だちばかりですわ、わたしの大切なお友だちばかりです。」彼女は熱しながら、かういつた。が、その聲はいひ知れぬ苦しみの涙に慄へてゐた。アリョーシャの心は、又もや彼女の方へ引き寄せられた。「アレクセイさん、あなたは昨日のあの……怖ろしい出来事を御自分で御覧になりましたわね。わたしがどんな様子であつたかといふことも、よく御存じでいらつしやいますわね。イワンさん、あなたは御覧になりませんでしたけれど。あの方は御覧になつたのですよ。昨日このお方がわたしのことを、何とお思ひになつたか存じませんけれど、たつた一つよく分かつてゐることがございますの、それはね、若しも今日、いま直ぐあれと同じことがもう一度くりかへされたら、わたしはあれと同じ氣持を現はし、あれと同じ言葉を吐き、あれと同じ動作をしたに相違ありません、……アレクセイさん、あなたはわたしの動作を覚えていらつしやる



でせう。あなた御自身わたしのある一つの動作を止めて下すつたんですものね……（かういひながら、彼女は顔を赧くした。その眼は急に輝やき出した）。アレクセイさん、はつきり申しますけれど、わたしはいかなるものとも妥協することはできません。それにわたし、今となつては、本當にあの人を愛してるかどうか、自分でもよく分かりませんの。わたし、あの人が可哀想になりました。これは愛のしるしとしては、あんまり大したものぢやありませんね。若しも、わたしがあの人を愛してゐるのでしたら、やはりずつと愛してゐるのでしたら、可哀想になんかならないで、かへつて、憎んだでせうよ、……」彼女の聲は慄へ、睫には涙が光つてゐた。アリョーシヤは心の中では、顫へてゐた。「この娘は正直で、眞ごころがある」と彼は考へた、「それに……それに、この人はもうドミトリーを愛してはゐないのだ！」

「その通りですわ！ その通り！」どホフラーノコウ夫人は叫んだ。

「ちよつと待つて下さいまし、奥さん、わたしはまだ肝腎なことを申して居りませんの。昨夜考へたことを、まだすつかりいつてしまはないんですの、わたしの考へは怖ろしいこと——わたしにとつて、怖ろしいことかも知れません、それはわたしにも感じられますけれど、わたしはもうどんなことがあつても、この決心を變へません、どんなことがあつても、一生涯この決心を押し通します。イワンさんは優しい、親切な、鷹揚な心を持った、永久に變ることのないわたしの相談相手で、人の氣持のよく分かる方で、世界中に又とない、わたしのたつた一人のお友だちですけれど、この方もすべての點においてわたしに賛成して、わたしの決心を褒めて下さいましたの、……この方はよく御存じですよ。」

「さう、僕は賛成してゐます。」静かではあつたが、しつかりした聲で、イワンはかういつた。

「でも、あたし、アリョーシヤにも（あら、御免なさい、アレクセイさん、わたし、ついうつかりして、アリョーシヤなどと呼び捨てにしました）——わたしはアレクセイさんにも、今わたしの二人の親友の眼の前で、この決心が間違つてるかどうか、遠慮なく言つて頂きたいんです。わたし、蟲が知らせたくんでせうか、あなたが、わたしの可愛い弟のアリョーシヤが、（だつて、あなたが本當にわたしの可愛い弟なんでもものね、）と彼女は自分の熱した手でアリョーシヤの冷たい手を取りながら、感きはまつたかのやうにいふのであつた、「わたし、こんなに苦しんでゐますけれど、あなたの決心と、あなたの賛成さへあれば、わたしは氣が安まるに相違ないと、前から感じてゐましたの。あなたのおつしやることを聞いてゐると、わたしも落ちついて、諦められるんですものね、わたし前からさう思つてゐましたわ！」

「あなたは僕にどうしろつておつしやるか分かりませんよ。」とアリョーシヤは顔を赧らめながらいつた、「僕はあなたを愛してゐます、僕はいま自分自身にたいするよりも、むしろ餘計あなたに幸福を望んでゐます！ それは自分でも分かつてますけれど、しかし、僕はこの事件のことは何も知らないんです……」彼はなぜかしら、口早に言ひ足した。

「この事件ですつて、アレクセイさん、今、この事件で何より大事なことは名譽と義務です。それから、もう一つ、何といつていいか、分かりませんが、義務よりも、もつと高いものがあるんです。心の中に、かういつたやうな抑へることのできない感情があることは、分かつてます。そしてこの感情が



わたしをぐんぐん引つ張つて行くのです。でも、何もかも一言で言ひつくすことができません。わたしはもう決心しました。たとひ、あの方が、あの……わたしにはどうしても、どうしても許すことのできな  
い賣女と結婚なすつても、（と彼女は重々しげに言ひ出した。）わたしはやはりあの人を見捨てません  
わ！ 今から決して、決して、見捨てないつもりですの！」と彼女はやるせなげな、痛々しい感激が、  
急に迸つたやうな調子でいふのであつた。「でも、何もあの人の後を追つかけ廻して、あの人目の前  
へうるさく顔を出して、あの人を苦しめようといふのぢやありませんの。いいえ、どういたしまして。  
わたしはどこへでも、お望みの町へ越して行きます。けれど、わたしは死ぬまで。たゆむことなく、あ  
の人を見はるつもりです。もしあの人があの人と一しよになつて、不幸にでもなんなすつたら、それは  
今にも必らず起ることですけれど、さうしたら、わたしのところへいらつしてもかまひませんわ、  
わたしお友だちとして、妹としてあの人を迎へます。……もちろん、ほんの妹といふだけのことですわ、  
それはもういつまでも、その通りですの。わたしが本當の妹だといふことを、——生涯を犠牲にして  
までもあの人を愛してゐることを、最後にはあの人にも分かつていただきたいと思います。わたしはこの目  
的をどうしてもやり遂げます。あの人、しまひにはわたしの本心をわかつて下すつて、何の遠慮もな  
しに、何もかも、わたしに打ち明けるやうに、是が非でもして見せるつもりです！」彼女はのぼせてゐ  
るかのやうに叫んだ、「わたしはあの人神になつて、あの人にお祈りをさせます、——それは少くも、  
あの人義務です。だつて、あの人があの人に背いたおかげで、昨日あんな酷い目に合つたんです、  
もの。わたしはあの人に、わたしが一度約束した言葉を守つて、生涯あの人に忠實にしてゐるのに、

あの人間違つた考へをもつて、わたしに背いてしまつたことを、一生の間に、よくよく分かせてあ  
げたいのです。わたしは、……わたしは、ただもうあの人幸福の手段になるばかりです（どういつた  
らいいでせうね）、あの人幸福の道具になります、器械になります。これは一生涯、本當に一生涯、  
死ぬまで同じことです。そしてあの人にこのさき生涯の間、それを見てもらひます！これがわた  
しの決心なのでございます！ イワンさんはこの決心に賛成を下さいました。」

彼女は息を切らしてゐた。恐らく、彼女はもつともつと品位を保つて、もつと巧妙に、もつと自然  
に、自分の考へを話すつもりであつたらう。然るに、結局、あまりにも性急に、あまりにも露骨なも  
のとなつてしまつたのである。大人氣なく感情に走りすぎたやうな點も多かつたし、ただ昨日の痛癢の  
名残にすぎないやうな點も、ただの空威張にすぎないやうな點も多かつた。彼女自身も、それに氣がつ  
いたので、何となくその顔は、急に暗くなり、眼つきも悪くなつて來た。アリョーシヤは直ぐに、それ  
に氣がついて、同情の念が心の中で微かに動くのを感じた。丁度そのとき、兄のイワンも傍から口を出  
した。

「僕はただ自分の考へを述べただけです。」と彼はいつた、「これが若し、ほかの女であつたら、ごつ  
ごつして、きれぎれなものになつたでせうが、あなただつたから違ふのです。ほかの女だつたら、嘘に  
なつたでせうが、あなただつたから正しいのです。僕は何と理由をつけたらよいか分かりませんが、あ  
なたがこの上もなく眞ごころがあり、それゆゑにまた正しいといふことは、よく分かつてます。」  
「でも、それはただこの一瞬間だけぢやありませんか……しかも、ほんのこの一瞬間といふのは、ど